

# 鶴翔会

令和3年4月1日発行 2021年 130号

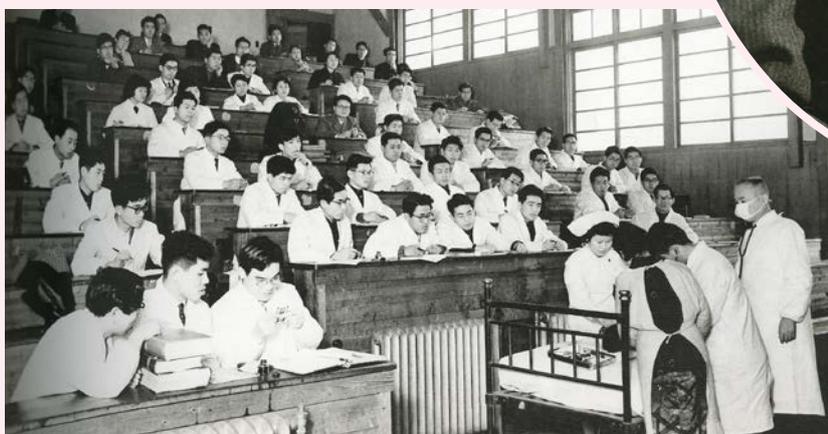
## 岡山医学同窓会報



実習風景



浜本英次 教授



臨床講義風景



研究室における浜本教授

## 表紙の写真

---



はまもと えいじ  
浜本 英次 (1903~1997)

明治36年(1903)兵庫県生まれ。昭和4年(1929)京都帝国大学医学部を卒業後、引き続き同大学で学究生活を送り、昭和11年(1936)7月京都帝国大学から医学博士の学位を受けた。太平洋戦争が激化する昭和18年(1943)5月、岡山医科大学小児科教授に就任。

戦中、戦後の社会混乱の激流の中にあつて小児科学教室の発展を目標に尽くされた。教授就任の直後の昭和18年には、明治42年以来休会となつていた小児科学会岡山地方会を再開し当地の小児科医に刺激を与えた。戦後早々にビタミンB1の作用機序、乳児腸炎の原因について研究を開始し、教授の学究的人柄と学生に「休むのが惜しい」とも言われた名講義に魅せられ、多くの教室員が集まり研究体制が整つていった。

主な成果としては、昭和24年末頃広島・岡山県境、瀬戸内海沿岸で発生したランドリー麻痺を呈する患児の治療研究を契機とした小児科臨床ウイルス学発展の基礎、昭和28年岡山県山陽町の一村落における慢性フッ素中毒症の解明、昭和30年森永ヒ素ミルク事件への法医学教室、病理学教室、岡山県衛生部及び岡山県医師会と連携した究明と対応、小児の脳波研究による重度心身障害児に対する医学的研究の開始、乳児栄養特に乳児人工栄養に関する研究並びに先天性異常疾患・ダウン症候群等染色体に関する研究の開始があげられる。

「(略)諸君が実験の結果を看取するときに“神の声を聴く心持で”という習慣を植え付けたことではなかつたろ

うかと自負しています。予想した結果よりは予想しなかつた結果の中にこそ教えられる収穫のあること(中略)この態度と空気を、私共は私共の“実験室の記憶”といたしたいと思っています。この壁、この机、このフラスコに浸み込んで蓄積された私共の教室が持つ記憶として、体臭として、香りとして保持して行きたい(略)」と開講十周年記念誌に、また、退官の際には「実験データの積み重ねは学問ではなく、人類が欲するものであるかどうかの動機と目標が重要であり、全人間的な治療を行うというソシアルニードに応じられる哲学的・宗教的医師になる」ことの必要性を強調した教授の理念は、山内逸郎国立岡山病院長、井田憲明広島女学院理事長、藤原弘岡山県医師会長、木本浩岡山大学教授と、喜多村勇高知医科大学長、守田哲朗川崎医大教授、大田原俊輔岡山大学教授、岡鋏次岡山大学教授ら多くの秀逸を育てた。

昭和44年(1969)停年退官し、岡山大学名誉教授の称号を授与された。その後、香川県立中央病院長として、昭和48年から川崎医科大学小児科学初代教授を務め、教育研究、臨床に活躍した。

(参考：岡山大学医学部百年史、浜本英次先生を偲んで([https://www.jstage.jst.go.jp/article/vso/71/11/71\\_KJ00002910838/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/vso/71/11/71_KJ00002910838/_pdf)))

第8回 森永ヒ素ミルク解明 浜本英次 治療法示し拡大防止 (<http://medica.sanyonews.jp/article/1055/>)

<b>ご挨拶</b>	1
岡山大学医学部長に豊岡伸一氏  ご就任 大学院医歯薬学総合研究科長に伊達勲氏  ご就任 岡山大学病院長に前田嘉信氏  ご就任 金澤右教授  ご退任 大塚愛二教授  ご退任 西堀正洋教授  ご退任 浜田淳教授  ご退任 阿部康二教授  ご退任 竹田芳弘教授  ご退任 千堂年昭教授  ご退任 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病原ウイルス学分野教授に本田知之氏  ご就任 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（医学系）組織機能修復学分野教授に宝田剛志氏  ご就任 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科機能再生・再建科学専攻 眼科学分野教授に森實祐基氏  ご就任 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科学教授に安藤瑞生氏  ご就任 東邦大学医学部麻醉科学講座（大森）教授に武田吉正氏  ご就任 東京女子医科大学医学部臨床工学科教授、集中治療科教授（兼務）および東京女子医科大学病院臨床工学部運営部長に市場晋吾氏  ご就任	
<b>医学部創立150周年記念事業</b>	14
岡山大学医学部 創立150周年記念式典開催のご案内 学生論文コンクール「医学部将来展望・夢」表彰式を挙行	
<b>会員動向</b>	16
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など） 学位授与 会員訃報	
<b>クラブ報告</b>	19
医英会（旧 M・ESS）※2021年2月より団体名称が変わりました  増田倫敦 医歯薬バドミントン部  近藤大翔	
<b>会員のこえ</b>	21
『行政組織の中の公衆衛生医師』の仕事の紹介  則安俊昭	
<b>会員の近況</b>	22
高等学校出前講義  松尾俊彦	
<b>新聞より</b>	24
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2020.9～2021.2）	
<b>歴史の広場</b>	30
医師養成の歴史と岡山大学医学部—その6  椋野 洋	
<b>随 想</b>	41
医学部厚生補導係  花房豊さん  難波正義	
<b>学生だより</b>	42
解剖実習を終えて  浅越康介	

解剖実習を終えて 古山怜奈  
系統解剖学実習を終えて 孫崎恵美

---

**教室だより**

44

海外への留学生一覧

---

**岡山より**

72

岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について  
鹿田会館（旧生化学棟）講堂の改修工事竣工  
生まれ変わる「フェニックス」  
令和2年度 Student Doctor 認定式  
令和2年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式  
第115回 医師国家試験の結果  
令和2年度卒年次別会費納入状況  
おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！  
コロナ禍の医学振興 山田雅夫  
— ご挨拶—事務局長の交代— 妹尾行恭・田口博之  
岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧  
鶴翔会会報 投稿内規

---

**編集後記**

84

今号の格言・名言（選者：読み人知らず）

*When we speak, we say only what we know already. When we listen, we may learn something new.*

*Dalai Lama*

## ご挨拶

### 岡山大学医学部長に 豊岡伸一氏 ご就任



#### ご挨拶

岡山大学医学部同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、浅沼医学部長の後任として令和3年4月より岡山大学医学部長を拜命することになりましたのでご挨拶を申し上げます。

さて、2020年に創立150周年を迎えた岡山大学医学部は、地域・世界へと優れた研究者と医療人を育成・輩出し、良質な医療・保健の維持と発展に貢献してきました。しかし、医学研究や医療人育成に期待される姿は、社会的要請に応じて変化しています。また、2020年は予想もしていなかったCOVID-19により日常は一変しました。さらに、情報通信技術の進歩とともに、人工知能（AI）などの技術の進化はこれからも日常の風景を大きく変えていくことが予想されます。そのような中で151年目の扉を開くに当たり、本医学部のあるべき姿として、「日本を代表する医学教育・医学研究の国際拠点を目指して挑戦を続けるキャンパス」を掲げたいと思います。その達成ためには、今までの伝統を踏まえつつ、新たな価値の創造に取り組むことが必要です。

まず医学教育では、受け継がれてきた「あなたのそばに先進医療」の方向性及び「医療人育成の遺伝子」とも呼ぶべきディプロマポリシー（卒業認定・学位授与の方針）等で明示した特色ある医療人育成の取り組みの根幹を継承することが大切です。それとともに、今後は従来の教育プログラムに加え、Society5.0時代の医療人コンピテンシーである数理・データサイエンス・AIリテラシーや21世紀型スキルといわれるコミュニケーション力などの他人と接する際に影響を与える能力、並びにアカデミックマインドや起業家精神（アントレプレナーシップ）を獲得・醸成するための新たな教育プログラムを創造することが重要であると考えます。特に21世紀型スキルは、多職種からなるチーム医療の一員であり、さらに多様な背景を持つさまざま

な患者さんに医療を提供する医療者にとっては、今後さらに必要となってくるでしょう。

しかしながら現在のカリキュラムは、例えば私が岡山大学医学部で学んだ1980年代後半から1990年前半と比較して比べ物にならないほどに肥大化しており、現在のカリキュラムに新しい価値を加えた教育プログラムを実現するためには、医学部全体の効率化を実現する取り組みが必要となります。そのために、新しい技術の導入による医学部教育のデジタルトランスフォーメーション（DX）を推進し、個別最適で変化に強く「学びの意欲」を喚起する学修者本位の医学教育の推進が鍵となります。ただし、デジタルで置き換えることができない大切なものもあると考えます。学びの意欲を最大限に喚起するためには、人間が本来備えている知的好奇心、知らないことをもっと学びたいと思う「学びの本能」を覚醒することこそが、最も重要であると思っています。コロナ禍でオンライン授業が進み、知識を得る手段としての従来通りの大学における対面授業の必要性は低下しています。それでは大学キャンパスの存在意義は何でしょうか？ その答えの一つが、学生・教職員が実際に交わって多様な刺激を受けることにより、学びの本能を覚醒する場であると考えます。私は学生・教職員・医学部同窓会の皆様とともに、このような医学部キャンパスを目指したいと思います。

次に、医学研究についてですが、平成30年に中央教育審議会がまとめた「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」には、「大学は、教育と研究は一体不可分のものとして人材育成と研究活動を行っている」と明記されています。本学医学部のあるべき姿「日本を代表する医学教育・医学研究の国際拠点を目指して挑戦を続けるキャンパス」に向けても、医学研究の重要性は言わずもがなのことであり、医学教育力とともに研究力をさらに高めることも必要です。それを実現するためには、医学部各講座の研究基盤と本学が取り組んでいる多くの国家事業で整備された恵まれた研究環境（スーパーグローバル大学、研究大学強化促進事業、国立大学イノベーション創出環境強化事業、臨床研究中核病院、橋渡し研究支援拠点、がんゲノム医療中核拠点病院など）が相乗効果を生み、教員・学生が主体的に研究に取り組める研究環境を整備することが重要であると考えます。そのために、岡山大学病院、医歯薬学総合研究科、保健学研究科と密に連携をとりながら岡山大学全体とも歩調を合わせ、研究力向上に向けた取り組みを行っていきたいと考えています。

新しい研究領域としてデータサイエンスやAIに関

する研究は、教育同様、今後ますます重要になると予想されます。折しも令和3年度からは、医歯薬博士課程に医療AI人材育成に関するコースが新設される予定です。この課程自体は大学院のコースとなりますが、AIに関する研究の加速にもつながることが期待されます。また、この取り組みでは国が進めるリカレント教育に大学院に入学しなくても対応できる仕組みを予定しており、AI研究に携わる人材の裾野を広げることにも期待されます。私はこれまで、バイオバンクやゲノム医療を通じて革新的医療技術創出拠点の取り組みに参画し、医療AI人材養成コースの設置についても多くの関係者の皆様と共に取り組んで参りました。今後は、これらの経験を医学部での教育と研究の更なる融合・発展につなげ、医学研究組織の先導役の一人としての責務も果たしていきたいと考えています。

最後に、私は浅学寡聞の身ではありますが、医学部150年の礎を基に151年目を迎える新たな時代を創出し、本学医学部が日本を代表する医学教育・医学研究の国際拠点となることを目指し、地域・世界に貢献できるよう奮励努力する所存です。同窓会員の皆様からの更なるご指導・ご鞭撻、そしてご支援を賜ることができましたら幸甚に存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 略 歴

- 1968年 岡山県玉野市生まれ
- 1987年 岡山県立倉敷天城高等学校卒業
- 1994年 岡山大学医学部医学科卒業
- 1999-2002年 米国テキサス大学サウスウエスタンメ  
ディカルセンターハマンがんセンター
- 2001年 岡山大学大学院医学研究科修了
- 2004年 岡山大学医学部・歯学部附属病院 呼吸器外  
科 助手
- 2011年 岡山大学病院 呼吸器外科 講師
- 2013年 岡山大学医歯薬学総合研究科 臨床遺伝子医  
療学 教授
- 2017年 岡山大学医歯薬学総合研究科 呼吸器・乳腺  
内分泌外科学 教授
- 2019年 岡山大学病院 副病院長(教育(医科)担当)

## 大学院医歯薬学総合研究科長 に伊達勲氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

大塚愛二研究科長の後任として、令和3年4月1日付で大学院医歯薬学総合研究科長を拝命しました。誌面をお借りしてご挨拶申し上げます。

研究科長として最も大切なキーワードは「人材育成」と考えています。私たちの務めは次世代に知識・技術・心・夢を伝えていくことです。最新情報を学べる環境を作り、先端テクノロジーとテクニックを指導し、責任感・倫理観の教育を行い、AIやIT等のイノベーションを利用することによって、国際社会で評価され、地域社会に貢献でき、リーダー的な存在となる人材を研究科から育てたいと思います。

「和と共同」も大切なキーワードです。医・歯・薬の和と共同、他学部・他研究科との和と共同、他大学や企業等他の組織との和と共同を礎として、時代・状況の変化に柔軟に対応し、更に発展的な進化を遂げる力を備えた(いわゆるレジリエントな)大学組織の構築を目指します。現在進行中の最先端AI研究開発の人材育成プログラム、臨床イノベーションセンターの建設、国立大学イノベーション創出環境強化事業など、医歯薬学総合研究科が積極的に取り組んでいくべき課題が多くあります。

当研究科ではSDGs推進研究大学として、医療と健康のカテゴリーに取り組む事例をさらに増やして行く必要があります。また岡山大学はがんゲノム医療中核拠点病院、臨床研究中核病院、革新的医療技術創出拠点、スーパーグローバル大学等に選定されており、医歯薬学総合研究科はその牽引役を務めて行かなくてはなりません。

新型コロナウイルス感染症は大学院の教育・研究環境にも大きな影響を及ぼし、従来の活動が種々の制約を受ける事態になりました。その一方で、私たちはオンラインシステムの構築や経験を積み、研究意欲や研究環境の回復をはかる新たなアプローチを模索し続けています。教員組織と教育組織の分離(いわゆる教教分離)に基づく特色ある学位プログラムの構築など、社会の求める大学院改革にしっかり取り組み、岡山大

学を愛する一人として、医歯薬学総合研究科の発展のために尽力する所存ですので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 1976年 岡山県立岡山大安寺高校卒業
- 1982年 岡山大学医学部医学科卒業
- 1982年 岡山大学病院脳神経外科医員
- 1988年 米国ニューヨーク州ロチェスター大学研究員
- 1990年 岡山大学大学院医学研究科修了 医学博士
- 1991年 岡山大学医学部附属病院 脳神経外科助手
- 1999年 岡山大学医学部附属病院 脳神経外科講師
- 2003年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 脳神経外科学教授
- 2011年 岡山大学病院 副病院長（併任）
- 2019年 岡山大学医学部 医学科長（併任）
- 2021年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長（併任）

## 岡山大学病院長に前田嘉信氏 ご就任



日本を代表する  
「医療・保健のエンジン」

### ご挨拶

同窓の先生方には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび岡山大学病院長を拝命することとなりました前田嘉信です。浅学菲才の身ではありますが、

皆様のご期待に沿うようたゆまず尽力していく所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。

この1年以上の間、世界は新型コロナウイルス感染に翻弄されましたが、岡山大学病院の運営にあたりまして、まず金澤右先生が取り組まれてきたコロナ対策をしっかりと継承し、万全を尽くしたいと思います。病院職員の身体的・精神的疲弊に加え、経営的なダメージをよく分析しそれぞれの回復に向けて、ポストコロナ戦略を立て実行していきたいと考えております。

岡山大学病院はこれまで、主に中国四国地方における医療・保健分野の診療・教育・研究面での「エンジン（原動力）」とも言うべき重要な役割を果たしてきました。しかし、地域・世界の医療ニーズや国内の医療財政・情勢の変化等により、当院を取り巻く環境は

大きく変化しつつあります。岡山大学病院が今後も、地域・世界に向けて医療・保健分野の新たな価値を創造し、発信していくためには、これまで培った特色と強みをさらに磨き伸ばし、より高い目的・目標に向かって挑戦し続けることにより、『持続可能な大学病院』の経営基盤を構築することが重要です。私は、「全ての患者さんのために」、「医療・保健の発展的未来のために」、「地域・世界の健やかな生活のために」を合言葉に、岡山大学病院が日本を代表する「医療・保健のエンジン」に成長することをビジョンとして掲げます。

岡山大学病院の「特色と強み」は、なんと言っても歴史と伝統により培われた「関連病院」及び「関係人口」の厚みにあり、岡山大学病院のあるべき姿を達成するための重要なステークホルダーであり基盤の資源です。今後も医療連携を強化し、特に人口の多い都市における中核関連病院は、教育・研究・経営の各方面から積極的に情報共有及び後方支援を行ってまいります。岡山県内の医療体制への支援システムを整備し、併せてCMA-Okayamaについては、「競争から共創へ」へのコンセプトの下、ホスピタル・ネットワークとしての連携機能をさらに強化させるとともに、今後は中国四国全域の関連病院に向けても、そのネットワークを広げたいと思います。

岡山大学病院が日本を代表する「医療・保健のエンジン」に成長するために全力で取り組んでまいり所存ですので、同窓の先生方のご支援とご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 1967年11月 兵庫県姫路市生まれ
- 1992年3月 岡山大学医学部卒業
- 1992年9月 神戸西市民病院
- 1993年9月 滝宮総合病院
- 1994年9月 国立四国がんセンター
- 1996年6月 岡山大学医学部附属病院第二内科
- 2000年10月 愛媛県立中央病院
- 2001年11月 米国 Michigan University, Research fellow
- 2004年12月 岡山大学医学部・歯学部附属病院助手(血液・腫瘍内科)
- 2017年7月 岡山大学 血液・腫瘍・呼吸器内科学教授
- 2019年4月 岡山大学病院 副病院長

## 金澤右教授 ご退任



### ご挨拶

2月18日に最終講義をさせていただきました。「放射線科医としての私を励ましてきてくれた言葉たち、そして4人の先生たち」という愚にも付かない話を終えると、私の胸にも万感迫るものがありました。私のような「半端者」を三十年間にわたって受け入れてくださった岡山大学医学部ならびに大学病院には感謝の気持ちしか浮かびませんでした。また、第一臨床講義室にわざわざお越しいただいた方々に対する感謝の念でいっぱいでした。

私は、1991年にMDアンダーソン病院での留学生生活を終え、岡山大学病院に医員として勤務しました。紆余曲折を経ながら、2004年に思いもかけず放射線医学教室の教授にならせていただき、2017年には病院長となりました。若い頃は、「正統派」には程遠い道のを歩んできましたが、大好きな放射線科医として岡山大学病院にかくも長きにわたってお世話になったことは、私の人生の最大の勲章だと思っております。

故渡辺和子ノートルダム清心女子大学学長の「置かれた場所で咲きなさい」という言葉がよく私の頭に浮かんでいますが、私は、私自身は「置かれた場所で咲かせていただきました」ということだと思っています。その場所である岡山大学医学部・病院での日々の生活は、刺激にあふれ、興味の尽きぬものでした。一放射線科医として、あるいは時には管理者としても、全てを学びの世界に置かせていただいたと思っております。私は、学者としても教育者としても未熟者であり、皆様には教えられることばかりでした。成長速度は鈍る一方でしたが、アカデミアの一員であることの幸せを感じさせていただきました。

私を育て、支えてくださった医学部、病院、放射線医学教室、関連病院の諸先輩方、仲間たち、後輩たち、本当にありがとうございました。

実は、後から知りましたが、最終講義には私の妻も来ておりました。その時には言えませんでした。この間、家庭を顧みない私に代わり、4人の子供たちを育て、私を心身ともに支えてくれた彼女に心から感謝したいと思います。

### 略歴

- 1981年03月 岡山大学医学部卒
- 1986年03月 医学博士取得
- 1986年04月 倉敷成人病センター放射線科医長
- 1989年12月 米国テキサス大学MDアンダーソン癌センター  
放射線診断科研究員
- 1998年04月 岡山大学医学部附属病院中央放射線部副部長・講師
- 2000年02月 同上助教授
- 2004年04月 岡山大学大学院医歯学総合研究科（腫瘍制御学講座放射線 医学分野）教授
- 2005年04月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授
- 2008年05月～平成23年03月 岡山大学病院卒後臨床研修センター医科研修部門長
- 2011年04月 岡山大学病院副病院長
- 2013年04月 岡山大学病院IVRセンター長
- 2017年04月 岡山大学理事（医療担当）・岡山大学病院長

## 大塚愛二教授 ご退任



### ご挨拶

コロナ禍の中、医療の第一線で尽力しておられる皆様に感謝とお見舞いを申し上げます。このたび2021年3月末をもって定年退職を迎えるにあたり、これまでご支援を賜りました同窓各位にご挨拶申し上げます。

岡山大学には1984年に任官してから37年間、また学生として医学部と大学院を合わせると47年間の永い間にわたって大変お世話になりました。今日まで務めることができましたのも、ひとえに皆様方のご指導ご鞭撻の賜物と感謝し、誌面を借りましてお礼申し上げます。

私は、大内弘先生の最後の大学院生として第二解剖に入り、村上宅郎先生の指導で血管鋳型走査電子顕微鏡法を用いた研究で学位をいただき、荷電性鉄コロイド法の開発に携わり、組織内の複合糖質の組織化学観察を行いました。また、細胞外マトリックスの形態学的研究につきましては分子医化学の二宮善文先生に大変お世話になりました。3人の先生方はすでにご逝去され、寂しい限りです。

国際交流では、イタリアのラクイラ大学と協定を結んで、学生交流を行いました。こちらから医学研究インターシップの学生（総15名）として派遣し、イタリアからは解剖実習に毎年学生（総34名）を受け入れました。国際交流協定に基づき単位認定を伴う学生交流として評価されました。ラクイラ大学の解剖のGuido Macchiarelli教授の多大なるご協力とご尽力により継続してこれました。2020年はCOVID19のために交流できなかったことが誠に残念でした。

管理運営面では、附属図書館鹿田分館長、国際センター長、医学科長、医学部長、医歯薬学総合研究科長や種々の委員（長）を仰せつかりました。分館長としては学術雑誌購入の電子ジャーナル化、国際センター長としては教職協働による大学の国際化、医学科長としては国際バカロレア入試の導入、医学部長としては分野別認証評価、研究科長としては大学院改革と博士課程改組への着手と様々な取組に携わる機会を与えていただきましたことが思い起こされます。特にこれまで支えてくださった事務職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

献体関係では、ともしび会のご協力により、必要十分な解剖体確保ができました。平成24年度からは厚生労働省からの事業支援も得まして、手術手技研修（CST）を実施できました。関係各位のご理解とご協力にお礼申し上げます。

これまで、教室の教職員はじめ鶴翔会の多くの皆様に支えられて、今日まで務めることができました。すべての方々に感謝申し上げます。

## 略 歴

1980年3月 岡山大学医学部卒業  
 1984年3月 岡山大学大学院医学研究科修了  
 1984年4月 岡山大学医学部助手（解剖学第二講座）  
 1988年9月 文部省在外研究員（米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部）  
 1990年11月 岡山大学医学部講師（解剖学第二講座）  
 1995年12月 岡山大学医学部助教授（解剖学第二講座）  
 2004年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科教授（人体構成学分野）  
 2006年4月 岡山大学附属図書館鹿田分館長  
 2009年7月 岡山大学国際センター長  
 2011年4月 岡山大学医学部医学科長  
 2015年4月 岡山大学医学部長  
 2019年6月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長

## 西堀正洋教授 ご退任



### ご挨拶

令和3年3月末日をもちまして、岡山大学を退任いたしました。岡山大学には、学生時代を含めると47年間お世話になったこととなります。半世紀近くに及ぶ期間の折々に、恩師、先輩諸氏、教室スタッフ、大学院生諸君、学内外の共同研究者にどれほど助けていただいたか、わかりません。退任にあたり、お世話になったすべての皆様に心よりお礼申し上げます。教授に就任後は、薬理学講座主任として医学部学生の教育に責任ある立場となりましたが、正解のない教育が持つ難しさは特別なものがあると常々思ってきました。内容（コア）、方法、評価等について反省することが多く、今日に至っています。この難しい教育におきましても、同窓の先生方や学内外の専門家の皆さんに助けていただきました。皆様のご支援ご協力に厚くお礼申し上げます。

在任期間中には、国立大学の独立行政法人化や所属部局の大学院化など、目まぐるしい変化がありました。変革に伴い大学運営は財政的に厳しいものとなり、教室基盤維持経費すら保証されなくなりました。研究活動全体が、外部資金依存型に変わったわけです。時を同じくして、ヒトの全遺伝子情報が解読されました。そうした研究環境変化の中で、薬理学研究の長期・短期目標をどのように設定するかを教室スタッフと議論し考えてきました。模索と実践の中で、薬理学が本来的に持つ「薬創り」の側面と、医学部における特徴である疾患の病態生理の理解を合流させることで、薬理学の持つ魅力と可能性を探ってきたように思います。

具体的な研究の遂行場面では、それまでのキャリアで経験したことがない企業の皆さんとの貴重な共同作業を経験しました。それらの経験は、ともしれば狭くならがちな大学人の視野を拓ける機会になったと感謝しています。また協働をきっかけに公的な大型研究資金の支援を得て、多くの挑戦機会を頂くことができました。外部資金導入に関して学内ならびにAMEDからのご支援、誠にありがとうございました。アジアからの留学生を含め、多くの若い研究者とともに仕事を続けられたことは、何より幸運であったと感じています。昨年末、思いがけず第14回江橋節郎賞の受賞の栄誉に与ることができました。苦楽を共にしてくれた教

室員の頑張りに、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

最後になりますが、鶴翔会の先生方のご健勝とご活躍ならびに母校の益々の発展を祈念し、退任のご挨拶といたします。

### 略 歴

- 1980年3月 岡山大学医学部卒業
- 1980年4月 岡山大学医学部薬理学助手
- 1980年5月 医師免許取得
- 1988年12月 岡山大学医学部薬理学講師
- 1990年4月 カナダ・マニトバ大学医学部マニトバ細胞生物研究所（～平成4年3月）
- 1991年4月 カナダ・マニトバ大学医学部（客員教授）
- 1995年4月 岡山大学医学部薬理学助教授
- 2001年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科機能制御学講座薬理学教授
- 2005年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科生体薬物制御学講座薬理学教授
- 2020年12月 第14回江橋節郎賞 受賞
- 2021年3月 定年退職

## 浜田淳教授 ご退任



### ご挨拶

今春で定年退職するにあたり、これまでご支援をいただきました皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、1978年から約30年間に厚生労働省で勤務しました。その間、信州大学医学部の公衆衛生学教授として出向したことが

機縁となり、2007年度から14年間、岡山大学で勤務させていただきました。

強く印象に残っていることは、第一に教育についてです。本学の教養課程では、社会保障論や生命倫理学の講義や介護実習、島合宿などを行ってきました。加えて、医学部や大学院でも医療政策論等の講義や論文指導を行いました。こうした活動を通じて、大学1年生から社会人までの多様な人々と出会い、交流できたことは、かけがえのない経験であり、彼らとの交流はこれからも続くでしょう。

第二には、私の社会的な活動を通じた、大学人や医

療関係者との交流です。特に月に一度の、地域医療部会の皆様との交流、真庭市の落合病院・金田病院連携協議会での意見交換などは忘れがたいものです。かつて勤務していた東京都、岩手県、長野県でも研究会や委員会に加えていただき、医療の現場に対する理解を深めることができました。

第三は、私的な活動にかかわるものです。月に一度、教員、学生、行政関係者、医療・介護従事者からなる勉強会を主催し、自由な意見交換を行いました。このほか、医師、弁護士、経営者、患者会代表、旺盛なボランティア活動をされている飲食店の夫妻との交流も、私の生活に不可欠のものとなっています。

今もなおコロナ禍の困難な状況が続いていますが、大学病院の皆様をはじめとする臨床現場の従事者、地方自治体や保健所などの行政関係者、疫学の専門家など、医療関係者が長期にわたり、年末年始も休まず、感染克服のために尽力されていることに、心からの敬意を表します。

末筆ながら、鹿田キャンパスをはじめとする岡山大学のますますのご発展を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

### 略 歴

- 1978年3月 横浜国立大学経済学部卒業
- 1978年4月 厚生省（当時）入省。  
厚生労働省大臣官房企画官、内閣府参事官、信州大学医学部教授などを経て、
- 2007年3月 厚生労働省退官
- 2007年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（医療政策・医療経済学）

## 阿部康二教授 ご退任



### ご挨拶

岡山大学医学部脳神経内科に1998年からお世話になり、同期は太田吉夫、吉良尚平、公文裕巳の3教授でした。他大学からの赴任で不慣れだった当初は、当時の小坂二度見学長（海兵75期）や難波正義医学部長、荒田次郎病院長、大本堯史教授、岡

田茂教授、小田慈准教授を始め多くの先生方の温かいサポートにより少しずつ仕事を進めることが出来まし

た。人材育成のための教育には力を注ぎ、蘭学阿部塾の切磋琢磨道場として、毎週水曜朝の総回診は全力で打ち込み、国際的かつ全国区で活躍できる骨太な人材育成を目指しました（基礎研究重視、臨床実力、教育熱意）。

またこの間、岡大病院の副院長として岡山大学病院の大赤字を1年間で解消したのは、辛くもありましたが何とかやり遂げました。毎年1億、2億、4億と雪だるま式に倍々ゲームで膨らんだ単年度赤字と累積16億円の岡大病院赤字を、2002年4月から副院長として1年間で単年度1.2億円の黒字化に成功し、累積赤字もこの1年間で6億円まで減らすことが出来ましたのも岡大皆様方の心強い応援のお陰様でしたので、改めて心よりお礼申し上げます。2011年3月11日の東日本大震災・大津波では岡山大学チーム長として岩手県陸前高田市と大船渡市で災害医療のお手伝いを出来たことも感慨深い思い出です。

岡山大学には定年まであと1年間最後の仕上げをするつもりでいましたところ、全く思いがけなく国立精神・神経センターの病院長にと打診された時は即座に断りましたが、再三の要請に抗しきれず、このたび後ろ髪を引かれるままに岡山大学から異動することとなりました。岡山大学在任中は本当に多くの皆様方に助けて頂き、弘前大学をはじめ山形大学、自治医科大学、群馬大学、埼玉医大、大分医大と全国に6名の教授を送り込むことが出来たのも、全て岡山大学の皆様方のご支援のお陰様と感謝しています。これからもしばしば鶴翔会の先生方にはお会いするものと存じますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

#### 略 歴

1981（昭和56）年3月 東北大学医学部 卒業  
 1988（昭和63）年7月 アメリカ合衆国ハーバード大学神経内科学教室 留学  
 1996（平成8）年3月 東北大学医学部助教授  
 1998（平成10）年4月 岡山大学医学部教授  
 （2002.4-2003.6 岡山大学医学部附属病院副院長）

## 竹田芳弘教授 ご退任



#### ご挨拶

令和3年3月をもちまして定年退職にあたり、多大なご支援とご協力をいただいた皆様には心より御礼申し上げます。

昭和55年3月に岡山大学卒業後、岡山大学放射線医学教室（故山本道夫教授）に入局致しました。山本道夫先生には放射線医学全般の概要や学位論文となった放射線生物学での基礎的研究などを教えていただきました。また、当時医局長でもあった故杉田勝彦先生には単純X線写真や消化管造影などの画像診断の基本以外に医師としての心構えなども直接指導をしていただきました。

昭和62年に当時山本道夫先生が病院長をされていた香川県立中央病院に赴任致しました。そこでは地域病院での在り方や医療スタッフとの連携を学び、付属する看護学校で看護学生に対して教鞭も取らせていただきました。また、各診療科の医長の先生方にも親切にいただき、他科のカンファレンスへの参加や手術室にも入り自分が画像診断した症例の確認ができたことは有意義な経験でありました。

昭和63年に大学に帰局後、当時教授であった平木祥夫名誉教授から核医学の診療や研究を任されました。核医学診断は機能診断や代謝診断に優れており、その面白さ、奥の深さを教えていただき核医学（腫瘍核医学）が自分の研究のテーマとなりました。また、2年間の副医局長、4年間の医局長を拝命し医局運営などに携わらせてもらいました。

平成10年に当時保健学科の専攻長であった杉田勝彦先生のご推挙もあり保健学科に異動しました。保健学科では診療放射線技師の養成を主体に学生の教育、実習、研究に携わりました。また、分野長や研究科長の任にあたらせていただき、多くの協力者と共に分野や研究科全体の問題点などを学び対応できたことは貴重な経験であったと思います。

大学卒業以来、多くの先輩や後輩の先生方に恵まれ多大なる励ましや恩恵に預かり幸運な岡山大学での生活を送ることができました。鶴翔会の先生方のご援助に深謝するとともに皆様方のご発展を祈念して退任の挨拶とさせていただきます。

大学卒業以来、多くの先輩や後輩の先生方に恵まれ多大なる励ましや恩恵に預かり幸運な岡山大学での生活を送ることができました。鶴翔会の先生方のご援助に深謝するとともに皆様方のご発展を祈念して退任の挨拶とさせていただきます。

## 略 歴

- 1980年3月 岡山大学医学部卒業  
 1980年4月 岡山大学大学院医学研究科 入学  
 1984年3月 同 修了  
 1984年4月 岡山大学医学部附属病院 助手  
 1987年7月 香川県立中央病院 医長（放射線科）  
 1989年5月 岡山大学医学部放射線医学講座 講師  
 1998年10月 岡山大学医学部 助教授（保健学科  
放射線技術科学専攻）  
 2003年4月 岡山大学医学部 教授（保健学科  
放射線技術科学専攻）  
 2007年4月 岡山大学大学院保健学研究科 教授

## 千堂年昭教授 ご退任



## ご 挨拶

令和3年3月をもって定年退職するにあたり、これまでご支援を賜りました皆様にご挨拶申し上げます。

私は、昭和60年に九州大学大学院を修了後、2年間の米国留学を経た後に九州大学病院薬剤部で病院薬剤師としての第一歩を踏み出しました。そして平成17年12月より岡山大学病院准教授・副薬剤部長として赴任いたしました。平成21年1月、教授就任後は、文字どおり教授・薬剤部長として充実した日々でありました。就任後、すべての病棟に薬剤師を専任配置させ、病棟薬剤業務の下、入院から退院まで切れ目のないファーマシューティカルケアの実践、患者の服薬アドヒアランス向上による適正な薬物治療管理を目的とした薬剤管理指導業務に関しては、抗がん剤等のハイリスク薬をはじめとして、処方歴に対する服薬指導および副作用モニタリング等に部員一丸となって推進してまいりました。あわせて新医療研究開発センターの前身である、治験センター長も拝命し、積極的に治験、臨床研究の実施支援に取り組んでまいりました。平成29年、臨床研究中核病院の承認に向けて些かなりとも貢献できたと思っております。研究面では、臨床現場の研究室の特徴をいかし、直接患者データを基に最適な薬物治療法の確立を目標に研究を展開してきました。研究内容は精神疾患発症の病態解明および次世代の医薬品創薬研究、医薬品による有害作用の発現機序解明と予防対策の確立、

がんに対する分子標的薬の耐性とその克服研究、そして医薬品の適正使用に関する基盤研究を柱として推進してきました。研究成果は、最終的に薬物治療における安全性の確保、治療効果の向上ならびに患者満足度の向上に貢献できるエビデンス創出に繋げることができました。研究活動を通して、まさにPharmacist-Scientistとして活躍できる人材の育成に繋がり、今後の活躍が楽しみです。このように鶴翔会の皆様のご支援のもと、医学と薬学を結ぶ学問体系の構築に貢献できたのではないかと考えています。

最後になりましたが、岡山大学医学部ならびに鶴翔会の益々の発展を祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。

## 略 歴

- 1985年10月 九州大学大学院薬学研究科博士課程修了  
 1985年10月 米国カンサス大学薬学部 博士研究員  
 1987年10月 九州大学病院薬剤部 薬剤師  
 1998年4月 九州大学病院薬剤部 薬品研究室係長  
 2003年4月 九州大学病院薬剤部 副薬剤部長  
 2005年12月 岡山大学病院 准教授 副薬剤部長  
 2007年4月 岡山大学病院 准教授 薬剤部長事務取扱  
い  
岡山大学病院治験センター長  
 2009年1月 岡山大学病院 教授・薬剤部長  
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
臨床薬剤学教授

岡山大学大学院医歯薬学総合  
研究科病原ウイルス学分野教  
授に本田知之氏 ご就任

## ご 挨拶

鶴翔会の先生方におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび令和3年1月1日付で、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病原ウイルス学分野教授を拝命いたしました本田知之と申します。私は、平成11年に

大阪大学医学部を卒業後、大阪大学医学部附属病院で初期研修し、その後基礎研究の道へと進みました。大

阪大学大学院では高井義美教授のご指導のもと、細胞間接着と細胞内シグナル伝達を題材に生化学を学びました。その後、三重大学で、神経解剖学と精神医学を学び、精神疾患とウイルスとの関連に興味を抱きました。そこで、大阪大学微生物病研究所の朝長啓造准教授のもとで、持続感染する神経ウイルスの研究を始め、以降、東京大学医科学研究所、京都大学ウイルス研究所（現ウイルス・再生医科学研究所）、大阪大学大学院医学系研究科と研究室を変えながら、神経ウイルスの持続感染についての研究を続けて参りました。また、大阪大学では新たに、がんウイルスの研究を開始し、ウイルスによる新しい発がんメカニズムを提唱しました。

さらに、神経ウイルスの研究過程で、私たちのゲノムの中に太古のRNAウイルス感染の痕跡（内在性RNAウイルス配列）を発見しました。この発見は、ウイルス進化学における大きな分岐点となり、以降内在性ウイルス配列の解析が世界のウイルス学のトレンドの一つとなっております。

臨床教室との連携としましては、近年の次世代シーケンサーの発展に伴い、多様な検体中のウイルスの同定が可能となっており、原因不明病態やウイルス感染が疑われる検体などの網羅的ウイルス探索を行って参りました。ぜひ鶴翔会の先生方の研究にもこのような面から貢献させていただければと考えております。また、現在、社会では新型コロナウイルスが注目を集めております。新型コロナウイルス対策や関連研究にも微力ながら貢献させていただき、私どもの知識・経験を社会還元につなげていきたいと考えております。

末筆ではございますが、鶴翔会の先生方におかれましては、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 略 歴

1999年3月 大阪大学医学部医学科卒業  
 1999年6月 大阪大学医学部附属病院医員  
 2001年4月 日本学術振興会特別研究員（DC1）  
 2004年4月 大阪大学大学院医学系研究科特任助手  
 2005年4月 三重大学大学院医学系研究科助手  
 2006年4月 三重大学医学部附属病院医員  
 2007年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）  
 2010年2月 東京大学医科学研究所助教  
 2011年10月 京都大学ウイルス研究所助教  
 2016年4月 大阪大学大学院医学系研究科准教授  
 2016年10月 大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター准教授（兼任）

2021年1月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授

## 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（医学系）組織機能修復学分野教授に宝田剛志氏 ご就任



### ご挨拶

岡山大学医学部同窓会・鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和2年12月1日付で、岡山大学医学部/大学院医歯薬学総合研究科組織機能修復学分野の教授を拝命

させていただきます宝田剛志（たからだたけし）と申します。伝統ある岡山大学医学部の一教室を担当させていただくこととなり大変光栄に思うとともに、その責任感を痛感している次第です。

私の研究活動は、金沢大学薬学部薬物学研究室（米田幸雄教授主宰）に配属されたことから始まります。修士、博士、教務職員、助教と、金沢大学にてキャリアを重ねさせていただきました。米田先生の退官がきっかけとなり、公募されていた組織機能修復学分野（新設）独立准教授のポジションに応募し、平成28（2016）年4月に着任、その後のテニュアトラック審査・教授昇任審査を経て、今に至ります。

現在は3種類の研究を行っています。一つ目は、金沢時代からすこしずつ積み重ねていたMouse geneticsを利用した間葉系幹細胞に関する仕事。二つ目は、幹細胞生物学の「階層性・系譜」のモデルを利用することで、ヒトのボディプラン（形づくりの設計図）の動作原理をシステムとして統合的に理解し、ヒト多能性幹細胞（ES/iPS細胞）を用いて再生医療・創薬研究、がん研究などの幅広い医学応用を目指すこと。そして三つ目が、独自の研究ツールの開発（= 個体レベルでの、光技術によるシングルセルレベルの時間空間的遺伝子組み換え技術の開発）です。その詳細については、本年6月5日に開催される岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会総会での講演会にて説明させていただく所存です。

独立後の5年間で多くの先生方に支えられ研究を進めることができました。今後は、これまで自分の受けたものを、若手育成などを通じて還元していきます。鶴翔会の先生方には、どうかご指導ご鞭撻を賜ります

よう、何卒お願い申し上げます。

### 略 歴

- 2002年3月 金沢大学 薬学部薬学科 卒業  
 2004年3月 金沢大学 大学院自然科学研究科 博士  
 前期課程生命薬学専攻 修了  
 2004年7月 金沢大学 大学院自然科学研究科 博士  
 後期課程生命科学専攻 中途退学  
 2004年8月 金沢大学 大学院自然科学研究科 教務  
 職員  
 2005年12月 セントルイス大学小児科(戸松俊治博士)  
 研究員(4か月)  
 2007年4月 金沢大学 大学院自然科学研究科 助教  
 2008年4月 金沢大学 医薬保健研究域薬学系 助教  
 (組織変更)  
 2016年4月 岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科  
 (医学系) 組織機能修復学分野 独立准  
 教授  
 2018年10月 岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科  
 (医学系) 組織機能修復学分野 研究教  
 授  
 2020年12月 岡山大学 大学院医歯薬学総合研究科  
 (医学系) 組織機能修復学分野 教授  
 現在に至る

## 岡山大学大学院医歯薬学総合 研究科機能再生・再建科学専 攻 眼科学分野教授に 森實祐基氏 ご就任

### ご挨拶



鶴翔会の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和2年11月1日付で、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科眼科学分野教授を拝命した森實祐基(もりざねゆうき)と申します。岡山大学医学部を卒業してから

今日まで数多くの先生方、特に大月洋名誉教授、白神史雄名誉教授をはじめとする眼科学教室の先生方、梶谷文彦教授、成瀬恵治教授、毛利聡教授をはじめとするシステム生理学教室の先生

方、そして平成8年卒の同期の先生方には多大なご指導を賜りました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

私の専門は網膜疾患の診療と研究です。特に診療においては増殖糖尿病網膜症等の難治性網膜疾患の手術治療を専門としています。今後も世界最先端の医療を安全に提供すること、そして診療における課題を解決することを目標として診療・研究に取り組んで参りたいと考えます。また、地域の先生方とのコミュニケーションを大切に、関連病院や診療所のネットワークの拠点として地域医療の推進に貢献したいと考えています。

さて、教室を運営するにあたって私は、「教室は、教室員が新たな挑戦を通して自己の可能性を広げる場でありたい」と考えています。私自身、眼科学教室やシステム生理学教室を基盤として数多くの臨床経験を積ませて頂き、基礎医学研究や海外留学に挑戦させて頂きました。これらの経験を通して体得したことは私にとって何ものにも代えがたい財産であり、医師としての根幹になっています。眼科学教室は男女比がほぼ同じであり、将来開業を志向する教室員も多いため、各々の目標や夢が多様です。教室員には、臨床・研究・教育という大学の多面的な機能を活用して目標に挑戦し、可能性を広げ、最終的に夢を実現してもらいたいと思います。そして私自身は、教室員の挑戦を支援すると共に、眼科医療の発展に貢献できるよう、臨床・研究・教育における挑戦を続けていきたいと考えます。

末筆ではございますが、鶴翔会の先生方には今後共にご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 1996年3月 岡山大学医学部卒業  
 2000年4月 広島市立広島市民病院 医員  
 2006年3月 岡山大学大学院医歯学総合研究科修了  
 2006年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
 助教  
 2008年6月 米国ハーバード大学眼科 マサチュー  
 セッツ眼科耳鼻科病院 研究員  
 2013年8月 岡山大学病院 講師  
 2018年6月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
 准教授  
 2020年11月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
 教授

## 岡山大学大学院医歯薬学総合 研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科 学教授に安藤瑞生氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

2020年12月1日付で耳鼻咽喉・頭頸部外科学教授を拝命しましたので、謹んでご挨拶申し上げます。

私は北海道旭川市で高校まで過ごした後、上京し、2000年に東京大学を卒業後、東京大学耳鼻咽喉科学教室に所属しておりました。この度、歴史ある岡山大学耳鼻咽喉科学教室を主宰する機会を与えていただき、身の引き締まる思いがいたします。当教室は初代教授掛谷令三先生のもと明治40年に設立されて以来、第7代の西崎和則先生へと受け継がれてまいりました。伝統を継承し、さらなる発展のため日々精進する所存です。

私は外科治療を主体とする頭頸部外科医を志して耳鼻科医のキャリアを開始しました。卒後6年目から本格的にがん診療に従事し、将来の頭頸部がん治療を牽引する目標に向かって研鑽を続けてまいりました。また、がん治療におけるPrecision Medicineの整備が進んでいる昨今、東大病院のがんゲノム診療の運営面、技術面、症例検討における環境整備に尽力してまいりました。

私自身の研究は、2010年に大学院生として学ぶ機会を得て、肺がんの融合遺伝子発見の業績をあげていた間野博行先生のご指導を受けたことが現在に繋がっています。研究内容は一貫してがんゲノムですが、大学院では次世代シーケンサーの操作や分子生物学実験、留学中はバイオインフォマティクスを学び、in vivoとin vitroに加え、in silicoまでの研究手法を経験しました。

与えられた任期の間、中国四国地方の患者さんのために現時点で最善の診療技術を提供することに加え、当教室を新しいことに挑戦したい人が集まる場にする、こと、「論文のための研究」ではなく、あくまでも臨床に礎をおいて次世代の診療を研究開発することのために努力したいと考えております。皆様のご指導ご鞭撻をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 2000年 帝京大学市原病院 耳鼻咽喉科
- 2002年 東大病院 耳鼻咽喉科
- 2003年 東京通信病院 耳鼻咽喉科
- 2004年 竹田総合病院 耳鼻咽喉科
- 2005年 国立がんセンター中央病院 頭頸科
- 2008年 東大病院 耳鼻咽喉科 助教
- 2014年 東京大学大学院医学系研究科 博士課程修了
- 2015年 東大病院 耳鼻咽喉科 講師
- 2016年 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校 客員研究員（～2017年）
- 2020年 東京大学大学院 耳鼻咽喉科 准教授
- 2020年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 教授

## 東邦大学医学部麻酔科学講座 (大森) 教授に武田吉正氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、森松教授にご推薦いただき令和2年4月1日付けで、東邦大学医学部麻酔科学講座（大森）教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は昭和62年に東邦大学を卒業し、小坂二度見教授が主宰されている麻酔・蘇生学教室に入局すると同時に大学院に進学しました。大学院4年の夏よりコーネル大学とテネシー大学で3年間、研究員として脳虚血時の電気生理やエネルギー代謝を中心に研究させていただきました。帰国後は平川方久教授のご高配で脳蘇生グループの研究指導を開始しました。手術室では森田潔教授に全身管理を教わると同時に、集中治療室で脳虚血患者の治療をご指導いただきました。2002年にはマイアミ大学で1年間、客員准教授として研鑽を積む機会をいただきました。また、森田教授のご高配により、渡米中より医療機器メーカーと共同研究を開始し、蘇生時に脳を選択的に冷却する、咽頭冷却装置を開発しました。頸動脈は咽頭粘膜下を走行しており、血行性に選択的脳冷却が可能です。全国の救急救命センターで多施設臨床研究を施行し、咽頭冷却は2015年のJRC蘇生ガイドラインに掲載され、2016年に保険収

載されています。また、人体構成学教室の大塚愛二教授のご指導により、解剖を多視点多層で立体的に表示するシステムを開発しました。2010年よりパナソニックが映像装置をシステム化し、本装置は世界各国に提供されています。

東邦大学大森病院は大田区に所在し、数多くの緊急手術を受けています。岡山大学で学んだ経験をもとに、臨床・研究・教育において実力のある麻酔科医を育成していきたいと考えています。鶴翔会の先生方のさらなるご発展をお祈りすると共に、今後ともご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

### 略 歴

1987年3月 東邦大学医学部卒業  
 1987年4月 岡山大学麻酔・蘇生学教室入局  
 1990年9月 コーネル大学研究員  
 1991年3月 岡山大学大学院医学研究科博士課程修了  
 1992年4月 テネシー大学研究員  
 1993年4月 岡山大学麻酔科蘇生科医員  
 1997年1月 岡山大学医学部附属病院麻酔科蘇生科助手  
 2002年8月 マイアミ大学客員准教授  
 2007年5月 岡山大学医学部・歯学部附属病院麻酔科蘇生科講師  
 2011年5月 岡山大学病院集中治療部准教授  
 2020年4月 東邦大学医学部麻酔科学講座（大森）教授

## 東京女子医科大学医学部臨床工学科教授、集中治療科教授（兼務）および東京女子医科大学病院臨床工学科部運営部長に市場晋吾氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の皆様方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和2年10月1日付けで、東京女子医科大学医学部 臨床工学科教授、集中治療科教授（兼務）および東京女子医科大学病院臨床工学科部運営部長を拝命い

たしました。私は1987年に岡山大学医学部を卒業後、岡山大学大学院医学研究科（第二外科学）に進学し、清水信義名誉教授のご指導の元、重症呼吸循環不全患者を体外式膜型人工肺で治療する、Extracorporeal Membrane Oxygenation: ECMOを研究テーマとして医学博士を取得させて頂きました。ECMOは、簡易型の人工心肺装置により、回復（あるいは移植）まで心肺を強力に補助する概念の生命維持法です。

1994年よりUniversity of Michigan Medical Centerにリサーチフェローとして、さらに1997年から英国中部のLeicesterにあるGlenfield Hospital ECMO Centreに臨床フェローとして、新生児から成人まで年間100例のECMO治療を2年間勉強させていただきました。これら海外での経験がもとになり、現在ECMOの国際的な研究組織である、Extracorporeal Life Support Organization (ELSO) のAsia-Pacific chapterの副議長として活動をしています。海外留学から帰国後は、氏家良人名誉教授のご指導の元、岡山大学医学部救急医学講座講師、岡山理科大学工学部生体医工学科教授、岡山大学大学院地域医療学講座（寄付講座）教授、さらに日本医科大学付属病院外科系集中治療科臨床教授を経て、2020年10月から現職となりました。

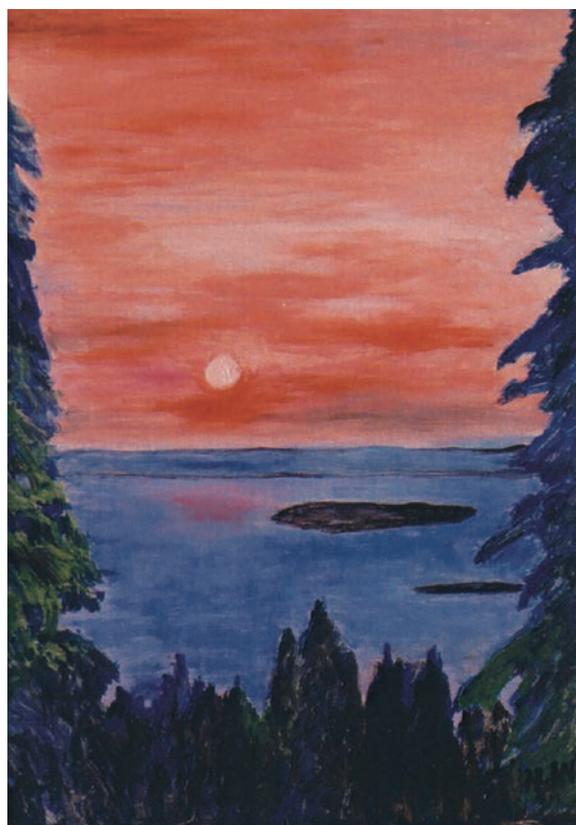
本講座は、全国でも稀な臨床工学を専門にする医学部講座であり、前任の峰島三千男教授に引き続き2代目となり、病院の最先端治療を支える臨床工学部の運営部長でもあります。東京女子医科大学は、人工心臓や血液浄化療法を中心とした人工臓器分野のパイオニア的存在であり、早稲田大学との連携で創設した「通称ツイズ（TWIns）」と呼ばれる医工学系の研究教育施設もあります。臨床のECMO治療技術を極めて、COVID-19に対するECMO治療も手がけるため、救命救急センターも兼任しておりますが、今後は基礎研究にも力を入れたいと考えています。岡山大学病院時代から一緒に仕事をしてきた、日本文理大学工学部の伊藤英史教授研究室やツイズとの連携を計画しており、世界に向けて成果を発信できるよう努力を続けて行く所存でございます。同門の皆様には、今後とも変わらず、温かいご協力およびご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### 略 歴

1987年3月 岡山大学医学部卒業  
 1992年3月 岡山大学大学院医学研究科修了  
 1987年4月 岡山大学医学部第二外科学教室入局  
 1987年9月 奥島病院 外科医師  
 1992年4月 公立南雲総合病院 外科医員

- 1992年10月 米国ミシガン大学医学部外科ECMO研究室 研究員
- 1995年6月 寺岡記念病院 外科医員
- 1996年1月 岡山大学医学部附属病院第二外科 助手
- 1997年5月 英国グレンフィールド総合病院 胸部心臓外科ECMOクリニカルフェロー
- 2000年4月 岡山大学医学部附属病院第二外科 助手
- 2000年5月 香川県立中央病院救命救急センター 医長
- 2001年4月 岡山大学大学院救急医学 助手
- 2005年4月 岡山大学大学医学部・歯学部附属病院救急部 講師
- 2007年4月 岡山理科大学工学部生体医工学科 教授
- 2010年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 地域医療学講座 教授  
岡山市立岡山市民病院救急センター長 (兼)
- 2013年4月 日本医科大学付属病院 外科系集中治療科 臨床教授
- 2020年10月 東京女子医科大学医学部 臨床工学科 教授  
東京女子医科大学医学部 集中治療科 教授  
東京女子医科大学病院 臨床工学部 運営部長

現在に至る



コリ国立公園（フィンランド）の朝焼け 2012年

井上 一

## 医学部創立150周年記念事業

### 岡山大学医学部 創立150周年記念式典開催のご案内

会員の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症の困難な状況下、第一線で医療にご尽力されていることに感謝と敬意を表します。

令和2年、岡山大学医学部は創立150周年の節目の年を無事迎えることができました。この長い歴史の中で1万2千余のすぐれた医師及び医療従事者を輩出し、中国四国地域はもちろん、我が国の医学、医療を支えてまいりました。これもひとえに諸先輩方の長きにわたるご活躍と並々ならぬご支援の賜物に他なりません。

また、創立150周年を迎えるにあたり、地元岡山の経済界をはじめ関連病院、鶴翔会会員の多くの皆様から、心温まるご支援をいただきました。ありがとうございました。篤く感謝申し上げます。

昨年は150周年という記念の年を迎えましたが、鶴翔会の多くの会員が新型コロナウイルス感染症対応に日々奮闘中であり、記念式典を延期せざるを得ない状況でした。本年もまだ新型コロナウイルス感染症の影響下ではございますが、これからの50年、100年を貫く機軸をしっかりと打ち立て、さらに大きく発展していくことが重要と考えています。ご支援いただきました皆様へのお礼と私たちの決意を表すため、下記のとおり創立150周年記念式典を挙行いたしますので、多数の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

#### 記

岡山大学医学部創立150周年記念式典及び記念講演(予定)

日時 令和3年11月3日(水・祝)  
(12時から受付開始)  
会場 ホテルグランヴィア岡山  
対象 鶴翔会会員  
(参加者数は250名までで予定しています)

次第

記念式典(13時30分～15時)  
記念講演(15時20分～16時)

理化学研究所生命機能科学研究センター

濱田博司先生(昭和50年卒)

※祝賀会は新型コロナウイルス感染症の感染防止の観点から中止となりましたので、ご了承下さい。

また、記念式典及び記念講演の開催内容が決定次第改めてお知らせいたします。

なお、昨年ご案内いたしました記念式典及び祝賀会において、祝賀会会費(15,000円)をお振込みいただきました先生には、お振込みいただきました会費の取り扱いについてのお問い合わせを会報に同封していますので、必ずご確認くださいませようお願い申し上げます。

ご不明な点など、お問い合わせは鶴翔会事務局へお願いします。

鶴翔会事務局 電話：086-235-7060

FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

令和4年4月発行の会報第132号を「150周年記念号」として発行することになりました。

つきましては、150周年にふさわしい思い出に残る記事等がありましたら、下記によりご投稿くださるようお願い申し上げます。

字数：1600～2000字程度(書式は自由)

写真等ありましたらお添えください

締切：令和3年12月28日(火)

提出先：鶴翔会事務局(p83参照)

### 学生論文コンクール「医学部将来展望・夢」表彰式を挙

岡山大学医学部創立150周年記念事業実行委員会は、医学科学生を対象に「医学部将来展望・夢」と題した論文コンクールを行い、令和2(2020)年7月9日(木)、優秀な成績を収めた7名の投稿者に対して表彰式を挙行いたしました。

本コンクールは、『岡山大学医学部百五十年記念誌』編纂WGの中で、「百年史発刊以降の50年間をただ振り返るだけでなく、これからの50年、100年先の将来に向けて、医学部がどう進んでいくべきかについても記載をする必要があるのではないか」という意見が出

されたことをきっかけに、これからの医学部を担っていく学生から論文を募集することとなったものです。

当初は5編の論文を表彰、記念誌に掲載する予定でしたが、優秀な作品が多く、論文審査委員会による厳正な審査の結果、7名を表彰することとなりました。

表彰式当日は、浅沼医学部長、吉野医学部創立150周年記念事業実行委員会委員長から、表彰状及び副賞が手渡された後、両教授及び大塚医学部百五十年記念

誌編纂WG座長から被表彰者に対し、今後の医学部を背負って立って欲しい旨の激励の言葉が贈られました。

その後、一同揃って笑顔で記念撮影を行い、終始和やかなムードで表彰式が執り行われました。

なお副賞（図書券）は、ルネッサンス基金が充てられました。ありがとうございました。

（文責：医学部百五十年記念誌編纂WG）





**受章**

瑞宝双光章	(昭47) 平松和子
瑞宝中綬章	(昭43) 青山興司
〃	(昭42) 斎藤大治
旭日双光章	(昭47) 白井隆
〃	(昭51) 西村公一
瑞宝双光章	(昭36) 木下陽
山陽新聞社賞	(昭52) 橋詰博行
〃	(昭55) 大塚愛二
第14回江橋節郎賞	(昭55) 西堀正洋
岡山県医師会学術奨励賞	(平18) 玉井圭
令和2年度日本医師会最高優功賞	(会員) 武田正彦
令和2年度学校保健および学校安全文部科学大臣表彰	(昭41) 岡部史朗
令和2年度社会保険診療報酬支払基金関係功績者厚生労働大臣表彰	(昭57) 種本和雄
令和2年度国民健康保険関係功績者厚生労働大臣表彰	(昭51) 山下祥一
令和2年度岡山県保健衛生功労者表彰	
公衆衛生	(昭42) 三村恭永
〃	(昭44) 徳毛誠雄
〃	(昭55) 藤田俊弘
〃	(会員) 五島紳一郎
〃	(会員) 櫻井和俊
〃	(会員) 内田寛
〃	(会員) 萩原秀紀
〃	(会員) 木村丹
へき地医療	(平5院) 遠藤彰
地域医療	(昭48) 柚木昌

地域医療	(昭58) 多田克彦
救急医療	(昭54) 辻尚志
岡山県保健福祉部長表彰	
公衆衛生	(昭46) 西一夫
〃	(昭50) 庵谷和夫
〃	(昭50院) 長谷井敏男
〃	(昭54) 津田隆史
〃	(昭56) 山下良孝
〃	(昭58) 宮木功次
〃	(会員) 児玉州平
〃	(会員) 高山晴彦

岡山市長表彰がん征圧事業功労 (昭35) 守谷欣明  
 岡山市保健所長表彰がん征圧事業功労 (昭59) 上田裕之

このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げます。今後益々の御健勝をお祈り致します。  
 ※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

**医学部・病院関係**

**定年退職**

人体構成学	大塚愛二
薬理学	西堀正洋
医療政策・医療経済学	浜田淳
脳神経内科学	阿部康二
放射線医学	金澤右昭
薬剤部	千堂年昭

**教授就任**

眼科学	森實祐基
組織機能修復学	宝田剛志
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学	安藤瑞生
病原ウイルス学	本田知之

**准教授就任**

脳神経内科学	山下徹
--------	-----

**講師就任**

脳神経機構学	宮崎育子
泌尿器科	和田耕一郎
総合リハビリテーション部	濱田全紀
心臓血管外科	黒子洋介

**学位授与**

**博士**

令和2年9月25日 (医歯薬学総合研究科)

野田 拓志	眼科学
塚原 紘平	救急医学
前田 直見	消化器外科学
日笠 友起子	麻酔・蘇生学
國府島 健	消化器外科学
森田 卓也	整形外科学
浅田 早央莉	循環器内科学
磯山 智史	麻酔・蘇生学
奥山 由加	腎・免疫・内分泌代謝内科学

原 賀 順 子	産科・婦人科学
金 谷 信 彦	消化器外科学
神 崎 勇 希	眼科学
越 宗 靖二郎	形成再建外科学
三 木 知 子	精神神経病態学
井 出 将 博	細胞化学
栗 原 英 祐	呼吸器・乳腺内分泌外科学
中 村 和 恵	疫学・衛生学
小 倉 聡一郎	循環器内科学
松 本 悠 司	脳神経外科学
松 枝 克 典	消化器・肝臓内科学
野 村 隼 人	皮膚科学

**事務局よりお詫びと訂正**

昨年12月の鶴翔会会員名簿発行に際し、多くの先生にご協力をいただき誠にありがとうございました。

名簿の掲載内容に誤りがありましたので、お詫び申し上げますとともに、次のとおり正しい内容を掲載し訂正いたします。関係の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

鶴翔会事務局

**旧教育職員**

氏 名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
松岡 徹	眼 眼			〒678-1181 兵庫県赤穂市有年橋原1157 TEL 0791-25-4189

**昭和38 (1963) 年卒業**

氏 名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
齊藤富士子	小 小	齊藤小児科 医院(開業)	〒703-8232 岡山県岡山市中区関278-8 TEL 086-279-8276 FAX 086-279-6360	〒703-8232 岡山県岡山市中区関278-8

**昭和43 (1968) 年卒業**

氏 名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
窪田 政寛	内 一内	田尻病院・ 名誉理事長	〒707-0003 岡山県美作市明見550-1 TEL 0868-72-0380 FAX 0868-72-4406	〒703-8246 岡山県岡山市中区藤原光町1-2-7 TEL 086-272-1417 FAX 086-272-1417

**大学院平成25 (2013) 年9月修了**

氏 名	専門 関係教室	勤務先	勤務先住所・TEL・FAX	自宅住所・TEL・FAX
窪田 淳一	内 一内	田尻病院・ 理事長・ 病院長	〒707-0003 岡山県美作市明見550-1 TEL 0868-72-0380 FAX 0868-72-4406	〒709-4312 岡山県勝田郡勝央町黒土762-1-105

関連病院関係

閉院

岡山中央奉還町病院

令和2年度(令和3年4月) 岡山大学医学部医学科卒業者

池澤 勝吾 池田 哲治 入谷 祐介 毛利 謙吾
佐武 秀紀 青江 一真 安倉 直樹 浅川 栞
穴井 映光 阿野 悟士 安部 裕貴 綾 晃記
荒川 愛奈 安藤 翔 井口 華 池内 康成
池内 綾介 石川偉一朗 磯金 優樹 市場嶺二郎
井上 義隆 今村 真悠 岩本 夏林 内海 大輔
江里 悠哉 本井 陽平 岡本 晃一 小笠 滉貴
小川 哲平 小栗みなみ 長田 仁 越智 俊樹
小野田 豪 柿本昂佑樹 河合 健吾 河村 彩芽
川本 雅也 栗原 淳 糀谷淳一郎 小林大一郎
近藤 俊雄 近藤 伶央 佐久間美帆 佐々木陽子
真田 知佳 椎名 豪 下山 舜也 白羽 慶祐
神野 駿太 杉 貴臣 角南 侑 住田まどか
関 美月 副島 佳晃 高須 絵理 高橋幸太郎
滝口 隆章 玉木 里於 田村 直道 塚本 光政
手島 和紀 寺本 友真 富永祐一郎 豊川英一朗
豊田 陽子 中嶋 章裕 中城 健 仲田 文雄
中原 良介 長尾 僚祐 永野 友樹 野村 昌紀
萩原 万瀧 橋本 千明 花谷 智美 早間 洋平
馬場 倫弘 平岡 凌河 福井 将貴 福武功志朗
藤井 広 藤田 敦也 藤村 和臣 船越 英丸
古川 琴絵 古川智英子 古川 稔樹 細木 良祐
牧野 竜生 松田 一樹 丸谷 梨栄 丸山 耕平
三木 紹君 三輪 浩己 村岡 修実 柳原 飛翔
矢野 愛華 山下 涼介 山田 凜々 山羽 峻平
山本亜佑美 山本 徳高 横山 和輝 横山 将
和田 帆香 久保 卓也 窪 征宣 水野 悠己
宮本 明奈 山本 典子

鶴翔会役員

鶴翔会役員は、令和2年度末任期満了に伴い改選の結果、次のとおり選出されました。

会長 豊岡 伸一
副会長(学内) 前田 嘉信 伊達 勲
(学外) 浅利 正二
幹事(学内) 岡田 裕之 藤原 俊義
大塚 文男 浅沼 幹人
(学外) 松尾 信彦 浜家 一雄
太田 武夫 谷崎 眞行
小田 慈
監事(学内) 吉野 正
(学外) 池田 敏

会員訃報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

Table with columns for member name, date of death, and age. Includes members like 川村光毅 (2021.1.15), 神坂脩 (2020.1.20), etc.

# クラブ報告

## 医英会 (旧 M・ESS)

※2021年2月より団体名称が変わりました

部長 増田 倫 敦

### 鶴翔会御侍史

医英会の部長を務めさせていただいております、医学部医学科4年の増田倫敦と申します。

依然として新型コロナウイルス感染症拡大が続く中、最前線で活躍される諸先生方をはじめ、関係者の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

本部活では現在、医学科22名、保健学科1名、薬学部生1名の計23名の部員が所属しております。様々な学科の他、一般入試の学生、国際バカロレアの学生、学士編入の学生、大学院生、帰国子女など多方面で学んできた学生が集まり、学年にかかわらず英語で医療を学び、国際化する社会に向けた医療人を育成することを目的として日々活動しています。

2020年の5月頃からは、活動内容をさらに深化させ、米国医師免許 (USMLE) 取得や外国人診療のための

経験を積むことを目標として掲げることで、より実践的な学びの場としております。具体的には、実際に日本の医師国家試験やUSMLEの試験で使用された症例をもとに、模擬医療面接を通じて臨床推論・Problem based learning (PBL) を行いつつ、英語で自分の考えを伝え、相手の考えを理解するため、医学的なプレゼンテーションを実施しています。

また、アドバイザーとしてマハムド・サビナ先生をお招きし、医療面接についてのアドバイス・講義をはじめ、PBLのディスカッションを通じ国際社会における医療人としての指導をお願いしています。事前準備に不可欠なCase File (症例報告) の添削や、医療面接に今後参加していただく外国人のStandardized patientのトレーニングも担って下さっています。

残念ながら、コロナの感染拡大を受け、最近はオンラインでの活動が中心となっていますが、互いに感染リスクに気を配りつつ、本部活で開発したアプリをカルテのように使用するなど、規制の中、離れた状態での診断方法などについてもディスカッションを進めています。

鶴翔会の皆さまにおかれましては、COVID-19の中大変ご多忙とは存じますが、コロナが落ち着きましたら是非一度PBLにご参加いただき、外国人診療についてご意見、ご指導いただければ幸甚です。医英会は今後も感染対策を徹底し、部員同士で協力し工夫しながら勉学、部活動に邁進して参ります。



COVID-19規制前の光景

## 医歯薬バドミントン部

### 主将 近藤大翔

コロナウイルスが世間に広まり早1年となりますが、依然勢いが止まることなく、鶴翔会の皆様におかれましては大変なご苦勞をされておられることと案じております。現在医歯薬バドミントン部の主将を務めさせていただきます、医学部医学科3年の近藤大翔と申します。

医歯薬バドミントン部は現在医学科24名、保健学科11名、薬学部2名の計37名で活動しています。週に3回の合同練習ではフットワークからノック練習など競技に向けた技術の向上は勿論、ランニングや筋トレなどの基礎体力の強化も行います。また合同練習の後には個人別に基礎練習や試合形式の自由練習を行っています。学年・性別・過去の経験年数に関係なく全員が同じメニューをこなすことにより、部員全員のレベル

アップを目指し日々活動しています。

昨年はコロナウイルスの影響により、年間の主要な大会や他大学との定期戦も全て中止となった上に、前期は3ヶ月以上もの期間部活動が禁止されてしまったり、禁止明け直後にも体育館の使用に人数制限が設けられ部員全員での練習ができなかったりと、満足な練習を行うことができませんでした。しかし秋からは14名もの新入生が加わった上に、感染防止のため声出しなどに一部制限はありますが部員全員での合同練習が再開され、コロナ禍以前の活気が戻ってきました。来年度こそはコロナウイルスが落ち着き、声出しも含め元の形での練習が再びできるようになること、大会や定期戦などで自分たちの練習成果が発揮できる機会があることを願いつつ、部員一同練習に励んでいきたいと思えます。

最後になりますが、今後とも医歯薬バドミントン部の活動を暖かく見守っていただければ幸いに存じます。また、皆様のご健康と益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。



## 会員のこえ

### 『行政組織の中の公衆衛生医師』の 仕事の紹介

岡山県保健福祉部 参与  
昭61 則 安 俊 昭

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が一昨年の年末から世界中に急速に拡がり、令和3年3月までに国内で約45万人に感染し、約8,500人が死亡、岡山県では、約2,500人が感染し、30人以上が亡くなっています。医療関係者の献身的な努力、社会全体での社会経済活動を犠牲にしながらの忍耐と、常時マスク着用や手指消毒の徹底などの努力により、現状の被害に抑えられています。放置すれば人口の数パーセントが犠牲になるおそれのある、戦争に匹敵する脅威と言えます。感染の拡大防止は一進一退で決して容易ではありませんが、今後、ワクチン接種が行き渡って集団免疫が確立すれば、社会経済活動を含め生活も大きく好転することが期待されます。

さて、このCOVID-19との戦いの中で、保健所等に勤務する公衆衛生医師が注目されることも増えてきています。しかし、岡山県行政組織では、そうした中であって、公衆衛生医師の欠員が生じており、若干名の医師を募集しています。

理念的な話になりますが、医師法第1条に、『医師は、医療及び保健指導を掌ることによって公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものとする』と、医師の使命が明記されています。この法律に照らして、COVID-19対策の中での公衆衛生医師の役割を見ると、予防のための普及啓発、感染の封じ込めに向けた感染者の入院やホテル療養の措置、接触者調査、入院病床の確保や入院・転院の調整、院内感染防止のための設備整備補助、クラスター発生時の支援体制の整備、ワクチン接種の円滑な実施に向けた市町村・医療機関・医師会等の連携の調整など、まさに『国民の健康な生活の確保』に取り組んでいると言えます。県行政組織における公衆衛生医師の役割は、その他にも、自然災害や食中毒発生時の対応など健康危機管理、必要な医療が効率よく適切に提供される体制の整備、生活習慣の改善や疾病の早期発見・早期治療に向けた普及啓発、健康づくりボランティア

組織の育成、医療施設の開設等に係る許認可、医療介護人材の確保対策など、さらに幅広い分野の業務があります。

こうした業務に医療・医学関係の基礎知識は不可欠であり、併せて、第一線で活躍する医療関係者との人脈や共感できるメンタリティ、臨床経験などもあれば、施策を進める上で大きな力になります。

地方公務員法で守られた堅い身分保障の下で、真剣に仕事に打ち込めば、多職種に囲まれて楽しく仕事ができ、達成感、遣り甲斐を感じられると思います。また、勤務を通じて得られた組織管理技術や人脈は、再び臨床に復帰することを選択する場合にも、健全経営や地域貢献に必ず役に立ちます。

『公衆衛生は、国試前に数日勉強しただけ』の先生も、何ら問題はありません。社会医学系専門医研修プログラム等で知識と技術を身につけていただき、近い将来、本県の幹部職員としてご尽力いただきたいと思っています。関心を持たれた先生には、岡山県の公衆衛生医師募集のホームページなども見ていただき、お声がけをくださいましたら幸いです。



下 山 敦 士

# 会員の近況

## 高等学校出前講義

昭60 松尾 俊彦

2019年11月と2020年1月、岡山大学病院は2つの審査を控えていました。一つは病院機能評価の更新。前回（2015年）までの病院機能評価では「一般病院2」として受審していましたが、2019年11月には特定機能病院に特化した新設の「一般病院3」として受審する予定にありました。もう一つは2020年1月の外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）の更新審査。近年、日本語を解する方だけが病院を受診するという時代ではなくなっていることから、外国人患者を受け入れるための体制づくりとして、岡山大学病院は2016年11月に国際診療支援センターを設置し、2017年に初めて認証を受けています。私も米国医師免許（ECFMG）を持つ関係で、この国際診療支援センター兼任教員になっています。受入れ体制のためのマニュアルの整備、情報の共有、病院内の掲示の見直し等、受審を控えた準備に対応する中、私も病院を見て回っておりま

した。

そんなとき、岡山県立瀬戸高等学校の1年生に講義をとという依頼が舞い込みました。この企画は、瀬戸高校の乙部憲彦校長と岡山大学SDGs推進企画会議議長の狩野光伸副理事（ヘルスシステム統合科学研究科教授）のつながりで、2018年から続いています（表1）。総合学習の一環として、「地域課題とSDGs、学問分野とのつながり」というテーマで文化・教育・社会・環境・医療の5分野の大学教員が話し、高校生が総合学習を深めるきっかけとなることを期待されているようです。講演後には質問座談会も予定され、高校生とサシで話をするという冒険付き。2回目を迎えたこの企画、医療分野の教員としてどんな話をするべきか、私もしばし考え込みました。

どんな人にも届く情報として掲示がなされているか、誰もが使える設備であるか、安全安心な施設であるかといった視点で病院内を見て回っているところでしたので、初めてのお題は「病院内の掲示に着目して医療を覗いてみる」、そんな話にしようと思い立ちました。日本語だけでなく英語と中国語も併記された院内廊下の通り線や標識、聴覚障害者や視覚障害者への配慮、医療安全のための本人確認、感染制御のための行動、通路に飾られた絵・写真、小児科外来の壁全体に描かれた絵など、自分自身も改めて認識したことについて紹介しました。幸い2年目の出前講義

表1 岡山県立瀬戸高等学校で岡山大学教員によって行われた分野別講演会

分野	進路・学問領域	2018年6月28日	2019年9月25日	2020年9月23日
文化	文学・芸術・歴史・国際・心理	松本 直子 (考古学) 社会文化科学研究科	山本由美子 (国際経済学) グローバル人材育成院	山本由美子 (国際経済学) グローバル人材育成院
教育	小中高校・生涯・保育・心理	原 祐一 (スポーツ教育) 教育学研究科	上村 弘子 (養護教育) 教育学研究科	橋ヶ谷佳正 (デザイン教育) 教育学研究科
社会	経済・法学・地域	田口 雅弘 (経済政策・経済史) 社会文化科学研究科	西田 陽介 (経営戦略) 社会文化科学研究科	田口 雅弘 (経済政策・経済史) 社会文化科学研究科
環境	理・工・科学・宇宙・生物・建築・農・情報・防災	横井 篤文 (上級URA) 副理事	岡安 光博 (材料工学) 自然科学研究科	井上麻夕里 (環境動態解析) 自然科学研究科
医療	看護・医・薬・福祉	狩野 光伸 (ナノ病態生理学) ヘルスシステム統合科学研究科	松尾 俊彦 (眼科学) ヘルスシステム統合科学研究科	松尾 俊彦 (眼科学) ヘルスシステム統合科学研究科

URA, university research administrator

でも、同様の依頼を頂戴できました。翌年の2020年はCOVID-19の最中でしたので、緊急事態宣言発令によって小児眼手術を延期せざるを得なくなった他県在住患児の家族とのやり取りや、手術の再予約に向けて術前の鼻咽頭SARS-CoV-2 PCRを院内で実施する体制を整えていく過程、また中国に一時帰国した外国人教員のケースを端緒として帰国後2週間の自宅待機を課す際の「職務専念義務」が免除される仕組みが大学で立ち上がったこと、夏休みの定期眼科診察を受ける海外在住の子どもにお願いする帰国後2週間の健康管理などについて紹介しました。

講義の後には10人ぐらいの1年～3年の生徒たちと車座となる座談会がありました。そこでは彼ら彼女らの将来の進路や仕事、これから総合学習で行おうと考えている企画などについて質問を受けました。果たして彼ら彼女らの糧となったのか、気になるところではありますが、地域社会とともに歩み、みんなで住みよい地域となるように、世代を超えて皆で考え、行動するきっかけにできればと思っています。

岡山大学は、2017年11月13日「SDGsに関する岡山大学の行動指針」を策定し、同年12月には第1回「Japan SDGs Award」特別賞「SDGsパートナーシップ賞」表彰を国公立大学として初めて受けました。SDGsをきっかけに与えられた、自由に未来を描ける世代に専門分野を語る機会。私にとっても何気なくこなしている業務の持つ意義を再認識できたのではないかと思います。年数を重ねた者も新しい視点での気づきを積むことができる、ちょっと楽しみな出前講義を経験しました。



下山 敦士

# 新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2020.9.1 ~ 2021.2.28)

掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2020/ 9/ 7	山陽新聞 MEDICA	11	院長に聞く 岡山済生会総合病院	専門医のチーム医療を推進	塩出純二 (会員)	
		12	高度医療で地域を支える ポストコロナ編	攻めの姿勢で地域救急医療を守る	前山博輝 (平19)	
		14	若手研究者5人に助成金		万成病院	
2020/ 9/ 9	読売新聞	29	無断で知人墮胎医師を懲戒解雇		岡山済生会総合病院	
2020/ 9/11	山陽新聞	26	松岡良明賞 進行肺がん治療		木浦勝行 (岡山大病院呼吸器内科)	
2020/ 9/12	山陽新聞	26	しびれ悪化「説明ない」	日常生活に大きな支障 脊椎手術問題	岡山済生会総合病院	
2020/ 9/13	山陽新聞	27	伝統の力を未来の力に	岡山大学医学部創立150周年記念 旧生化学棟講堂リニューアル	岡山大医学部	
		32	口腔ケア必要性訴え	認知症テーマに講演会	積善病院	
2020/ 9/15	山陽新聞	28	次代の医療人育成に活用	旧生化学棟講堂 改修完了	岡山大医学部	
2020/ 9/16	読売新聞	18	病院の実力 乳がん治療	乳がん予防切除 保険適用「遺伝性症候群」のがん患者に	岡山大病院、姫路赤十字、倉敷中央、おおもと、福山市民、福山医療セ、香川県中、四国がんセ、愛媛県中	
	山陽新聞	25	岡山大と県立大 爆破予告届く	18日 立ち入り禁止	岡山大	
2020/ 9/18	山陽新聞	29	病室にライブ配信 患者ら堪能	岡フィル招きコンサート	岡山大病院	
2020/ 9/20	読売新聞	23	病院の実力 岡山編 乳がん治療	遺伝子カウンセリング活用	岡山大病院、倉敷中央、おおもと、倉敷成人病セ、岡山済生会、岡山赤十字、津山中央、福山市民、福山医療セ、中国中央	
	山陽新聞	30	専門医の診察 玉野で可能に	脳卒中科など7科増設 地域医療の維持 貢献	岡山赤十字病院分院	
2020/ 9/21	山陽新聞 MEDICA	12	高度医療で地域を支える ポストコロナ編	チーム力でコロナ禍でも肺がんロボット手術を提供	西川仁士 (平26院)	
		13	糖尿病から腎臓を守るために	糖尿病性腎症の診断と治療から予防まで	糖尿病腎症と透析療法 透析療法の種類と実際	杉山 斉 (平元)
		14	軽度認知障害を簡易検査	定期チェックで自覚促す		倉敷中央病院、岡山旭東病院
2020/ 9/27	山陽新聞	25	新聞を読んで 患者と家族 勇気づけて		松山正春 (昭44)	
		28	進行肺がん 生存率向上	免疫療法、ゲノム 新たな技術日々進歩	木浦勝行 (岡山大病院呼吸器内科)	
2020/ 9/30	山陽新聞	1	課題を探る 岡山県知事選を前に	新型コロナ 感染対策と経済再生急務	藤田浩二 (平19)、松山正春 (昭44)	
2020/10/ 3	山陽新聞	29	エクモカー コロナ重傷者治療しながら搬送	来年度にも導入 中四国初救命率の向上期待	岡山大病院	
		31	「脊椎手術で後遺症」	医師らを賠償提訴	岡山済生会総合病院	
2020/10/ 5	山陽新聞	23	一人で悩まず相談を	相次ぐ芸能人の死 身近な人失った心境	佐藤俊介 (平21)	
	山陽新聞 MEDICA	12	高度医療で地域を支える ポストコロナ編	チームワークと新装備で重症外傷患者に迅速対応	繁光 薫 (平3)	
		13	糖尿病から腎臓を守るために	糖尿病性腎症の診断と治療から予防まで	腎症の予防には何が必要か	片山晶博 (平16)
			代表的疾患のポイントと整形外科の取り組み	手根管、肘部管、CRPS	小西池泰三 (昭60)	

掲載年月日	媒体		見出し		備考
2020/10/13	山陽新聞	28	臓器提供 意思表示を	移植推進月間合わせ県ガバンク	田中信一郎(昭50)
			専門人材を地域に	新見公立大 開学40周年で式典	公文裕巳(昭49)
2020/10/18	山陽新聞	32	中脾腫にオブジーボ効果	18人中14人 がん3割超縮小	藤本伸一(平6)
2020/10/19	山陽新聞 MEDICA	11	院長に聞く おおもと病院	術後のより良い生活を重視	磯崎博司(昭49)
		12	高度医療で地域を支える ポストコロナ編	チーム力でなし得る「下肢関節疾患に対する人工関節治療」	皆川 寛(平15)
			お尻から血が出たら	気後れが手遅れを招く大腸内視鏡検査のすすめ	滝上隆夫(昭53)
		13	代表的疾患のポイントと整形外科の取り組み	中高年の肩の痛み	小西池泰三(昭60)
		14	倉敷平成病院の救急棟完成	手術室拡張、処置スペース増	倉敷平成病院
2020/10/21	読売新聞	17	病院の実力 胃がん治療	胃がん 増える腹腔鏡手術	年に1回内視鏡検査を
	山陽新聞	26	津山中央病院勤務者が感染		
2020/10/23	山陽新聞	27	奉還町病院 今月末で閉院	岡山中央病院に統合	岡山中央奉還町病院
2020/10/25	読売新聞	31	病院の実力 岡山編	迅速病理診断 広がり確認	岡山大病院、倉敷中央、岡山済生会、岡山医療セ、岡山労災、岡山市民、おおもと、倉敷成人病セ、松田、福山医療セ、日本鋼管福山
				痛くなる症状 相当悪化	
2020/10/28	読売新聞	27	県内9人感染 1人死亡	新型コロナ 知事、注意呼びかけ	津山中央病院
	山陽新聞	27	岡山県内9人感染 別の疾患で1人死亡		津山中央病院
2020/10/29	読売新聞	29	感染者最多15人 1人死亡	新型コロナ 病院クラスター計19人に	津山中央病院
	山陽新聞	27	クラスター収束見えず	重症リスク高く危機感	岡山県最多15人感染
2020/10/30	読売新聞	29	感染者31人 1人死亡	新型コロナ 勝央の企業でクラスター	津山中央病院
	山陽新聞	29	ALS進行遅延効果 ヒト骨髄の「Muse細胞」投与	新たな治療法に可能性 マウス実験で確認	山下 徹(岡山大脳神経内科学)
2020/10/31	山陽新聞	31	コロナ拡大緊急インタビュー	感染対策、健康管理を 多人数の会食避けて	頼藤貴志(岡山大疫学・衛生学)
			県北部に感染者集中	南部受け入れ進める	津山中央病院
2020/11/ 2	山陽新聞 MEDICA	11	人生100年時代 生き生き	92歳男性 心臓の複合手術成功	大動脈弁置換、僧帽弁形成、冠動脈バイパス
		12	高度医療で地域を支える ポストコロナ編	最新の上部消化管内視鏡検査と新たな診断機器開発	堀 圭介(平23院)
		13	代表的疾患のポイントと整形外科の取り組み	膝関節症患者さまのより良い社会復帰を目指して	高木 徹(平14院)
			消化器外科専門病院の現場から	高齢者の消化器がん治療、検診の重要性	勝部亮一(平16)
2020/11/ 3	読売新聞	25	秋の叙勲 県内71人		齋藤大治(昭42)、青山興司(昭43)
	山陽新聞	28	小児医療の充実に尽力		青山興司(昭43)
2020/11/ 5	読売新聞	22	感染症専用病棟が完成	36床 態勢強化	岡山市民病院
	山陽新聞	28	コロナ患者対応強化	病棟改修36床に増床	岡山市民病院
2020/11/10	読売新聞	31	発熱外来用テント導入	インフル流行備え	岡山市民病院
	山陽新聞	28	発熱専門外来を公開	エアータント試験設置	岡山市民病院

掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2020/11/12	山陽新聞	29	オンラインで意気込み	岡山大受け入れ途上国女性研究者7人	UNCTAD連携 本年度中にも来日	岡山大
2020/11/13	山陽新聞	30	コロナ禍 初産不安	母親学級中止影響か 情報入手困難に		中塚幹也(岡山大保健学研究科)
			肺がん治療法報告	岡山で学術集会開幕		遠西大輔、木浦勝行(岡山大病院呼吸器内科)
2020/11/14	山陽新聞	27	肺がん手術2割減	岡山市内主要5病院		豊岡伸一(岡山大呼吸器・乳腺内分泌外科学)
		28	医師ら棄却求める	岡山済生会 後遺症賠償訴訟		岡山済生会総合病院
2020/11/17	山陽新聞 MEDICA	15	冬場の心臓病 気を付けて	入浴時ヒートショックも		廣畑 敦(平8)
		16	高度医療で地域を支えるポストコロナ編	周産期母子医療センター		河原義文(会員)
			お尻から血が出たら	直腸肛門内圧検査		嶋村廣視(昭61)
		17	代表的疾患のポイントと整形外科の取り組み	外傷・骨折の治療ゴールとは		金丸明博(平20)
18	岡山中央病院 新棟が稼働	リハビリ、透析治療充実		岡山中央病院		
2020/11/18	読売新聞	17	病院の実力 肝臓がんの治療	肝臓がん 切除手術で根治へ	分子標的薬など 選択肢増える	岡山大病院、姫路赤十字、松田、岡山済生会、福山医療セ、香川県中、愛媛県中、済生会今治、近森
2020/11/19	山陽新聞	7	医療補助アプリ普及	岡大発ベンチャー 丸紅子会社と契約		牧 尉太(岡山大病院産科婦人科)
		29	B型肝炎の悲劇訴え	患者遺族が講義		岡山大医学部
2020/11/20	山陽新聞	24	市内でコロナ感染急増	隠れクラスター発生か	一人一人が予防徹底を	松岡宏明(昭60)
2020/11/21	山陽新聞	31	ON AIR コミュニティー FM レディオモモ79.0MHz	小林弁護士のプログレの道内科医の清水さん迎え		清水孝一(平12)
2020/11/22	読売新聞	27	病院の実力 岡山編 肝臓がんの治療	多くは肝炎ウイルス原因		岡山大病院、松田、岡山済生会、倉敷成人病七、倉敷中央、岡山市民、岡山労災、福山医療セ
				休肝日作り 食生活改善		松田忠和(昭49)
	山陽新聞	25	山陽新聞を読んで	信頼おける情報源の新聞		松山正春(昭44)
2020/11/24	山陽新聞	20	外部資金の獲得強化	岡山大が共同研究加速 3年間で5億円上積みへ		岡山大
2020/11/26	山陽新聞	27	クラスター予防を 事業所対象 県が研修会	消毒徹底など訴え		高尾総司(岡山大疫学・衛生学)
2020/11/27	山陽新聞	34	がん遺伝子高精度検査	来月から 治療薬を選択		岡山大病院
2020/11/28	読売新聞	31	この1か月外出自粛を	県医師会、感染状況受け		岡山県医師会
2020/11/29	山陽新聞	26	不要不急外出自粛を	県民に呼びかけ		松山正春(昭44)
	山陽新聞	28	献体115人 学生ら悼む	岡山大で慰霊祭		岡山大医学部
2020/12/ 1	山陽新聞	27	研究者15人に助成金を贈る			岡山医学振興会
2020/12/ 3	山陽新聞	26	高原滋夫基金 2施設に助成金			故高原滋夫(昭6)、高原郁夫(昭45)
2020/12/ 4	山陽新聞	26	「出自知る権利を」65%	生殖補助医療法成立へ 法「必要」70%		中塚幹也(岡山大保健学研究科)
2020/12/ 6	山陽新聞	27	感染対策徹底呼びかけ	オンラインで講演		頼藤貴志(岡山大疫学・衛生学)
2020/12/ 7	山陽新聞 MEDICA	13	岡山市立市民病院「低侵襲手術センター」設置	外来段階から入退院まで支援	「身体と心にやさしい治療」目指す	佃 和憲(平4)
				脳卒中治療		小川智之(平12)
				本当に怖い大腿骨近位部骨折の話		土井 武(平8)
				「低侵襲手術」って何ですか？		池田宏国(平12)

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2020/12/10	山陽新聞	26	幹細胞の微粒子 傷んだ心筋修復	新治療法開発に期待	王 英正 (岡山大病院新医療研究開発センター)	
2020/12/15	山陽新聞	29	危うい医療需給バランス	コロナ感染者急増 年末年始の診療体制整備	ワクチン接種 資機材、人員が課題 松山正春 (昭44)	
2020/12/16	読売新聞	13	病院の実力 首の病気	首の病気 要手術か見極めを	繊細な技術不可欠 事前によく検査 岡山大病院、姫路赤十字、聖マリア、岡山旭東、広島市民、大田記念、香川県中、愛媛県中、愛宕	
	山陽新聞	32	岡山大病院4人 医療従事者感染	手術50件中止	岡山大病院	
2020/12/17	読売新聞	33	新たに32人 1人死亡	岡大病院と倉敷 クラスター発生	岡山大病院	
	山陽新聞	31	岡山大病院でクラスター 県内感染32人	岡山大病院手術を再開 関係職員の陰性確認	岡山大病院	
2020/12/20	読売新聞	27	病院の実力 岡山編 首の病気	脊髄や神経根 圧迫で発症	岡山大病院、岡山旭東、岡山市民、大田記念	
				椎弓形成術 高い安全性	土井英之 (平11)	
2020/12/21	読売新聞	29	新型コロナ 最多111人	総計1,000人突破 岡山市長ら注意よびかけ	則安俊明 (昭61)	
2020/12/22	読売新聞	29	医療機関 負担軽減協力を	新型コロナ感染1,000人突破 県医師会長に聞く	若者 大人数の行動控えて 松山正春 (昭44)	
2020/12/22	山陽新聞	29	岡山県医療非常事態宣言	Xマス、正月は静かに	松山正春 (昭44)	
2020/12/23	山陽新聞	31	逼迫度増す岡山県内病院	足りぬ人手 「限界近い」 コロナ以外手術制限も	岡山大病院、岡山市民病院、倉敷中央病院	
2020/12/27	山陽新聞	25	岡山大 授業大半「遠隔」	コロナ拡大で来月5日～14日 共通テストへの影響防ぐ	岡山大	
2020/12/29	山陽新聞	27	岡山市民病院医師を告訴	患者遺族「術式誤り」 業過致死容疑	緊急再手術 1週間3件 岡山市民病院	
2020/12/30	山陽新聞	22	少しでも多く人救う	緊張感増す年末年始	藤田浩二 (平19)	
2020/12/31	読売新聞	25	長島愛生園 開所90年式典		長島愛生園	
2021/ 1/ 3	山陽新聞	1 17	第79回山陽新聞賞	社会 橋詰博行、教育 大塚愛二	橋詰博行 (昭52)、大塚愛二 (岡山大人体構成学)	
				社会功労 手外科スペシャリスト		教育功労 医療発展へ解剖学追及
2021/ 1/ 4	山陽新聞	24	先進医療提供へAI人材を育成	21年度 岡山大に新コース	岡山大大学院医歯薬学総合研究科	
2021/ 1/ 8	山陽新聞	25	新院長募集中	運営見直しへ 人材求め初の試み	笠岡市民病院	
2021/ 1/10	山陽新聞	25	コロナ感染状況と医療提供体制発信	ネットで専門家有志	頼藤貴志 (岡山大疫学・衛生学)、萩谷英大 (岡山大病院総合内科)、藤田浩二 (平19)	
2021/ 1/15	山陽新聞	1 5 26	第79回山陽新聞賞贈呈式	研さん積み地域貢献	橋詰博行 (昭52)、大塚愛二 (岡山大人体構成学)	
				喜びの受賞者		患者の生活妨げない コロナ禍立ち向かう
				川崎医科大学付属病院長ら選ぶ		永井 敦 (昭57)、猶本良夫 (旧教員)
2021/ 1/18	山陽新聞 MEDICA	15 16 17	ルーツを語る 心臓病センター榊原病院	次代を見極め次の一手	榊原 亨 (旧教員)、榊原 宏 (昭17)、榊原 宣 (昭31)、榊原 敬 (会員)	
			高度医療で地域を支えるポストコロナ編	大腸内視鏡健診開始にあたって	宮島孝直 (昭57)	
			代表的疾患のポイントと整形外科の取り組み	骨粗鬆症について	小西池泰三 (昭60)	
2021/ 1/20	読売新聞	13	病院の実力 腰の病気	腰痛 排尿障害出たら手術	椎間板ヘルニア 薬を注入する治療も 姫路赤十字、神戸赤十字、岡山旭東、香川県立、愛媛県立、愛宕	

掲載年月日	媒体		見出し		備考		
2021/ 1/21	読売新聞	27	拡張型心筋症 小児患者の治療法に光	微小物質が機能改善	王 英正 (岡山大病院新医療研究開発センター)		
			「居心地いい病院目指す」	新棟落成式	倉敷成人病センター		
2021/ 1/24	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 腰の病気	薬や運動 保存療法が基本	岡山大病院、岡山旭東、岡山市民、広島市民、大田記念		
				しびれなど 脚にも症状		土井英之 (平11)	
2021/ 1/27	山陽新聞	25	コロナ宿泊療養施設宿泊者診療 オンラインに	軽症・無症状向け	岡山大病院		
2021/ 2/ 1	山陽新聞 MEDICA	11	川崎医科大学附属病院のリエゾン会議	がんの脊椎転移 早期治療で余命延	残された時間 自分らしく生きるために	中西一夫 (会員)	
		12	肝臓病の治療	肝臓がんの外科的治療 からだにやさしい肝臓手術もあります		児島 亨 (平11)	
		13	ハートチームの総力で ～最先端の治療から在宅復帰まで～			心臓弁膜症の外科手術	都津川敏範 (平9)
				身体と心に優しい治療 ～低侵襲手術センターの取り組み		「低侵襲手術」を支える麻酔科医	木村雅一 (昭57)
		14	ロボット手術、眼科充実 新棟完成	放射線治療エリアも新設		倉敷成人病センター	
2021/ 2/ 6	山陽新聞	28	病院長に前田氏 岡山大学		前田嘉信 (岡山大血液・腫瘍・呼吸器内科学)		
2021/ 2/ 9	読売新聞	25	ワクチン保管 冷凍庫配備	医療従事者接種向け	岡山医療センター		
	山陽新聞	29	ワクチン保管 冷凍庫を設置	先攻接種の岡山2病院	岡山医療センター、岡山労災病院		
2021/ 2/10	山陽新聞	28	大学院研究科長新任		伊達 勲 (岡山大脳神経外科学)		
2021/ 2/11	読売新聞	25	コロナの後遺症ケア	岡大病院に外来 15日から開設	岡山大病院		
	山陽新聞	1	コロナ後遺症外来新設	不眠、脱毛、嗅覚異常・・・	岡山大病院		
		24	がん乳幼児受け入れ	カンボジアから2人 あすにも手術	岡山医療センター		
2021/ 2/13	山陽新聞	25	「明るい兆し」「様子みる」	コロナワクチン特例承認	医療機関 接種準備急ぐ	岡山医療センター、岡山労災病院	
2021/ 2/16	山陽新聞 MEDICA	15	ルーツを語る 笠岡第一病院	地域医療への貢献が原点	宮島厚介 (会員)、藤井大輔 (昭20専)、橋詰博行 (昭52)		
		16	肝臓病の治療 肝臓病の内科的治療	最新抗ウイルス療法と内科的肝がん治療	池田房雄 (平7)		
2021/ 2/17	読売新聞	24	病院の実力 心臓病治療	心臓病治療 複数の選択肢	カテーテル 開胸より負担軽く	岡山大病院、ツカザキ、神戸赤十字、西宮渡辺心臓脳・血管セ、心臓病セ榊原、倉敷中央、広島市民、福山市民、香川県中、近森、高知医療セ	
2021/ 2/18	山陽新聞	27	コロナ感染拡大防止へ	花粉症 早めの治療を	くしゃみや鼻水 症状で見分け困難	檜垣貴哉 (岡山大耳鼻咽喉・頭頸部外科学)	
2021/ 2/19	山陽新聞	26	大学院研究科長 学部長ら新任		豊岡伸一 (岡山大呼吸器・乳腺内分泌外科学)		
2021/ 2/21	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 心臓病治療	バイパス手術 通り道作る	岡山大病院、心臓病セ榊原、倉敷中央、津山中央、岡山市民、岡山労災、広島市民、福山市民		
2021/ 2/22	山陽新聞	21	伝統つなぎ来年また	西大寺会陽福男	藤田琢二 (昭42)		
2021/ 2/24	山陽新聞	22	最先端がん治療 新薬開発	ホウ素中性子補足療法 5年後治療目指す	道上宏之 (平11)		
2021/ 2/26	山陽新聞	31	認知症予防、リスク学ぼう	ネットで講座公開	岡山大病院		

掲載年月日	媒体	見出し		備考
2021/ 2/27	山陽新聞	27	子どもの予防接種 不要不急に当たらず 回避 や延期しないで	國富泰二（昭41）
		30	吉備国際大学長選任	河村顕治（昭60）
2021/ 2/28	山陽新聞	26	玉野市財政 困難に直面 3大型事業が集中	10年後35億円不足 行革で スリム化不可避 玉野市民病院、玉野三井病院
		27	コロナ後遺症外来開設 複数の診療科連携	治療のほか症状分析も 徳増一樹（平25）
2021/ 3/ 1	山陽新聞 MEDICA	13	TAVI認定施設 治療開始 岡山県北初 心疾患患者の 救命、生活改善期待	津山中央病院
		15	ハートチームの総力で ～ 最先端の治療から在宅復帰 まで～	不整脈 伴場圭一（平8）
		16	病院トラブルQ&A コロナ 患者が出たら	現場の視点 常に新しい知 見取り入れ 今城健二（昭58）
	山陽新聞	22	氏名と生年月日診療前に告 げて	患者誤認防止狙い 徹底に 課題も 岡山大病院、倉敷中央病院

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。



# 歴史の広場

## 医師養成の歴史と岡山大学医学部 —その6

昭41 棕野 洋

### 専門職（プロフェッション）

専門性、道徳性、公益性が強く求められる医師は、ヨーロッパでは昔から専門職（プロフェッション profession）として扱われてきた。professには「公言する、信仰する、…の専門家として名乗る、教授として教える」等の意味がある。中世ヨーロッパの大学で高等教育を受けた人達が、人々や社会に貢献することをキリストの前で誓う行為がプロフェスであり、それを行って初めて社会的に認知された職業人になれるとされた。宗教的な意味合いがある為、人間としての倫理観を伴うものとされている。中世ヨーロッパで大学が創設された時、聖職者養成の神学部、医師養成の医学部、法曹人養成の法学部が設置された為、聖職者、医師、弁護士の3つの職業に携わる人々と、彼らを教授する人を、知識人階級としてプロフェッションと呼んでいた。一般の人々にはその職の内容が容易には理解出来ない専門職に就くには、一定の資格を必要とし、免許が与えられること等により、地位と独占性が認められ、職業倫理の尊重が求められた。

ヨーロッパに比べて国の歴史の浅い米国では、コロンブスの発見（1492）以来、英国の植民地、独立戦争（1775～1783）を経て、南北戦争（1861～1865）に至るまで、医師に対する国の規制はなく、自己責任による民間療法が主であり、ヨーロッパで教育を受けた医師も僅かにいたが、知識や技術の水準が不明な状態であった。ピューリタンの指導者を育成する為に、1639年に設立されたアメリカ最古の高等教育機関であるボストンのハーバード大学に、医学部が設立されたのは1782年になってからであった。1861年からの南北戦争では、両軍共に医療従事者の不足が目立ち、専門知識を有する医師の必要性の認識が高まった。医師養成の為に、英国から独立したこともあって、臨床重視のイギリス医学ではなく、学術的なドイツ医学を採用した医学部が1910年頃まで乱立した。ジョンズ・ホプキンス病院付属の医学部が設立されたのは1893年で

あった。

1846年には、教育改革をおこなうことを主目的に、アメリカ医師会（American Medical Association: AMA）が成立していたが、大小様々な私立の営利目的の医学部を運営する医師達が



まとまらず、教育改革には至らなかった。1904年にAMAに医学教育審議会が設立され、医学校の視察や評価をするようになり、1908年にカーネギー財団の委託を受け、教育者として有名なアブラハム・フレクスナーが1909年からアメリカとカナダの155の全ての医学校の訪問調査を行い、①学校名、創立年、学校の系列 ②入学資格 ③生徒数 ④教員数 ⑤維持費の財源 ⑥研究設備 ⑦臨床設備について調査し、1910年、「合衆国とカナダにおける医学教育」（Medical Education in the United States and Canada: A Report to the Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching）としてまとめた。これがいわゆる「フレクスナー報告」である。

公衆の衛生管理を担う為に、医師には広い科学的知識が必要であるとして、入学資格として生物学、化学、物理学等の知識が必要であり、これらを学ぶ為に、大学予科教育が必要と考えられるようになった。ドイツ方式である研究と臨床の施設を併せ持ち、近代医学教育の先駆とされる、ジョンズ・ホプキンス大学やハーバード大学医学部の当時のカリキュラムは4年制で、2年間は解剖学、生理学、病理学等の基礎医学を学び、その後2年間で内科、外科、産科等の臨床を学ぶというもので、戦後約40年間続いた我が国医学部の専門課程のカリキュラムとほぼ同じであった。2年間の臨床医学を学ぶ為には、指導すべきライセンスを持つ経験豊かな常勤の医師と、彼らの研究施設や、指導するに足る病院施設が必要とされた。彼は医師であることは即ち研究者であることと考えていた。調査したメディカルスクール155校のうち、独自に作成した教育レベルの基準を満たすのは5校だけであったと報告し、全国の大学に、高い評価を得たジョンズ・ホプキンス大学の教育カリキュラムを採用するようにすすめた。基準を満たせない学校は淘汰され、廃校となり、1920年には85校にまで減少した。

戦後C. F. サムス大佐はこのフレクスナー報告を手本にして、我が国の医学教育改革を行ったと言われている。

こうしてフレクスナーの報告を機に、AMAの意向に沿うように教育改革が進められ、全米で医学校の水準が均一化し、医師になる為のプレメディカルコース、常勤の研究者である教育者と研究施設、臨床教育の為の病院施設等が必要と考えられるようになり、専門職としての医師の養成システムが整っていった。更に、専門職としての団結力強化により、医師の団体が力を得て、州による免許制度も出来るようになった。

フレクスナーの考えた専門職の規準とは、①高度な知的活動を個人が責任をもって行う ②実用的、実践的である ③学ぶことの出来る高度な技術や知識である ④高度な専門教育により他に伝達可能な技術や知識である ⑤他人を援助したいという利他主義的欲求がある ⑥同業者の団体・学会・組織を作り、その発展に寄与する の6点とされている。

最近では医療職以外にも、専門職と称される仕事が増えてきた。専門的な教育を受け、資格なり、免許を得れば、専門職であると考えるのは間違いではないだろうが、医師を目指す場合は、新たな知識や技術の習得と共に、他の人を助ける利他主義的な要素と倫理観を持ち続けることが欠かせない。

岡大では、高い職業意識を備えた医師を養成する為、医師に求められる基礎的資質を「患者中心の視点」と「自己研鑽」と定義し、平成27年(2015)度から、医学科1年生から5年間、医師に必要な資質とは何かを主体的に考える必修講義「プロフェッショナリズム」が始まっている。医師養成の面からは、学生時代の学びとして非常に大切であり、基本的な学びであると思う。

昭和41年(1966)卒の我々の時代には、プロフェッショナル教育としての講義はカリキュラムには無かったが、医師は生涯学び続け、倫理観、道徳観を持ち、利他的な仕事であることを忘れてはならないとか、人命を最も尊重し、医学的知識を人を害するために使ってはならないとか、年齢、疾患、信条、国籍、人種、性、社会的地位等によって差別してはならない等の、ヒポクラテスの誓いとかジュネーブ宣言等に触れられていることは、医学を学ぶ過程において、先輩や同輩の生き方に接するうちに、自然に学んでいったものであった。

知人を無断で墮胎した医師、医師による集団レイプ、医学生団体的暴行、医師のあおり運転、万引きを繰り返す女医等々の信じられない最近の医師の報道に接すると、専門職である医師が、最近では微妙に変化しているのではないかと、そしてそれは偏差値の面から

選ばれる入試の弊害なのではなかろうかと感じることもあった。

令和2年のコロナ禍では、世界中に不安と恐怖が広がった第1波の際に、我が身の感染の危険に拘わらず、急増する患者の治療に当たる医療従事者の懸命な姿に、世界のあちこちで感謝の念を捧げる人々の姿が放映され、世界中に共感と感動を巻き起こした。余人では為し得ない専門職に対する世界中の人々の尊敬と感謝の念の表明であり、世界の人々の共通の思いであったと思う。医療に携わる我々が大切に守るべき医療技術と利他主義的活動に対するもので、知識や技術を得ることで専門職と呼ばれる職業とは一線を画すべきものであると改めて感じた人も多かったのではないかと思う。



アメリカでも

ヨーロッパでも



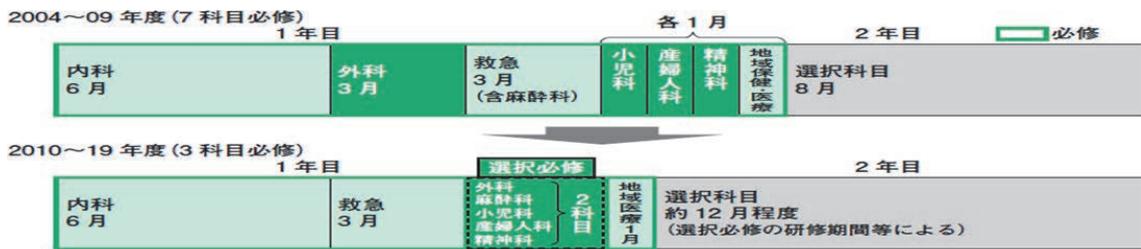
日本でも

### インターン制度廃止後における卒後臨床研修の変化 初期研修医と後期研修医から研修医と専攻医へ 2回目 の医籍登録

インターン制度廃止により、昭和43年(1968)から、卒後直ちに国試を受け、医師となってから臨床研修を受ける事になった。卒後2年間の臨床研修(初期臨床研修)が努力規定であったので、大多数の医師は卒業後直ちに入局し、プライマリケアを学ぶことなく、初期研修医として専門の科での入局後の臨床研修を受けることとなった。そして初期臨床研修が修了すると、殆どの医師が後期研修医として、学会認定の専門医(認定医)を目指して、引き続き3~5年間の専門医研修プログラムによる研修を、大学を中心に行うことになった。平成3年(1991)に始まった大学院重点化

により、内科や外科といった大きなくくりの教室から、臓器別に細分された研究室単位の教室となり、その狭い診療範囲の教室で卒業直後の入局者に対する研修を行った為に、診療範囲の狭い医師の養成となった。その上、平成16年（2004）にスタートした国立大学法人化により大学病院診療科の更なる細分化が起り、細分化した研究室単位での医師養成では、人を診ずに病気を診る医師の養成となる為に、臨床の場においては、内科医だけでも専門分野毎に何人もの医師が必要とされ、医師不足と言われる状態を招くことが危惧された。

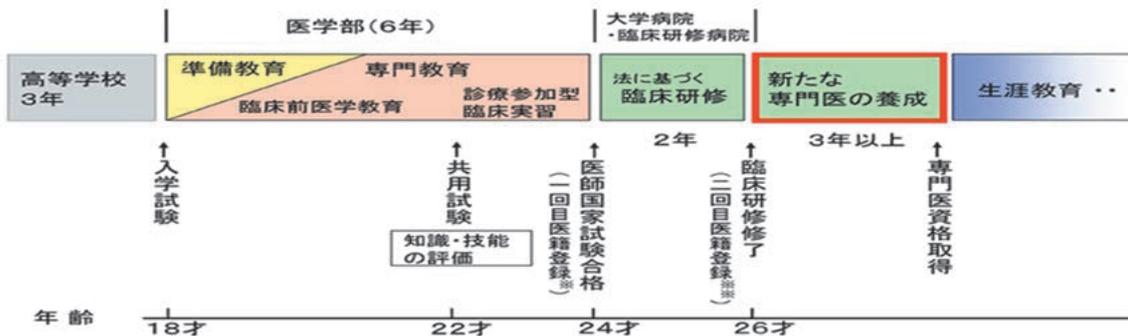
こういった流れの中で、多様なニーズに対応出来、専門分野以外の病態に対しても、理解し対応出来る判断力のある医師の養成が望ましいと考えられるようになり、医師としての基盤形成の時期に、患者を全人的に診るという基本的な診療能力を修得し、医師としての資質の向上を図ろうと、診療する医師には卒業後2年以上の臨床研修を必修義務化し、専門医療を学ぶ他に、プライマリケア、地域医療、僻地医療等も学ぶ新医師臨床研修制度が平成16年（2004）に誕生した（医師法第十六条の二）。



この新しい臨床研修制度（スーパーローテート）は、大学だけでなく、臨床研修病院の指定を受けた病院でも研修出来ることになり、給与や住宅等の研修環境は改善され、プライマリケアの診療能力を修得出来るようになった。内科6か月以上、外科3か月以上、救急（麻酔含）3か月以上、小児科、産婦人科、精神科、地域保健・医療の4科目を1か月以上学ぶ研修が必修となった。残りの8か月は自由に選択出来るものを研修することが基本とされた。学生と違って、医師免許を持った上での、指導医が異なる短期の研修では、興味を持ってない科については、教える方にも受ける方にも、熱心に取り組めないという問題が目立つようになり、5年目の見直しで、プライマリケア、地域医療研修は維持しつつ、選択出来る枠を広げ、内科6か月、救急3か月、地域医療1か月が必修となり、外科、麻酔科、小児科、産婦人科、精神科のうち2科目が選択必修となり、2年目の自由枠を増やした。

必修義務となった法定の2年間の初期研修が終わると、2回目の医籍に登録する。その後は、一人前の医師として開業も可能であるが、彼らの略9割は後期臨床研修に進み、学会認定の専門医の資格を得る為に学会に属し、更なる専門医研修を積む。大学院に進む人もいる。従来、医籍登録は医師免許取得時のみであったが、医師法第十六条の四により、厚労大臣が、臨床研修を修了した者の申請により、臨床研修を修了した旨を医籍に登録することとなった。研修終了が研修管理委員会で承認されると、病院から医師臨床研修修了登録証交付申請書を受け取り、臨床研修修了証の写し、医師免許証の写しを添えて、地方厚生局に提出する。この2回目の医籍登録手続きをすると、やがて、A4縦の用紙に横書きの「臨床研修終了登録証」が送られてくる。これがないと診療に従事出来ないし、病院・診療所の管理者にはなれないことになった。

研修病院については、自分で選ぶ事が出来る為、多



くの医師が従来のように出身大学への入局をしないで、設備が整い、症例やスタッフにも恵まれた、人気のある東京医歯大、東大、京大等の大学病院や、日赤医療センター、東京医療センター、聖路加等に代表される都市部の有名病院での研修を望み、これらの病院に集中するようになった。医療機関の方でも大学の医局に頼らず医師を獲得することが出来た。

平成2年(1990)頃から始まった有料職業紹介の規制緩和の影響で、医師と医療機関の間を取り持つ斡旋会社が増加し、義務である2年間の臨床研修を終えた医師のうち、専門医になる後期臨床研修を受けずに、フリーター医師と呼ばれるフリーランス医になる人が増えて来た。昔から、勤務医と開業医の2種類とされていた臨床医が、最近ではフリーランス医を加えた3種類があると言われるほどに増加してきた。

この新しい臨床研修制度になってからは、大学での研修医が減った為に、多くの大学で人手不足と支配力の低下を招き、大学の人手不足の為に、関連病院からの医師の引き揚げが起り、派遣が難しくなって、関連病院に残った医師の過酷な勤務が問題となった。これは特に小児科、産婦人科、外科等に顕著に見られ、これ等の科に進む医師が減少した為の診療閉鎖や、中堅病院の統廃合が各地で進むことになった。又、2年間の臨床研修の義務化の為に、基礎医学教室への入局者が減少し、フリーランス医が増加する等、医療崩壊とも言われる状態を招いたと言われている。

平成30年(2018)年4月から始まった新専門医制度によって、これまで初期研修医と後期研修医と呼んでいた研修医のことを、研修医と専攻医と呼ぶことになった。

## 我が国の専門医制度の変遷

### 専門医とプロフェッショナルオートノミー

医師は専門職であり、診療科の標榜は自由に出来るが、専門医と国に認定されなければ、専門医を標榜することは出来ない。しかし何をもって専門医と称するかについては、長い間国としての見解が示されていなかった。専門医制度の構築はプロフェッショナルオートノミー(専門家である医師が、他からの拘束を受けず、自主的に行うもの)として、国は行政介入を控えていた為であった。

我が国で専門医制度が始まったのは昭和37年(1962)で、その歴史は昭和43年(1968)に始まった研修医制度よりも古く、略60年になる。

昭和40年(1965)代以降に、様々な学会が、各々の基準により、学会認定の専門医を輩出するようになって

たが、多くは、加盟している各学会で、3~5年以上の学会独自の専門医研修を受け、資格審査ならびに専門医試験に合格した者を、各学会が専門医と認定したものであった。この学会認定の専門医は、あくまでも認定医であり、専門医と称することも広告することも出来ず、学会とか医師の自己満足的なものだと評価される面のある制度であった。やがて、医師や医療機関に高度な専門性が求められる時代になって来ると、受診に際して、医師の専門分野を知りたいという声が、政府には届いていた。

平成14年(2002)には国の定めた外形基準を満たす学会は、「専門医」と認定することが出来、認定されれば専門医と称し、広告も出来ることになった。この年にスタートした日本専門医認定機構(認定機構)では、「5年以上の専門研修を受け、資格審査ならびに専門医試験に合格して、学会等によって認定された医師」を専門医とするとしており、レベルの高さを求めていた。平成の終り近くになって、政府の意向を汲んだ専門医制度の大枠が固まってから出来た、平成26年発足の日本専門医機構が認定する専門医は、前年の厚労省発表の報告書に倣って、「それぞれの診療領域における適切な教育を受けて十分な知識・経験を持ち、患者から信頼される標準的な医療を提供出来ると共に、先端的な医療を理解し情報を提供出来る医師」を意味するものとなった。つまり、レベルの高さではなく、地域医療への影響を配慮する国の方針に沿ったものであった。大学や学会の考える質の高い、高度な専門性を身に付けた専門医と、地域医療を重視する立場である医師会や地方自治体の考える、地方に居る医師でも取りやすい、幅広い知識を持つ専門医との微妙な違いは、専門医制度構築を考える際の全般的な差として、政府の立場がはっきりする平成25年(2013)迄は続くことになった。いろいろな学会の専門医制度が始まって以来、学会間の格差を均し、国としての専門医制度が日本専門医機構を中心にして動き始めたのは、やっと平成30年(2018)になってからであった。専門医制度の構築は、難しい複雑な問題を抱えていても、政治的介入が始まると、急速に改革が進むことが示された例とも言える。

### 標榜の出来ない学会認定の認定医 学認協発足

昭和35年(1960)に医療法の改正により、麻酔科標榜医制度が出来、麻酔科標榜医に規定された資格基準に対応する教育を行う為、昭和37年(1962)、日本麻酔科学会が麻酔指導医制度を発足させた。医師免許があれば、自由に専門を標榜することが出来るという自

由標榜制度があるにも拘らず、呼吸管理や循環器管理、疼痛管理等を無意識下の患者に行うという、専門性の高い知識や技術を要する麻酔科の標榜については、既定の研修後、厚生省の認可を受け、初めて標榜出来ることになった。麻酔科標榜医には資格更新制度が無いことは、その後生まれた専門医制度とは異なるが、この麻酔科標榜医を育てる麻酔科指導医制度が、学会専門医制度の始まりとされている。

昭和41年（1966）には医学放射線学会、皮膚科学会、脳神経外科学会、昭和43年（1968）に内科学会、昭和45年（1970）に神経学会、昭和51年（1976）温泉気候物理医学会、昭和53年（1978）病理学会、形成外科学会、昭和54年（1979）臨床病理学会、外科学会、小児外科学会、昭和55年（1980）日本リハビリテーション医学会、消化器内視鏡学会、昭和58年（1983）整形外科学会、昭和60年（1985）小児科学会、昭和61年（1986）泌尿器科学会、昭和62年（1987）産婦人科学会、平成元年（1989）眼科学会、日本東洋医学会のように次々と学会単位で専門医認定制度が出来た。基幹学会の中での最後は平成17年（2005）の精神神経学会とされている。それぞれの学会が独自に制度設計をしたが、多くは加盟している各学会で5年以上の専門研修を受け、資格審査ならびに専門医試験に合格して、認定された医師を専門医としたもので、5年毎に更新する制度になっていたが、麻酔科のような臨床能力からみた専門医認定制度ではなく、呼称も統一されたものではなく、国としての統一した専門医制度でもなかった。ただ、学会にとっては、認定費用、更新費用が定期的に入る大きな財源となった制度であったろうと思う。

昭和55年（1980）9月、学会認定専門医制度のある22学会に、中尾喜久日本内科学会理事長と日野原重明内科専門医制審議会長が連名で呼びかけ、昭和56年（1981）11月に学会認定医制協議会（学認協）が発足した。本協議会は各学会がもつ認定専門医の学会間格差を無くし、全てが一定水準にあることを保証することによって、この制度が社会的認知を受けることを意図したものであった。以後この学認協が、何度かの変遷を経て現在の日本専門医機構となったが、その間一貫して我が国の専門医制度構築の中心的役割を演ずることになった。

昭和59年（1984）には、日本医学会加盟を学認協会員の条件とすることによって、特殊な狭い範囲の専門医を排除して、臨床的に幅広い領域の認定（専門）医制度に重点をおいて活動することが申し合わされた。

### 三者承認制 学認協から専認協 外形基準と標榜出来る学会認定の専門医

昭和61年（1986）、学認協（27学会が加盟）は制度の発展の為に、日本医師会、日本医学会との連携が必要だとして、三者懇談会を発足させ、以後平成14年（2002）迄26回の会合を開いた。

平成5年（1993）の第15回三者懇談会で、各学会の認定医の承認に関する基本的合意に基づき、平成6年（1994）4月から各学会の発行する認定証には、学会の認定を承認する日本医師会、日本医学会、認定医制協議会三者の丸い承認シールが貼られることになった。

平成9年（1997）、厚生省と政府与党である自民党から「21世紀の医療の改革の提案」が発表され、国民への医療情報提供として、かかりつけ医の専門分野を表示する為には、学会専門医の認定基準を統一し、明確化すべきだと、公的立場から初めて制度の調整と整備が求められた。

以来、全体の整備を同一土俵で協議するのではなく、基本的領域診療科の学会群にSubspecialtyの学会群を上積み研修する方式の協議と、第三者的な評価機構の必要性についての論議が始まった。

その後平成11年（1999）第17期日本学術会議の専門医制度検討小委員会から、国家的規模での専門医資格認定機構ともいべき第三者的機関の設置が提言され、平成13年（2001）には学認協は、日本医学会加盟50学会が会員の専門医認定制協議会（専認協）と改組し、専認協、日本医師会、日本医学会三者承認の専門医制度誕生の流れになってきた。

しかし、平成14年（2002）4月1日付で、広告規制が緩和され、①法人格を有する ②千人以上の会員数があり、8割以上が医師である ③一定の活動実績を有し、公表している ④問い合わせに対応が可能な体制である ⑤専門医の取得条件を公表している ⑥5年以上の研修を受講する ⑦資格認定に際し試験を実施する ⑧更新制である ⑨名簿が公表されている 等の、厚生労働大臣の定める、これらの外形基準を満たす学会は、「専門医」を認定することが出来、専門医資格は広告出来ることになった。

従来民間団体である学会が認めた認定医と呼ぶ専門医ではなく、外形基準を満たす各学会が認定することで、国の認める、広告も標榜も出来る専門医が初め



て誕生するに至った。その為、専認協、日本医師会、日本医学会の三者承認は不要となり、平成14年（2002）10月1日付けの承認を最後に三者承認は中止となった。学会が専門医であると認定することを承認するシール添付も終了し、認定証も「・・・学会認定医であることを認定します」から「・・・科専門医であることを認定します」となった。こうして数多くの学会が法人格を取り、専門医制度を立ち上げて、纏まりも、制約もない、大きな数の専門医制度が出来ることになった。

**認定制機構 日本専門医制審議会 総合科（総合診療科）創設案**

平成14年（2002）12月24日 専認協は専門医認定制度を持つ日本医学会加盟52団体を総括する機関として、有限責任中間法人日本専門医認定制機構（認定制機構）と組織変えた。厚労省の外形基準ではその質は問われていない為、これまで通り、各学会の制度の評価や審査をすることによって、質の担保を図る作業を行うことになった。この認定制機構では、5年以上の専門研修を受け、資格審査ならびに専門医試験に合格して、学会等によって認定された医師を専門医と定義して、質の高さを求めたものであった。

平成16年（2004）4月に、必修義務化された新医師臨床研修（初期臨床研修）制度（スーパーローテート）がスタートした。

平成18年（2006）第三者的視点で認定制機構を評価することを目的として、日本医学会、日本医師会、認定制機構および学識経験者からなる「日本専門医制審議会」が発足し、より国民に理解を得やすい専門医制度確立のため、数回にわたる審議が行われた。

S56 (1981)	学会認定医制協議会（学認協）発足。認定専門医の学会間格差を無くす目的。中尾喜久、日野原重明の呼びかけ。
S61 (1986)	学認協（27学会が加盟）は制度の発展の為、日本医師会、日本医学会との連携。H6から三者承認のシール添付。
H13 (2001)	学認協は、日本医学会加盟50学会が会員の専門医認定制協議会（専認協）と改組。三者承認の専門医制度成立？
H14 (2002)	広告規制緩和。外形基準を満たす学会は「専門医」認定が可、専門医資格は広告可。質は問わず。三者承認のシール添付中止。専認協は、日本専門医認定制機構（認定制機構）と組織変えて、質の担保を図る。認定制機構は、5年以上の専門研修を受け、資格審査ならびに専門医試験に合格して、学会等によって認定された医師を専門医と定義。
H16 (2004)	必修義務化された新医師臨床研修（初期臨床研修）制度（スーパーローテート）がスタート。
H18 (2006)	認定制機構を評価する日本専門医制審議会発足。国民に理解を得やすい専門医制度確立を目指し審議。
H19 (2007)	厚労省総合科創設案。医療法上の診療科名に。以後、全国的に大学を中心に総合診療科誕生。岡大にはH24誕生。

平成19年（2007）5月、地方からの要望に応じて、総合科の創設案が厚労省から出た。社会の高齢化が進み、一人でいくつかの疾患を抱える高齢者を、地域で効率よく診察することが出来る体制と共に、日常遭遇する疾患や傷害の治療・予防、保健・福祉等幅広い問題について適切な初期対応ができる医師の存在が地域では望まれている。幅広い領域について総合的かつ高度な診断能力を有する診療科を「総合科」として医療法上診療科名に位置付け、国の個別審査によって 標榜医資格を与えるというものであった。他の専門医が属する学会の下で、各領域の深さを特徴とするのに対して、総合診療の専門医は、定まった所属学会が無く、扱う問題の広さと多様性を特徴とする。日本内科学会、日本小児科学会、日本外科学会、日本整形外科学会、日本救急医学会、日本プライマリ・ケア連合学会等の学会との連携の他に、日本医師会や地方自治体との連携が欠かせない。

佐賀大学には、昭和61年（1986）国立大学として、我が国で初めて総合診療部門が設置されている（初代

年次	我が国の専門医制度の変遷に関わる出来事、内容、問題点 その1
S37 (1962)	麻酔指導医制度発足。麻酔科標榜医を育てる麻酔科指導医制度が、学会専門医制度の始まり。標榜可。更新制度なし。
S41 (1966) H17 (2005)	医学放射線学会、皮膚科学会、脳神経外科学会等、学会単位で独自の認定医である専門医認定制度が次々に生まれ、最後はH17精神神経学会。多くは5年毎に更新。標榜不可。学会と医師の自己満足との評価。学会の大きな財源。
S43 (1968)	卒後2年間の医師として大学での初期臨床研修開始、努力義務。その後多くは学会認定の専門医を目指す。

教授福井次矢)が、平成19年(2007)の厚労省の総合科の創設案を契機として、大学を中心に、総合科の診療や研究が全国的に行われようになった。岡山大学では、平成24年(2012)4月より「全人的医療の出来る総合内科医の育成と大学院教育の両立」を目標に、慢性疾患の「かかりつけ医」、急性疾患の「初期対応医」、高度先進病院で「専門科と連携できる総合内科医」、内科の「教育指導医」、臨床医学として内科を総合的に捉える「研究者」等の役割を担う総合内科 (Department of General Medicine) がスタートした。

**日本専門医制評価・認定機構 専門医制度整備指針  
学会単位から診療領域単位の制度へ**

平成20年(2008)に、日本の医学・医療に携わる全ての組織が参加することで、認定制機構を「社団法人日本専門医制評価・認定機構」と改称し、専門医制度のあるべき姿として、専門医制度整備指針を策定し、それに基づき、加盟する学会の専門医制度の標準化と認定の作業を行うことになった。専門医制度は個別の学会単位ではなく診療領域単位の制度として、基本領域と Subspecialty の 2 階建て制とし、臨床医として専門医の道を志す医師は、初期臨床研修を終えた後、基本領域のいずれかの専門医育成過程に進み、その認定を受けた後に、希望により更に専門的な

Subspecialty 領域の研修過程に進むものになった。

平成23年(2011)10月、厚労省において、池田康夫日本専門医制評価・認定機構理事長始め、高久史磨自治医科大学長、福井次矢聖路加国際病院長、門田守人がん研究会有明病院副院長、金澤一郎国際医療福祉大学大学院長、山口徹虎の門病院長等17名の参加の下に、医師の質の一層の向上と医師の偏在是正を図ることを目的に、専門医の在り方に関する検討会が、平成25年(2013)3月迄に17回開かれた。医師のレベルアップを狙えば、若い医師は症例の多い都会に集まり、偏在是正にならないこと、地方では総合的な診療能力を持つ医師を求めていること、医師の質追求より患者目線での専門医を育てる制度が大切である等の意見が出た。大学や学会中心に医師のレベルアップを考える機構側と、地域医療の崩壊を恐れる医師会や自治体側、両者のやり取りをプロフェッショナルオートノミーを守る立場で見守る厚労省の関係は、平成28年(2016)、国の介入、厚労大臣の談話後に、実施の1年延期の形で機構側が押し切られるまで続くことになった。

厚労省は、平成25年(2013)3月迄の17回に及ぶ検討会について、4月22日に、「専門医の在り方に関する検討会 報告書」として公表した。そして、専門医を「それぞれの診療領域における適切な教育を受けて十分な知識・経験を持ち、患者から信頼される標準的な医療を提供できる医師」とし、「専門医制度を持つ学会が乱立して、制度の統一性、専門医の質の担保に懸念を生じ、患者の受診にとっても必ずしも有用な制度といえず、質が担保された専門医を中立的な第三者機関で認定する新たな仕組みが必要で、第三者機関は、専門医の認定・更新基準や養成プログラム・研修施設の基準の作成を行い、基本的な診療領域を専門医制度の基本領域として、この基本領域の専門医を取得した上でサブスペシャリティ領域の専門医を取得するような二段階制の仕組みを基本とすべきである。高齢化に伴い、多様な問題を抱える患者が増えて、総合的な診療能力をもつ医師の存在が求められる為に、「総合診療専門医」を基本領域の専門医の一つとして加える。「総合診療医」は、日常的に頻度が高く、幅広い領域の疾病と傷害等について、我が国の医療提供体制の中で、適切な初期対応と必要に応じた継続医療を全人的に提供するものとし、「総合診療専門医」には、他の領域別専門医や他職種と連携して、多様な医療サービスを包括的かつ柔軟に提供することを期待する。専門医の養成は、第三者機関に認定された養成プログラムに基づき、大学病院等の基幹病院と地域の協力病院等(診療所を含む)が病院群を構成して実施する。」とし



た。そして、医師は基本領域のいずれか1つの専門医を取得することが基本だが、複数領域の認定・更新基準を満たすのであれば、複数領域の取得を許容することとした。

### 日本専門医機構 厚労省社会保障審議会医療部会での検討と医師会等の要望書、厚労大臣談話

平成26年(2014)5月、この厚労省の報告書を受け、その内容実現に向けて、池田康夫日本専門医制評価・認定機構理事長が初代理事長となり、日本医師会、日本医学会、全国医学部長病院長会議の3者を社員にして、中立的な第三者機関である一般社団法人日本専門医機構が発足した。6月には民間病院を中心にした病院団体協議会である四病院団体協議会(日本医療法人協会、日本精神科病院協会、日本病院会、全日本病院協会)、日本がん治療認定医機構、19の基本領域の専門制度委員会の代表等が加わった。

平成29年(2017)度からの専門医養成開始を目指し、日本専門医機構では準備を進めていたが、各学会単位の診療領域の認定・更新に関する準備に比して、担当する学会がはっきりしない総合診療専門医養成の準備が遅れ、医師の偏在是正を図るという目的達成の見通しが立たぬまま、今後ますます必要性が高まると見込まれる総合診療専門医を目指す医師が不足し、症例の多い都会地での研修を望む専攻医が増えて、地域医療はますます崩壊することを懸念する意見と共に、平成29年(2017)4月からの開始は延期すべきとの意見が、厚労省社会保障審議会「医療部会」でも出るようになった。平成28年(2016)3月25日厚労省は、永井良三(自治医科大学長)部会長からの提案により、社会保障審議会医療部会に「医療提供体制における専門医養成の在り方に関する専門委員会」(永井良三委員長)を立ち上げ、日本専門医機構が認定する専門研修プログラムの評価、地域医療への影響、地域の医療提供体制の確保と適正な専門医の養成体制等を検討することになった。厚労省設置法に規定された社会保障審議会における検討となったことで、これまでプロフェッショナルオートノミーを守って来た専門医制度の構築に対して、国の介入が始まったこととなったが、以後急速に専門医制度構築が進むことになった。研修プログラム制は、大学等の基幹施設が中心となり、関連施設を束ねて、研修施設群を構成するやり方なので、そこに専攻医が集まり、地域には若い医師がいなくなり、地域医療には打撃となると危惧する意見は以前から根強くあった。一番大切な高齢者医療を支えているのは、地域の中小病院で、地域医療を支える為には、地域の

協議会の力が必要だが、41の関連病院のある北海道は単一の自治体であるのに対して、同じ41の関連病院がある岡山では、県内に11、県外に30ある為に、独立して各県が協議会で検討しても、大学でなければ、調整出来ないだろう。そもそも大学や大病院が育てる専門医制度なのか、地域が育てる専門医制度なのか等、委員である医師達の機構に対する不満の声が多かった。

6月までに機構の理事長等数名を参考人として説明を聞き、質問をする専門委員会を3度にわたって開き、開始を1年延期するべきとの意見が大方を占めた。しかしその後も機構は平成29年(2017)4月から開始の前提を変えなかった。

遂に、平成28年(2016)6月7日、日本医師会と四病院団体協議会は合同で、日本専門医機構及び基本領域を担う学会に対して、地域医療を崩壊させることのないよう、一度立ち止まって、検討の場を設け、地域医療を担う医療関係者や医療を受ける患者の意見が十分に反映されるよう、日本専門医機構のガバナンスや運営について抜本的に見直すよう要望書を提出した。これに対して、その日のうちに、要望書の内容は理解出来るとして、「新たな専門医の仕組みの構築に当たっては、全国どこにあっても患者、国民が質の高い医療を受けられるようにするという制度本来の目的のため、医療関係者、日本専門医機構及び各学会が互いの立場を超えて協力し合い、プロフェッショナルオートノミーの理念の下、地域医療の担い手、地方自治体はもとより、患者や国民の声をしっかり踏まえながら、同時に研修医を含む医師の不安も払拭しつつ、我が国の将来の医療を担う患者、国民のニーズに応えることが出来る医師の養成に貢献されることを求めます。」と、異例の塩崎恭久厚労大臣の談話が発表された。

### 日本専門医機構の改革と専門医制度新整備指針 大臣談話と国の方針 卒前・卒後の医師養成の在り方

これを直接のきっかけに、事態は急速に動き、日本専門医機構は6月27日、機構自体のガバナンスの不備の指摘に対応して、機構を中心に動かしていた理事を一新し、新理事には、学会、日本医師会、四病院団体協議会、全国医学部長病院長会議の選出者の他に、9人の学識経験者として経済学者や一般住民、患者代表が加わり、オールジャパンの体制とした。7月20日の理事会後、吉村博邦新理事長は開始の1年延期を発表した。以後12月16日まで議論の後、専門医制度新整備指針が作成された。2月17日に新整備指針の運用細則、補足説明を議論した後、平成29年(2017)4月、日本専門医機構、全国知事会や全国市長会、病院団体

等地域医療関係者の他、文科省森医学教育課長と佐々木企画官が加わって、来年度の開始を目指している地域医療に求められる新たな専門医制度がどうあるべきか、という厚労省管轄の問題だけでなく、卒前・卒後の一貫した医師養成の在り方に関しての意見交換の場として、厚労省医事課を事務局にして、「今後の医師養成の在り方と地域医療に関する検討会」が設置され、平成30年3月27日までの1年間に、7回にわたって検討された。

その間、平成29年（2017）8月2日、塩崎厚労大臣に吉村機構理事長が機構の取り組みを報告し、同日大臣談話が発表された。「日本専門医機構においては、新たな制度の施行により地域医療に影響を与えないような配慮がなされていると理解した上で、厚生労働省においては、新たな専門医制度が地域医療に影響を与えていないかどうか、領域ごとに確認をするために、日本専門医機構及び各関係学会に対し、学会ごとの応募状況及び専攻医の配属状況を厚生労働省に報告することを求め、万が一、新たな専門医制度によって地域医療に影響を与える懸念が生じた場合には、「国民に対し良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制」を確保する医療法上の国の責務に基づき、厚生労働省からも日本専門医機構及び各関係学会に対して実効性ある対応を求めることとする。」という、「医療法上の国の責務」として地域医療を守る国の方針がはっきりと示された内容であり、翌年4月からのスタートに備えて準備中の機構と各学会にとっては、これまでになく厳しく感じられるものであった。

年次	我が国の専門医制度の変遷に関わる出来事、内容、問題点 その2
H20 (2008)	認定制機構を、日本専門医制評価・認定機構と改称。専門医制度整備指針を策定。個別の学会単位ではなく診療領域単位の制度として、初期臨床研修を終えた後、専門医は基本領域の認定後にSubspecialty研修に進む2階建てに。
H23 (2011)	厚労省で17回専門医の在り方に関する検討会開催。H25報告書公表。専門医を「それぞれの診療領域における適切な教育を受けて
H25 (2013)	十分な知識・経験を持ち、患者から信頼される標準的な医療を提供できる医師」と定義。
	中立的な第三者機関である日本専門医機構（理事長池田康夫）が発足。専門医を「そ

H26 (2014)	それぞれの診療領域における適切な教育を受けて十分な知識・経験を持ち、患者から信頼される標準的な医療を提供出来ると共に、先端的な医療を理解し情報を提供出来る医師」とする。大学、学会中心の為、担当する学会の無い総合診療専門医養成の準備遅れ。そのまま、地域医療崩壊を危惧する声に拘わらず、平成29年（2017）度からの専門医養成開始を目指す方針を変えず。
H28 (2016)	社会保障審議会医療部会に「医療提供体制における専門医養成の在り方に関する専門委員会」の設置により、プロフェッショナルオートノミー崩れる。育てるのは大学か、地域かの論争。日本医師会と四病院団体協議会合同の機構への要望書提出。厚労大臣談話。日本専門医機構理事一新。専門医養成開始1年延期。専門医制度新整備指針作成。
H29 (2017)	今後の医師養成の在り方と地域医療に関する検討会。厚労大臣談話で、国民に対し良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制を確保する「医療法上の国の責務」により、必要な対応を求めると、地域医療を守る国の方針を示す。
H30 (2018)	Subspecialty領域未定のまま、基本19診療科の第1期専攻医の新専門医制度による研修開始。地域間の医師偏在の解消と、地域の医療提供体制を確保する目的で、「医療法及び医師法の一部を改正する法律」が7月に公布。
R3 (2021)	第1期専攻医の研修終了。受験後、59年の専門医制度構築の歴史の中で、初の「日本専門医機構認定専門医」誕生見込み。更にその内の希望者には初の、より専門的なSubspecialty領域の研修が始まる記録すべき年。

「今後の医師養成の在り方と地域医療に関する検討会」に於ける7回の検討内容等を踏まえた上で、日本専門医機構は、医学教育に関わるものは学会が担当し、専門医の認定や学界のサポートや地域に必要な数の算定等を機構が担うという役割分担を決めた。又、応募する8000人の専攻医に対して、募集が1万8000人にもなるので、大都市の病院への集中と臨床科による偏在が懸念される為、東京、神奈川、愛知、大阪、福岡の5都府県では昨年実績の1.2倍に定員数の上限を定め

るとか、基幹施設の基準を緩めるとか、専門研修指導医がいれば、規模の小さな連携施設でも専攻医を採用出来るようにするとか、学会の判断で従来の研修カリキュラム制による研修を認めるとか、留学、出産、育児、病気等による中断を認めるとか、新制度導入に際して、機構、学会、都道府県協議会の協議が必要とする等、専門医になり易く、地域医療も確保し易い対策を打ち出した。更に、基本領域専門医の複数取得（ダブルボード）は妨げないとか、ダブルボードの際は資格取得に必要な経験症例等の重複例は、相互で症例数として換算出来る等の方針が示された。

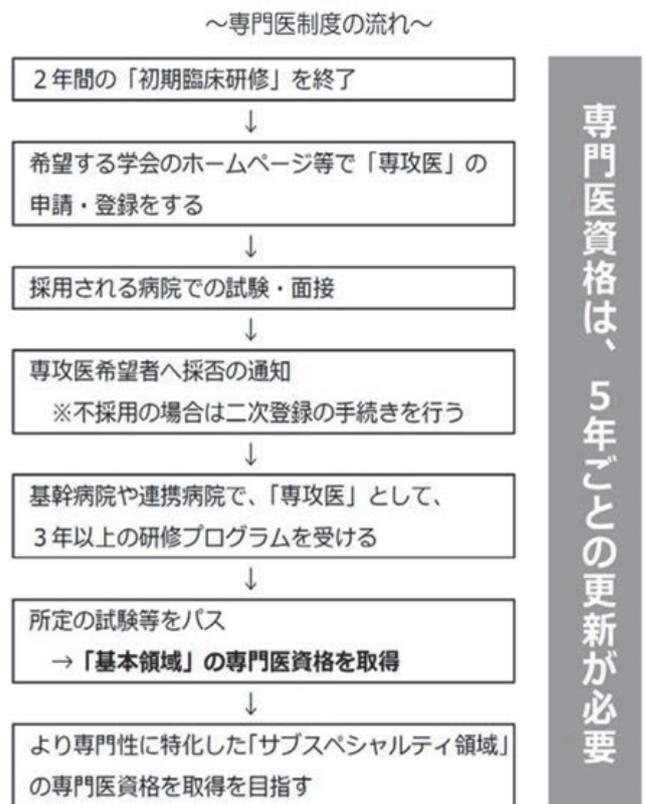
文科省医学教育課長と企画官参加の、卒前・卒後の一貫した医師養成の在り方についての意見交換の場では、医師国試を抜本的に見直し、国試へのOSCE (Objective Structured Clinical Examination) の導入の是非について今後議論するという文科省側の話の他に、CBT (Computer-Based Testing) とOSCEは国試並みの高レベルなので、これを国試に準じたものと認め、看護師の医療行為が保助看法に認められているように、大学病院では医師の管理・監督・指示の下での学生医の医行為を法的に認めるべきではないか。大学を卒業して、国試合格と同時に総合診療が出来るような医学教育をすべきではないか。国外の医学部の卒業生が、我が国の国試受験の為に予備試験を年に100人ほど受ける迄に増加している状態なので、日本医学教育評価機構 (JACME Japan Accreditation Council for Medical Education) の水準の医学部卒を予備試験受験資格とするという方向性の検討が必要ではないか、等が話された。

学生時代の臨床教育、診療参加型臨床実習から初期臨床研修を経て、基本診療科の専門医、Subspecialty領域の専門医に至るまで、シームレスに臨床力獲得が実現する日が近づいているようである。

**新専門医制度の開始**

平成30年 (2018) 4月1日Subspecialty領域のはっきり決まらぬままに、新専門医制度によって、基本19診療科、3,063プログラム、8,410人の第1期専攻医の

研修が始まった。彼らはまず希望する学会のホームページから専攻医登録を行い、希望の病院の研修プログラムを登録する。各プログラムで規定された選考基準に従って、試験や面接による選考が行われるが、各プログラムには定員がある為、一次登録で不合格の場合は、二次登録を行うことになる。



7月30日「医療法及び医師法の一部を改正する法律」が公布され、「医学医術に関する学術団体その他の厚生労働省令で定める団体は、医師の研修に関する計画を定め、または変更しようとするときは、あらかじめ、厚生労働大臣の意見を聴かなければならない」等の規定が追加された。

平成31年 (2019) 4月1日新専門医制度第2期の専攻医8,615人が研修を開始した。

令和元年 (2019) 5月18日京都の日本プライマリ・ケア連合学会学術大会において、総合診療専門



2020年度～(7科目必修)(案) ※外科, 小児科, 産婦人科, 精神科, 地域医療は8週以上が望ましい

1年目		2年目				
内科 24週	救急 12週 (4週まで 麻酔科可)	外科 4週	小児科 4週	産婦人科 4週	精神科 4週	地域医療 4週
						選択科目 48週

※一般外来4週以上を含む(8週以上が望ましい)

医のサブスペシャリティ専門医として、学会認定の「新・家庭医療専門医」を養成し、世界家庭医機構(世界一般医・家庭医学会 WONCA the World Organization of National Colleges, Academies and Academic Associations of General Practitioners/Family Physiciansの通称として、世界家庭医機構 World Organization of Family Doctorsが用いられる。)等が設定する国際認証を受けることを目指す方針が発表された。その後、令和2年(2020)4月27日に、世界で初めて正式に、同学会の家庭医療専門医研修制度が、WONCAの国際認証を取得したと発表された。総合診療専門医のサブスペシャリティとして、今後「病院総合診療専門医」、「他のサブスペシャリティ専門医(在宅・緩和医療など)」等も検討しているようで、まだまだ専門医制度は流動的のようだ。

令和元年(2019)12月、日本専門医機構は制度の骨格となる基本理念に、「医師の地域偏在等を助長することがないように、地域医療に十分配慮する」ことを盛り込んだ専門医制度新整備指針を発表し、今後は指針に沿って基本領域で「運用細則」や「整備基準」を定め、これに則って、4-5月頃に研修プログラムを策定し、6月頃に専攻医の募集を開始することになった。各領域学会は学術的な観点から責任をもってプログラムを構築し、機構はそのプログラムを検証・調整し、標準化を図る。そして、プロフェッショナルオートノミーに基づいた専門医の質を保証・維持できる制度であり、国民に信頼され、受診にあたり、良い指標となるもの、専門医の資格が国民に広く認知されるもの、医師の地域偏在等を助長することがないように、地域医療に十分配慮する制度であるものとするとした。大学病院以外の医療施設も、研修施設群の基幹施設となれる基準を設ける。機構は、各領域の研修プログラムを承認するに際して、行政、医師会、大学、病院団体からなる各都道府県協議会と事前に協議することにより、医師の都市部への偏在助長を回避するよう努める。基本領域学会専門医の研修では、原則として「研修プログラム制」による研修を行い、サブスペシャリティ学会専門医では、研修プログラム制、研修カリキュラム制のいずれも可能とする。等が定められた。

令和2年(2020)4月から9042名の初期臨床研修が始まったが、初期臨床研修の必修が従来の内科、救急、地域医療の3科目に加え、これまで外科、麻酔科、小児科、産婦人科、精神科のうち2科目が選択必修であったが、これらは全て必修となり、初期臨床研修の終了時には、これまでとは違って、臨床力を幅広く共有する医師の誕生が期待されるようになった。又第3期の専攻医9072人が研修を開始した。

毎年医学部卒業生の90%以上に当たる8000~9000人が研修を受け、現在、25,000名以上の専攻医が専門研修中である。

令和3年(2021)4月から8869名の初期臨床研修と、第4期の専攻医の研修が始まる。又、この年は、第1期の専攻医の研修が終了する年なので、我が国の59年に及ぶ長い専門医構築の歴史の中で、初めて誰もが専門医として納得できる専門医が、「日本専門医機構認定専門医」として誕生する年であり、その専門医のうちの希望者には、より専門的な Subspecialty 領域の研修が始まる初めての年になる。(以下次号)



# 随 想

育環境でした。血の通う教育環境をつくる教育行政が必要だと思います。  
2021-2-26

## 医学部厚生補導係 花房豊さん

昭36 難 波 正 義

1955年、新入生は医学部長の前で署名する行事がありました。私達は午前中の入学式を岡山駅の北にある津島キャンパスで終え、午後、署名のために南にある医学部の鹿田キャンパスに移動しました。

当時の医学部長室は、医学部の正門を入り、すぐ東側のレンガ造りの3階建ての建物の2階にあり、医学部長は解剖学の関正次教授でした。

1階から2階に上る幅広い階段は、濃いベージュ色のタイルが敷き詰められ、手摺は大理石で、医学部の歴史を感じさせます。私達は出席簿の順番にその階段に並び、先頭から部長室に入り、関教授の前の机に置かれた署名書に各自の氏名を毛筆で書きます。

私は少し緊張して階段の中ほどで順番を待っていました。そこへ上からとんとんと降りてこられた小柄の初老の男性の事務員から、いきなり、親しげに、「あなたは難波さんでしょう？」と話し掛けられ、びっくりしました。入試の時、提出した顔写真で私を覚えられたのでしょうか。その方が、花房豊さんでした。1957-1961年、厚生補導係事務員として医学部に勤められています。たいへん学生思いの好好爺でした。

在学中、よく声を掛けられました。私は5年生の時、鹿田祭（大学祭）や学年対抗の運動会の準備委員長をやらされ忙しい秋でした。その時は花房さんから「成績が落ちていますよ」と発破です。

ある時、花房さんから、「2年上の学年は出席も良く成績も良い、1年上は出席は良いが成績がどうも、難波さんのクラスは出席も悪いが成績も悪い」と、笑われたことがあります。少しチクチクしました。

医師国家試験の発表があり、心配していた友達が合格していましたので、嬉しくなり、花房さんのところに寄って、「でも、国家試験の合格率は100%でしょう」と自慢しましたところ、「それが」と。自慢の鼻をへし折られました。残念ながら不合格者がいたのです。

入学から卒業まで、同じ事務員の方が職を移動することなく、いろいろ目を掛けてくれたことを懐かしく思い出します。温かみのある人間的な関係が深まる教



## 学生だより

### 解剖実習を終えて

医学科3年 浅越 康介

まず、この度の解剖実習を行うにあたり、献体に応じてくださった故人とその御遺族の方々、そして指導してくださった先生方に感謝の意を述べさせていただきたいと思います。皆様の御助力により解剖実習という貴重な体験をさせていただき、人体の構造を自分の目で見て理解を深めることができ、医師への道を一歩進むことができたように感じます。

今回の実習を振り返ると、人体の精巧さ、複雑さに驚かされる日々でした。解剖実習が始まるまでは私の人体の構造への理解は教科書に書いてある内容や図の範疇に過ぎないものでした。そのため、実際に自分で人体にメスを入れてその構造を目の当たりにし、人の命はかくも複雑かつ繊細な構造の関わり合いの上で成り立っているのだと思うと、生命の尊さを考えさせられました。このように本の中の知識が自分のなかで昇華された瞬間は非常に印象に残っています。この気持ちは生涯忘れない大切なものになると思います。

私は将来外科医を目指したいと思って医学科に進学し、解剖実習には実習前から非常に興味をもっていました。実際、実習中は熱心に取り組み、実習の時間外に実習室に赴いて学ぶこともできました。それほど、この実習で得られるものは大きかったように感じます。しかし、実習を通して医師になることの難しさも痛感しました。医師になるということは、解剖の知識を網羅した上で、さらに病態の理解や手技、患者さんとのコミュニケーションといった様々な要素が要求されるのだと思います。そのように考えると自分にはまだまだ足りないものが多くあります。自分は二年生で医師を目指す者としてはまだ駆け出しで、このような「医師としての素養」を獲得することは難しいことだと思いますが、残りの学生生活を通してより自分を高め、良い医師になれるよう努力していきたいと思えます。

最後に改めて、献体に応じてくださった故人とその御遺族の方々に感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

### 解剖実習を終えて

医学科3年 古山 怜奈

解剖実習はとても重要な実習でした。皮膚の厚さから、血管神経の走行、結合組織や膜のつながり方や厚さなど、実際に人の身体で学ぶ以外には知ることができないことがたくさんありました。これまでに繰り返し学習していた臓器についても、教科書や模型から私が頭の中に抱いていたイメージと、実物との間には大きな隔りがあるということにも驚きました。解剖実習で本物の人体を学ぶことができるというのは本当に重要でそしてとても貴重な学習でありました。

また、それを自分の手で学ばせてもらえたということに大変深い意味を感じています。自ら深層へと手を進めることで関節の繊細な構造や血管神経の複雑な分布、運動に伴う筋肉の動き、脂肪組織の付き方など理解することができたと思います。前期と後期を合わせて考えると2人でおひとりのご献体を解剖させてもらったことにはなりますが、他大学の話を聞くととても恵まれた実習であると感じました。人の身体のほぼすべての器官を自らの手でくまなく学習することができたのは本当に貴重な学習でありました。このような恵まれた機会を与えてくださった方々に深く感謝しています。

医師を志した日、そして医学部に入学した日から人体に関することには特に熱を入れて勉強してまいりましたが、解剖実習を終えた今振り返ってみると、これまでの勉強は人の体についてどこかまだ見ぬ先のもののように感じていたと思います。ですが解剖実習を経て、今まで学んできた知識が現実の人の身体と結び付けられて理解され、また己の無知さ、医学の果てしなさを知りました。

ただ貢献という言葉では到底言い表せないほどの尊い意志をもち献体を決意してくださった方々、そしてその思いを承諾してくださったご家族の方々にも心より感謝申し上げます。そして未来の医療を思い日々活動なさっているとしび会の方々へもお礼申し上げます。献体された方々の意を背負い、これまで以上に勉学に励み、将来医師として社会に貢献することをお約束いたします。

している。

## 系統解剖学実習を終えて

医学科3年 孫 崎 恵 美

約三か月にわたる解剖実習を振り返ると、医学的な専門知識と同時に道徳観、倫理観を学ぶことができたと感じている。

まず実際にご献体を解剖してみると、図説とは見える景色がほとんどの場合異なり、図説はあくまで概略図であるということをもぎまぎと実感した。一方で、講義で学んだ複雑な脈管や神経の分岐、臓器の形態を観察すると、生物の緻密さというものを実感し、解説通りのものが実際に目の前にあることに感動を覚えた。教科書やアトラスだけでは補いきれない、構造の妙を自ら解剖することで少しでも理解することのできた充実した時間であったと感じている。

また、ご献体を通し将来医師となること、その責任を改めて自覚することができた。初めてご献体と向き合った時やお顔を見た時、緊張感を覚え、できる限りの努力をし、十分に学び尽くせるよう解剖に取り組まなければ、その遺志や私たちへの期待に応えることはできないと強く感じた。自分なりに努力はしたつもりだが、終わってみると、時間の制限や自分の技術的な不足から十分に学ぶことができたと言えない点もあり、後悔を覚え申し訳なく思っている。この後悔を忘れることなく真剣に学習を続けていくことしか、今回応えきれなかったご献体して下さった方の思いに応える術はないのだとも感じている。

加えて、慰霊祭に参加したことでこの自覚はさらに強くなった。ごく当然のことではあるがご献体して下さった方にはご遺族がおられ、遺志を尊重しまた私たちが信頼し、ご遺体を預けて下さったのだということをも改めて実感した。そしてどれだけの人の協力のもとこれほど充実した実習が行えているのか、その背景にある、いかに多くの方が私たちや医療の発展に期待してくださっているのかを実感を持って知ることができた。

実習を通し、人体解剖学への理解を深めることができただけでなく、私たちが医師になるためにいかに多くの方の協力が必要であるかを知ることができ、その期待や尽力に応えなければならない責任があるということ、そのために今後いかに努力しなければならないのかを考えることができた。専門知識を得るだけでなくこのような気づきを得る機会を与えてくれた実習、その実現に関わって下さったすべての方に心から感謝



## 教室だより

(令和2年9月～令和3年3月)

### 細胞組織学

COVID-19の影響によりオンライン授業、会議が続いています。教育面では、「医学研究インターンシップ」で10月から12月の3か月間、医学科三年次生の上田君、森野君が当分野に配属、研究活動を体験しました。医学科細胞組織学および発生学講義（一年次）、基礎病態演習（三年次）を行いました。細胞組織学実習もバーチャルスライドを用いてオンラインで行い、約1割の希望学生は来学、教員が質疑応答に対応しました。試験は対面（細胞組織学）とMoodle（発生学）で実施しました。10、11月には細胞組織学特別講義として、佐々木順造先生（岡山大学名誉教授）、金井正美先生（東京医科歯科大学教授）、近藤洋一先生（大阪医科大学教授）よりオンライン講義いただきました。1月には発生学特別講義として、井関祥子先生（東京医科歯科大学教授）、中島裕司先生（大阪市立大学器官構築形態学教授）よりオンライン講義いただきました。

研究面では、「*Fgf10*モザイク変異マウスを用いた肺葉形成と二型肺胞上皮細胞の遺伝子濃度依存的消失」について*PLoS One*誌（土生田院生、藤田助教、佐藤助教、板東講師、大内教授）に論文発表し、「メダカの網膜と脳におけるオプシン3/TmtオプシンmRNAの局在」について*J Comp Neurol*誌に論文発表しました（佐藤、大内）。

学会活動としては、第126回日本解剖学会総会・全国学術集会（オンライン開催）にて、「昆虫脚再生におけるToll様受容体とCD36による再生芽細胞の増殖の制御」（板東）、「Crispr/Cas9を用いたゲノム編集による遺伝性網膜変性疾患モデルメダカの作出」（佐藤）、「*Fgf10*モザイク変異体における四肢骨格と肺胞細胞の解析」（土生田）、「副腎髄質におけるUCP1タンパク質発現のUCP1レポーターマウスを用いた検証」について（藤田）発表しました。（佐藤、藤田 記）

### 人体構成学

9月から12月の解剖実習を無事対面で実施することができました。ホルマリン対策用の厳重な換気システムが感染予防に役立ちました。毎日の検温・体調チェック、マスク・手洗い、ロッカールーム使用制限など、例年とは違う状況下でも、学生たちは友人との再会を喜び実習にも意欲的に取り組んでいました。友人や教員と対面で交流する機会の大切さを感じました。今後も対面とオンラインをうまく併用して、教育・研究をより充実させる必要があります。

秋の解剖学会中四国支部集会、献体実務担当者研修会は中止、3月開催予定の日本解剖学会東海・全国学術集会はWeb開催、篤志解剖全国連合会総会は紙面開催になりました。夏解剖は学内者のみで実施、春解剖は全面中止となり、イタリアL'Aquila

大学の医学生恒例の来日も残念ながら見送りとなりました。11月28日、岡山大学解剖体慰霊祭がJホールにて、人数制限を設けて139名が参加する中、厳かに執り行われました（式典後の自由参列者は154名）。

医学科3年生のMRIでは縄田君、友田君に加えてL'Aquila大学での研究参加がキャンセルとなった名和君と杉原君の計4人が教室配属となり、「ドローン×AI」の課題に取り組みました。忘年会、同門新年会も中止で静かな年末年始となりましたが、1月には明るいニュースが届きました。大塚教授が第79回山陽新聞賞（教育功労）を受賞、大杉技術職員が令和2年度医学教育等関係業務功労者として文部科学大臣表彰を受けました。

大塚教授は3月定年退職を迎え、教室は代替わりの年となります。品岡助教は形成外科学分野に異動、大杉技術職員も3月定年退職します。しかし来年度もそれぞれの立場で講義・実習を支援していただける予定であり、残るスタッフとしては心強い限りです。大塚教授の最終講義「私の解剖学」は3月11日に「解剖実習室」で開催予定です。（小阪 記）

### 脳神経機構学

人事関係では、昨年10月からO-NECUSプログラムで当研究室に留学していた、中国ハルビン医科大学のSun Jinが9月に帰国しました。

教育では、10月-12月までの3ヶ月間、医学研究インターンシップ（教室配属）で3年生4名を迎えました。「パーキンソン病モデルマウスにおける杜仲抽出物の神経保護効果」「若齢メタロチオネインノックアウトマウスにおける脳組織学的変化」「孤発性アルツハイマー病における神経・グリア細胞の病態解明」「妊娠・授乳期エポキシ樹脂曝露による新生仔マウスの脳発達異常へのERβの関与」について熱心に研究に取り組みました。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため延期していた神経構造学（神経解剖学）の頭蓋骨および脳肉眼解剖実習を12月に行いました。

研究活動では、9月の第61回日本神経学会学術大会（岡山）で浅沼教授が「パーキンソン病と生体金属、金属結合蛋白」についてシンポジストとして講演し（Web配信）、宮崎が「アストロサイトのセロトニン1A受容体を標的としたドパミン神経保護」について講演しました（Web配信）。また、メタルバイオサイエンス研究会2020（千葉）で、今福院生が「パーキンソン病モデルマウスにおける杜仲抽出物のメタロチオネイン発現誘導および神経保護効果」について、宮崎が「ロテノン誘発ドパミン神経障害におけるアストロサイト-ミクログリア連関」についてリモートにて口頭発表しました。今福院生は12月の第34回創薬・薬理フォーラム（岡山）でも発表しました。1月に第46回岡山脳研究セミナーで、宮崎が「低用量ロテノン慢性皮下投与による新規パーキンソン病モデルの確立」について発表しました。

大学院特別講義では、1月に長野清一先生（大阪大学大学院医学系研究科神経内科学准教授）に「筋萎縮性側索硬化症（ALS）におけるRNA代謝異常」についてオンライン講義して頂き好評を博しました。

浅沼が12月に「パーキンソン病の先行性消化管神経変性における神経グリア連関と脳腸相関の解明」で公益財団法人ヤクルト・バイオサイエンス研究財団2020年度研究助成に採択されました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mnb>) をご覧下さい。(宮崎 記)

## 細胞生理学

同窓会の皆様、こんにちは。細胞生理学です。令和2年9月から令和3年3月の近況をご報告いたします。新型コロナウイルス感染症の第3波が流行していますが、細胞生理はスタッフの檜山講師、吉川助教、藤村助教が大変熱心に研究に取り組み、学生も、とてもよく取り組んでいます。また、秘書小野さん、手作りのケーキやパンを作って下さるので、修士課程学生や学部学生、スタッフも朝食や昼食にそれを頂くことが出来て、明るく楽しい雰囲気です。研究テーマとして、神経科学とがん生物学や免疫学等の融合的な研究を進めています。がんと神経系の連関や、また、免疫アレルギーと神経系との連関についても、興味深い現象を見えています。修士課程大学院生は、2年生(長尾君-博士進学予定、中島さん、石田さん、斉木君)が、実験を連日頑張りと、令和3年1月に修士学位論文を提出、学位論文発表を行い、無事に卒業見込みとなりました。修士課程1年生(浅賀君、小村さん)も、熱心に取り組み、沢山のデータをえました。2月3月から、コロナ流行下で就職活動を始めます。博士課程大学院生は、黄さん(中国)が卒業へ向けて頑張っております。李君(ARTプログラム1年)が日中は病院で研修し、夕方から可能な限り細胞生理で実験しています。臨床教室からの大学院生は、畝田医師(脳外科)が、脳腫瘍の研究をActa Neuropathologica Communicationsに論文発表しました。また、皮膚科から安富医師(メラノーマの研究)と浦上医師(アレルギー皮膚炎の研究)に、呼吸器・乳腺内分泌外科から、大谷医師と朱医師(中国からの大学院生)に、肺がんや乳がんの研究に、ご参加いただいています。大学院生を送って下さり、伊達教授、森実教授、豊岡教授に感謝いたします。教室スタッフ(神谷教授、檜山講師、吉川助教、藤村助教)。(神谷 記)

## システム生理学

当研究室は防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」を継続して行っています。

当研究室の宇宙生物学に関する総説論文がNatureの姉妹誌npj Microgravity誌に掲載され (<https://www.nature.com/articles/s41526-020-00130-8>)、プレスリリースを行いました。このニュースは、総合ニュースサイトのマイナビニュースなどで紹介されました。本研究の論文は、宇宙飛行士の古川聡さんを代表とし、日本の宇宙医学研究のエキスパートを結集した研究プロジェクト「宇宙に生きる」の成果の一部としてまとめられたものです。このプロジェクトは、文部科学省の科学研究費

補助金の助成を受けた新学術領域研究として、2015年から2020年まで行われました。

学会発表に関しては、コロナウイルス感染症の影響によりオンラインでの活動が制限されましたが、以下の学会で参加・発表を行いました。第58回生物物理学会年会(9月:森松、シンポジウム)、第61回日本脈管学会総会(10月:片野坂、シンポジウム)、CBI学会2020年大会(10月:高橋、シンポジウム)、第43回日本分子生物学会(12月:片野坂、シンポジウム)、Biophysical Society Annual meeting(2月:森松)、第98回日本生理学会大会(3月:成瀬、高橋、王夢雪、梁、劉)。

メンバーに関しては、医学研究インターンシップにて医学科3年生の堺莉恵さん、勝二江里奈さん、小花浩樹さん、大久保茉柚さんの4名が当教室にて研究を行いました。また、博士課程にChen Yanzhuを迎えました。(高橋 記)

## 生化学

9月16日、太田助教は第93回日本生化学会大会(9月14日~16日オンライン開催)において、「原子レベル情報を用いる、解糖系とペントースリン酸経路の非酸化的反応によりグルコースからリボース5-リン酸を生成する経路の列挙」と題する講演を行いました。9月17日、竹田助教は第58回日本生物物理学会年会(9月16日~18日オンライン開催)において、シンポジウム「膜のリモデリングと組織化の分子基盤」を開催し、「Dysregulated membrane remodeling in pathogenesis of congenital diseases」と題する講演を行いました。

10月17日、The Mon La博士(令和2年3月大学院博士課程修了、ヤンゴン第一医科大学講師)らの研究成果が論文「Dynamin 1 is important for microtubule organization and stabilization in glomerular podocytes」としてFASEB Journalに掲載されました。この研究成果と臨床応用への可能性について、山田准教授と竹居教授は「タンパク尿を防ぐ!「血液ろ過」細胞のしくみを解明~新規の腎臓病治療の標的タンパクの可能性~」と題して、11月26日、報道発表を大学本部より行いました。11月13日、藤瀬大学院生(博士課程3年)らの研究成果が論文「Mutant BIN 1-Dynamin 2 complexes dysregulate membrane remodeling in the pathogenesis of centronuclear myopathy.」としてThe Journal of Biological Chemistryに掲載されました。藤瀬大学院生は、第46回岡山脳研究セミナー(1月27日)において、「変異型Dynamin 2-BIN1複合体の膜リモデリング異常に起因する先天性ミオパチーの発症機序」と題する講演を行いました。(竹居 記)

## 分子医化学

魅力ある教育研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、本年度1-2月に修士および博士の学位審査があり、井出遼太郎さん(修士)、納所秋二さん、三海晃弘さん(インプラント再生補綴学:博士)がそれぞれ無事修了しました。Post O-NECUS留学生として10月より大連医科大学の

MU, Xindiさんが博士課程に入学しました。MUさんと4月に博士課程に入学していたZHAO, KunさんはCOVID-19のためすぐには入国できていませんでしたが、12月と1月に入国し研究室に参加できました。ベトナム ハイフォン医科薬科大学からの博士課程大学院生（インプラント再生補綴学）Dang Tuan AnhさんとDo Thuy Hangさんも10月より共同研究のため研究に参加されています。助教の枝松緑先生が2月末で退職されました。2015年より、分子医化学の教育研究に大きく貢献いただきました。今後のご活躍を期待しています。

学会活動は、COVID-19の影響を受けて、国際学会は軒並み延期、国内学会も多くはオンライン開催となり、学会関係者のご苦労が多いと思います。11月には西日本医学生学術フォーラム2020がオンライン開催（主幹校：愛媛大学）となりましたが、岡山大学はサテライト会場を鹿田会館（旧生化学棟）講堂に設けて開催、医学科2名が口頭発表を行いました。大橋はART支援室早瀬さんとサテライト会場運営を行いました。大野准教授は研究代表者を務める岡山大学次世代研究拠点プログラム「口腔器官の再構築から器官の発生・再生の統一原理の解明」で、「生命科学分野におけるSociety 5.0を目指した解析パイプラインの構築」と題したセミナーシリーズを1/21、2/4、2/25の3日に分けてオンラインで行いました。今回は様々な会社からの発表をお願いし、多くの参加者からの質問を受け大変好評でした。3月末には、2020年3月に開催予定であった第33回日本軟骨代謝学会がオンラインで開催され、大橋がポスター発表を行いました。

教育関係では、コロナ感染症によるカリキュラム変更もあり、分子医化学分野は9月から1月まで、1年次から3年次対象の複数授業を抱えることとなり、基礎病態演習（3年）、医学研究インターンシップ（3年）、分子医化学講義と実習（1、2年）を掛け持ちで担当しました。すべての授業がオンライン形式となり、Teamsによるライブ講義、Streamへビデオを挙げるオンデマンド形式授業、Moodleによるテスト、そしてライブとビデオを取り混ぜた実習とを駆使して実施しました。準備には多くの時間を費やしましたが、急遽ながらも実施できたのは参加いただいた教員全員の協力のおかげと感謝いたします。また、医学科非常勤講師として京都大学・渡辺亮先生、東京大学・洲崎悦生先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・佐々木隆子先生にも、オンデマンドでの特別講義のためビデオ収録をお願いしましたがわかりやすい内容の講義で大変好評でした。10月から12月には3年次5名（佐藤、渋谷、田中、野島、橋本）がインターンシップで配属し、3つの研究グループに分かれて研究に従事しました。コロナ感染症対策を取りながら熱心に取り組んでくれました。2月には沖縄科学技術大学院大学・堀哲也先生による大学院特別講義「ペリニューロナルネットワーク構成因子がシナプス形成に与える影響」を拝聴しました。（大橋 記）

## 薬理学

西堀正洋教授が2021年3月末に定年退職を迎えます。2001年に教授に就任し、薬理学教室に多くの功績をもたらしました。

このほど、日本薬理学会の最高賞である「第14回江橋節郎賞」を受賞し、3月の第94回日本薬理学会年会（札幌）にて受賞記念講演を行いました。

日本血液製剤機構（JB）とのHRG血液製剤の開発研究（2017-19・AMED採択研究）について12月にAMED成果発表を行いました。第41回日本臨床薬理学会学術総会（福岡・Web）にて、西堀教授が「抗HMGB1抗体による神経疾患とがん創薬」についてシンポジウム発表を行いました。

10～12月、医学科3年の石部健太さん、北川翔一さん、小橋和馬さん、長谷川怜央さん、松川力嗣さんが薬理学教室で研究を行い、成果を12月開催の第34回創薬・薬理フォーラムで発表しました。同時に、西堀教授が「私が歩んだ基礎研究40年」と題し教育講演を行いました。

1月開催の第7回 D-Bio Digital & F2F'20において、「がん血管内皮細胞を特異標的とするDDS創薬」に関しマッチング商談を行いました。その他の研究シーズに関しても国内外企業との面談を実施し、実用化に向けた取り組みを行っています。

人事に関しては、10月に和氣秀徳講師が近畿大学に転出、12月に吉井将哲院生、および3月に高橋陽平院生が学位（医学博士）を取得しました。構成員は、西堀正洋教授（2021年4月～特任教授）、逢坂大樹助教、王登莉助教、劉克約非常勤研究員、進吉彰、喬寒棟、村岡玄哉、技術補佐員・教室秘書の佐藤まどか、矢田真理子、木田由希子（3月末退職）の11名です。

現在、教室スタッフ一丸となり、西堀教授の退任記念誌の編集に取り組んでいます。改めて現在私たちが置かれた環境に感謝し、西堀教授にご指導いただけるこの貴重な日々を一寸たりとも無駄にしたくないと感じるこの頃です。（逢坂 記）

## 病理学（免疫病理）

令和2年9月から令和3年3月までの教室の動きを、簡単ではありますがご報告いたします。今年はコロナウイルスの影響を受け、MRI海外研修は禁止となり海外希望者も、国内で研修を行うことになりました。

それに伴いMRI受け入れも10月～12月に変更になりました。当教室では、5名の学生を受け入れました。懸命に実験に取り組み、12月の報告会では素晴らしい結果を発表することができました。残念ながら海外研修は果たせませんでした。教室の留学生とも懸命に英語で意思疎通を図り、異文化理解のよいきっかけになっていたと思います。

10月には、客員研究員として半年間、研究に取り組んでいた中村薫、令和元年9月にONECSプログラムの中国人留学生として勉学に励んでいた陳悦華（CHEN, Yuehua）、平成30年度3月に短期外国人研究員として1カ月間研修に来ていたミャンマーからの留学生、HNIN WINT WINT SWEが大学院生として教室の一員に加わることになりました。

また、社会人大学院生の太田陽子が病理専門医に合格し（8月）、同じく社会人大学院生の河原明奈が1月に学位を取得しました。

冬になり新型コロナウイルスが再び猛威を奮っております。教室員一同、感染対策・健康に気をつけ研究・勉学に専念し

たいと思います。

皆様、今年もどうぞ宜しくお願い致します。(楊井 記)

## 病理学 (腫瘍病理)

皆さま御存知のように2020年は医学部創立150周年を迎え、吉野は記念事業実行委員長として活動を行っていましたが、コロナ禍の収束が全く見通せない状況が続き150周年記念式典も一年延期となりました。2021年6月24～26日に日本リンパ網内系学会総会をハイブリッド方式で開催いたします。また、11月に開催予定の日本病理学会秋期特別総会は現地開催で、アジア太平洋地区病理学会 (APIAP) はWEB開催での準備を進めております。また吉野が理事長を務める日本IAPのスライドセミナーは昨年と同様にWEB開催を予定していますが、いずれも新型コロナウイルスの状況を鑑みながら臨機応変に対応する必要性を感じております。

教室では堀川恭佑、直井友亮の2名が入局し、今後の活躍が期待されます。西村碧フィリーズが10月から半年間にわたってがん研有明病院での病理研修を経験しました。4月から谷口恒平が広島市民病院へ、小野早和子が香川県立中央病院へ、溝渕光一が香川労災病院へ異動となりました。岡山ろうさい病院の沖田千佳が1月から常勤医として勤務しております。2020年度の病理専門医試験に佐藤由美子、永喜多敬奈、西田賢司、池田知佳が、口腔病理専門医試験に小野早和子が合格しました。5名の専門医合格者を輩出することは、かなりまれなことで、いずれも今後とも精進を期待します。2020年3月には池田知佳と坂谷暁夫が学位を取得しました。WHO分類の第5版の編集がスタートしますが、血液リンパ腫関連において吉野はexpertとして参画することになりました。このポジションは各臓器系ともアジアでは最大2名となっており、かなりの名誉であり、本邦からの情報発信を担う立場となります。

コロナに対するワクチンで明るい希望が見え始めてはいますが、まだまだ楽観視できない状況下での難事業となることが予想されます。教室員、教室関係者、同門の皆様のご支援、ご協力をよろしく願います。(田中 記)

## 病原細菌学

人事では、美間健彦助教が2月1日付で愛媛県立医療技術大学に教授として転出しました。教室だけでなく医歯科学専攻の運営にもご尽力下さった美間助教のご退職は大きな痛手ですが、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。修士2年の日野千恵子さんが「*Vibrio alginolyticus*の環境適応機構の解明-LrpによるsRNA1の発現制御-」の題目で立派な発表を行って、無事に学位審査を終えました。4月からはまた薬剤師として働くとのことですが、残りわずかとなった時間を惜しんで追加実験や学会発表の準備を行なっています。

教育活動では、9月に3年生の基礎病態演習があり、今年度は後藤助教が主担当教員となり、7名の学生がPBLテュートリアル形式で「腕の痛みと貧血?!」の課題に取り組みました。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対応でリモートになっ

たためか、能動学習を促すのに例年以上に難渋していました。血液・腫瘍・呼吸器・アレルギー内科の藤原英晃先生にはリソースパースン、臨床コメンテーターとしてご支援いただきました。10月～12月、3年生のMRIでは、井上七海さん、榎本脩作さん、鍵田麻衣さん、三宅佐歩さんの4名が当分野に配属されました。井上さんと鍵田さんは米国・アーカンソー大学に、三宅さんは北里大学に当分野から派遣される予定でしたが、COVID-19の拡大に伴い学内配属となりました。4名は、お互いに切磋琢磨して素晴らしい研究成果を出しました。学外配属の予定だった3名は、最初は残念そうでしたが、最終的には楽しく研究が出来て満足していたようです。COVID-19の拡大により慰労会を開いてあげられなかったのが心残りです。3月末からは3年生の細菌学講義・実習が始まります。COVID-19の影響で授業の実施方針が立っていませんが、どのような授業形式になっても高い教育効果を実現できるように、教員、TAが力を合わせて準備を進めています。

研究活動では、3月23日～25日、松下治教授を総会長としてオンライン開催される第94回日本細菌学会総会で、松下教授、I Putu Bayu Mayuraさん、日野さん、三好諒さん、山本が日頃の研究成果を発表します。なお、日野さんの発表はワークショップに選ばれました。

今年度は同門会の開催を見送らざるを得ませんでした。一日も早くCOVID-19が収束して、同門の先生方にまたお目にかかる日を楽しみにしております。末筆になりましたが、同門の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。(山本 記)

## 病原ウイルス学

人事については、令和3年1月4日に本田知之教授が大阪大学より着任し、新体制で研究室の立ち上げを進めています。昨年、山田教授が定年退職、山下信子講師が落合病院に転出し、教室スタッフは小川助教と難波の二人となり、令和2年4月から10ヶ月間にわたり松下治教授 (細菌学) が代行教授を務めました。教育については、新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、ウイルス学講義・実習 (3年次) が第4学期から第1学期へとカリキュラム変更となり、急いで準備を始めました。そして、山田雅夫 (新見公立大学)、山下信子 (落合病院)、特別講義として「C型肝炎ウイルス」加藤宣之 (腫瘍ウイルス学特命教授)、「ネオウイルス学」鈴木信弘 (資源植物科学研究所)、4名の先生のご協力でもオンライン講義を無事に実施することができました。医学セミナー (1年次1学期)、基礎病態演習 (3年次2学期) もオンラインでの実施となり、試行錯誤がつづきました。10月からの医学研究インターンシップ (MRI) では年度初めての対面となり、羽藤智文さんが小川助教と研究に取り組み、3ヶ月の成果をオンライン発表会で披露しました。研究については新型コロナウイルスの影響で10月に延期された第61回日本臨床ウイルス学会で「インフルエンザウイルスの細胞侵入に対するセシウム添加の影響 (*in vivo*)」(山下) をオンライン発表しました。

今後は、インフルエンザウイルスやボルナウイルスなどのRNAウイルスと、B型肝炎ウイルス、ヘルペスウイルスなどの

ウイルス研究とレトロウイルスの研究を進めていく予定  
です。新型コロナウイルスの流行によりウイルス研究に注目が  
集まっております。一緒にウイルス研究して下さる先生がお  
られましたら、ぜひお声がけください。当教室の研究活動につ  
いては教室ホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/virology/index.html>) をご覧ください。(難波 記)

## 疫学・衛生学

昨年10月に1名が博士課程に入学しました。また同月に、ウー  
マンテニエアトラックジュニア制度で松本特任助教が着任しま  
した。本年1月には、鈴木助教に研究准教授の称号が付与され  
ました。

学部四年生の「衛生学」をオンラインで実施し、統計ソフト  
ウェアStataの実習も行いました。また、学部三年生の「医学  
研究インターンシップ」では、6名の学生を受け入れました。  
疫学への関心が高まる中で学んだ経験が、今後活かされるこ  
とを期待しています。

昨年5月より、統計ソフトウェアStata/SE 16のサイトラ  
イセンス(1年間)が大学に導入されています。岡山大学  
Moodleに「Stataユーザークラブ」というダウンロードサイト  
があります。このサイトでは、三橋先生(新医療研究開発セン  
ター)による「Stata解説動画チャンネル」も掲載されています。  
また、各医局や診療科単位向けのStataミニ講習会も開催して  
おります。

昨年12月には、53rd Annual Meeting of the Society for  
Epidemiologic Researchがオンライン開催され、鈴木研究准教  
授が因果推論に関するポスター発表を行いました。また、本年  
1月の第31回日本疫学会学術総会(オンライン開催)では、口  
頭発表を行いました。

昨年10月には、テレビ会議システムを用いて会場を分散させ  
るなどして、高尾講師が産業医研修会を開催しました。岡山産  
業保健総合支援センターおよび岡山労災病院のご協力を御礼申  
上げます。

頼藤教授が令和2年度日本小児科学会学術研究賞を受賞しま  
した。研究テーマは、「国内大規模コホートをを用いた乳幼児お  
よび小児の諸疾患の疫学的病因分析」です。

講座HPには、「新型コロナウイルス関連情報」や「岡山県内  
の感染状況・医療提供体制の分析」を掲載しております。今後  
ともご支援いただきますよう宜しくお願い致します。

(鈴木 記)

## 公衆衛生学

2020年度の教育活動としては、9月に4年次生を対象とした  
公衆衛生学の講義・実習、大学院生(博士)を対象とした臨床  
研究・予防医学実践論の講義、9-12月に3年次生を対象とし  
た基礎病態演習および医学研究インターンシップを行いました。  
いずれもCOVID-19流行下における実施であったため、一  
部を除きオンライン中心の講義・実習となりました。

2020年度の研究活動としては、10月の日本公衆衛生学会総会

では久松准教授が、11月の日本アルコール・アディクション医  
学会学術総会では神田教授と大学院生田邊さんが、2月の日本  
疫学会学術総会では久松准教授が、それぞれ学会発表しました。

現在行われている研究としては、神田教授が研究代表を務め  
る「インターネット依存における頸性うつをターゲットとした  
身体的精神的影響の解明」(基盤研究C)、「家庭血圧変動に  
着目した、IoT活用による遠隔化・省人化・非接触型地域予防  
医学研究」(令和2年度サイバーフィジカル情報応用研究コア  
(Cypher) Society5.0研究支援プログラム)、「地域住民におけ  
る測定値自動送信技術を用いた家庭血圧管理状況と血圧変動要  
因に関する探索的研究」(オムロンヘルスケア株式会社との共  
同研究)、久松准教授が研究代表を務める「家庭血圧の長期縦  
断研究からみた血圧変動の共振現象及び無症候性脳血管障害と  
の関連」(基盤研究C)、福田助教が研究代表を務める「地域保  
健活動はどのように住民の健康に寄与したのか? - 島根モデル  
の歴史の変遷を例に」(若手研究)などがあります。

2020年10月からは絹田助教が着任し、当教室の教育・研究環  
境も益々活発となっています。また、大学院生について、2021  
年3月に眞名子由宜さんと田邊莉奈さんが修士課程を、佐能俊  
紀さんが博士課程を、それぞれ修了しました。(久松 記)

## 免疫学

人事面では昨年からO-NECUSプログラムの第5期生として  
加わっていたZhang Xingdaさんが9月で1年間の留学期間が  
終わり、中国に帰りました。Zhangさんは工藤の下で、メト  
ホルミンと抗PD-1抗体併用療法による、腫瘍血管の正常化につ  
いて組織学的解析を行いました。

研究面では頼藤教授、工藤、西田が10月7-9日に開催が延  
期になっておりました、第24回日本がん免疫学会(札幌)でオ  
ンライン発表を行いました。

教育面では、医学科3年生のMRIで4名の学生を受け入れま  
したが、そのうち1名は諸事情により他教室に異動となりました。  
残った3名が工藤、西田の下で、メトホルミンと断食による  
抗腫瘍効果の解析というテーマで、腫瘍微小環境の変化を組  
織学的に調べました。その結果、腫瘍に浸潤したCD8T細胞と  
制御性T細胞の増減や、癌細胞の代謝・増殖関連分子の発現変  
化、腫瘍血管の正常化など、腫瘍微小環境の組織学的解析にお  
いて礎となるようなデータを、数多く出してくれました。3か  
月の研究生活は気が付けばあっという間でしたが、夜間や休日  
にまで及ぶ実験も精力的に行ってくれたのが印象的でした。医  
学科2年生の基礎免疫学は例年通り1-2月の開講、3年生の  
寄生虫学は例年より少し時期がずれて1月の開講となりました。  
COVID-19の拡大を踏まえ、どちらもオンラインでの動画  
配信により授業を実施いたしました。オンライン授業は我々に  
とっても初の試みで、準備にも戸惑うところが多々ありまし  
たが、無事に終えることができました。(工藤 記)

## 法医学

法医学実務面では、昨年1年間の剖検数は152体となり、一

昨年の総剖検数をやや下回りました。ここ数年来の年間解剖数の減少傾向は変わらず、年が明けてから2月10日までの剖検数は15体と、比較的平穏な日々が続いております。

石津日出雄名誉教授は、昨年4月29日に、大学での長年の教育、研究の功勞により瑞宝中綬章を受章され、7月30日には勲章と勲記の伝達が行われました。同門の私共にとっても誠に喜ばしい限りです。受章祝賀会は新型コロナウイルス感染症の影響で、開催時期未定となっておりますが、石津先生からの申し出もあり開催を断念し、祝賀会に代えて記念品をお送りすることで、受章をお祝いすることになりました。

昨年開催予定であった各種学会は、コロナ感染症の影響で延期、オンライン開催などに変更となり、6月に京都市で開催予定であった第104次日本法医学会学術全国集会も9月に延期となって現地で開催され、この学会では宮石教授が「Myoglobinに関する法医学的研究」と題する特別講演を行い、ライフワークとなっているMyoglobinに関連する長年の研究を概括いたしました。

教室内では、三浦雅布助教は昨年の10月に川崎医科大学に准教授として栄転いたしました。また、長年教員として教室に在籍している山本雄二講師は、今年の3月末に定年を迎え退職予定です。博士課程大学院3年生の小林智瑛さんはミオグロビンの免疫組織染色、固定組織におけるホルマリン色素、ホルマリン耐性細菌等の研究、また、同じく博士課程大学院3年生の竹居セラさんもミオグロビンの死後拡散、非骨格筋組織における免疫染色等の研究を継続しています。また、9月から約半年間の予定で水島海上保安部から法医学研修生として西本翔祐さんを受け入れており、死体解剖の補助を中心とした法医学教室の各種業務を体験すると同時に、教室カンファレンスにも参加し、過去の溺死体解剖事例を中心として死後CT画像の解析にも取り組んでいます。また、10月には今年も検視官講習者4名を受け入れました。

昨年末に開催予定であった同門会総会・忘年会は、やはり新型コロナウイルス感染症の影響で開催を中止いたしました。

学術面では、第3回日本法医学病理学会学術全国集会（誌上開催）、第37回日本法医学会学術中四国地方集会学会（誌上開催）等において教室員が発表を行いました。

教育面では、昨年の5月から7月に予定されていた3年生の医学研究インターンシップは、コロナ感染症の影響で10月から12月に変更となり、3名が法医学解剖、検屍の体験、解剖事例研究、プランクトン検査の研究等を行いました。また、選択制臨床実習が今年の1月から始まり、6年生（3月までは5年生）延べ14名が法医学解剖、検屍の体験、解剖事例検討等を行います。

（山本 記）

## 医療政策・医療経済学

現在、「医学入門」「生命倫理学入門」という教養科目を担当している。コロナ禍の中で、できるだけ普通の対面授業を行う、との方針で実施している。もっとも津島キャンパスは学生も教員もまばらで、授業の多くはオンラインで行われているようだ。学生には対面授業が逆に負担になる可能性もあるが、反応を聴

きながら対処していきたい。

委員会や研究会も多くはオンラインで行われている。昨年11月28日に、岡村暢大・岡村一心堂病院院長など県内若手経営者にお招きいただき、対面とオンラインを交えた講演会を行ったことが印象に残る。

昨年9月から、「笠岡市新病院基本構想有識者会議」が創設され、その委員長を仰せつかっている。この会議は、笠岡市民病院の今後の在り方を議論するものだが、難波義夫・岡山県病院協会会長、前田嘉信・岡大教授などの先生方と意見交換できる有意義な場となっている。笠岡市民病院の今後の発展に少しでもお役に立つようにしたい。

年末年始に「医療政策とその課題」という論文を執筆した。「日本の国民皆保険体制はこれからも持続可能か」という論点を中心に見解を述べた。「超高齢化・人口減少」の中で、公費と保険料の財源確保は難しく、病院経営も非常に厳しい現状にある。各ステークホルダーが知恵を出し合って、それぞれの地域で解決策を模索する状況が続くだろう。

コロナ禍は続き、現在（1月16日）11都府県に緊急事態宣言が発令されている。岡山県でも病床使用率、重症者病床の使用率が上昇しており、医療提供体制がひっ迫しつつある。年末年始・昼夜を問わず勤務をされている医療従事者、保健所や行政関係者、疫学研究者の皆様には心から敬意を表したい。今回のコロナ禍に対して、日本の医療従事者・関係者は底力を発揮していると認識している。

筆者は今春で岡山大学を定年退職します。これまでのご愛読に深く感謝を申し上げます。（浜田 記）

## 分子腫瘍学

今期の人事等としては、笹井香織助教が1月31日付けで退職し、学外に転出しました。また、瀧川真帆が修士課程を修了し、バイオテクノロジーと抗体医薬を強みとする製薬会社に就職しました。

教育関係としては、9月の基礎病態演習を大内田准教授と伊藤佐智夫助教が担当し、オンラインで学生を指導しました。また、10月から12月にかけては、医学インターンシップ（MRI）として3名の学生が、COVID-19への配慮の上、それぞれ対面で研究に取り組みました。いっぽう、1回生および2回生同時期の生化学実習についてはオンラインのデモンストレーション視聴となり、核酸分野のナレーションを伊藤助教が担当しました。（堺 記）

## 細胞生物学

今年度の医学研究インターンシップ（MRI）では、黒田萌絵さん、佐藤雅信さん、高橋拓真さん、高橋美世さん、松下尚さんの5人が細胞生物学教室で研究を行いました。

研究成果発表について、細胞生物学教室で研究を行っている呼吸器・乳腺内分泌外科の大学院生荒木恒太先生筆頭の論文がJournal of Molecular Medicine誌（99（1）：131-145, 2021）に掲載されました。また阪口政清教授が共同研究を行った論文が

Anaerobe誌 (66:102281)、BMC Research Notes誌 (13 (1): 489)、Journal of Cardiology誌 (29: S0914-5087(29)30410-X)、Journal of Immunology誌 (15: j2000817, 2021) にそれぞれ掲載されました。

学会発表について、大学院生の友信奈保子さん、合原勇馬さんが第79回日本癌学会学術総会(2020年10月)で発表を行いました。また合原勇馬さんと私、村田が第43回日本分子生物学会年会(2020年12月)で発表を行いました。

特許出願について、肺炎症性疾患に関するPCT出願とS100A8/A9に関する海外出願(米国、欧州、中国)を2020年10月に行いました。

共同研究について、ノーベルファーマ株式会社、株式会社カイトックとそれぞれ新規共同研究をスタートさせ、株式会社ホロンシステム、株式会社資生堂と共同研究に関する追加契約を行いました。

コロナ禍でまだまだ大変な状況が続きますが、教室員一同力を合わせて研究に励んでいきたいと思います。(村田 記)

## 細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ミトコンドリア機能と細胞機能発現の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術(体内診断法)の確立、がんの新規画像診断・治療法(Theranostics)の確立、酸化脂質を中心とするメタボノミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTS1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業(AMED)、特別電源所在県科学技術振興事業(岡山県)などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、工学部、薬学部などの学内研究者、マレーシアからの留学生(博士課程)、インドネシア、中国からの留学生(修士課程)さらには、京都大学の共同研究者が従事しています。

学術関係では、2月に行われた博士課程のXian Wen Tan君がオンラインでの学位審査を経て、学位を取得しました。

教育関係では、新型コロナウイルス感染防止対策により授業体系がほぼオンラインになったことで、慣れないアプリでの授業準備に追われました。基礎病態演習では、オンラインでコミュニケーションが取りづらくなか、3年生の7名とGaucher病の理解と発表に取り組みました。また、今年度は1年生と2年生を対象にした生化学・分子医化学の脂質の講義と実習を担当しました。特に脂質実習の動画撮影と編集では多くの先生のご協力を賜りました。医学研究インターンシップでは、大久保君、川上君、重中君が当教室の配属となり、対面で3ヶ月間にわたりそれぞれの課題に取り組み研究の一端を体験してもらいました。また、大学院特別講義もオンラインとなりましたが、宇治広隆先生(京都大学大学院工学研究科助教)からは新たな分子イメージング材料の開発などについて、佐藤英介先生(鈴鹿医療科学大学薬学部医化学教授)からはNETosisの分子機構などについて大変興味深いお話を伺うことが出来ました。

(小淵 記)

## 消化器・肝臓内科学

昨年より猛威を振り続けている新型コロナウイルス感染は、我々消化器内科も引き続き大きく影響を受けることとなっておりますが、感染対策を適切に行ったうえで、安全、安心をスローガンに就任6年目を迎えられた岡田裕之教授以下、医局員一丸となり診療、研究、教育に従事しています。

スタッフ人事面と致しましては胆膵グループの中心的存在として臨床に、研究に大いに活躍してくれた友田健(H16)が今年1月より岡山市立市民病院へ赴任となりました。また大学院生、医員の人事面では、昨年10月に胆膵グループの河原聡一郎(H23)が広島市立広島市民病院へ赴任、1年間の病棟医業務を終えた亀高大介(H24)が医員として診療を行いながら臨床研究を開始し、根岸慎(H25)は香川県立中央病院へ赴任となりました。またレジデントとして後期研修を行っていた林里美(H29)は重井医学附属病院に赴任し、引き続き研修を継続中です。入れ替わりに10月より稲生祥子(H23)が香川県立中央病院から、豊澤惇希(H26)が岩国医療センターから帰局し、病棟医として消化器内科の高みを目指すべく日々研鑽を積んでおります。また産休中であった竹内桂子(H20)が医員として復帰し、診療に従事しています。

今年度はコロナ禍の厳しい状況下で、恒例の同門会総会も中止とせざるを得ない中18名と多数の新入局員を迎えることができました。これもひとえに同門の先生方、鶴翔会会員の先生方のお力添えのおかげと感謝申し上げます。

来る令和3年度は岡田教授御在任最終年度となります。新型コロナウイルスの影響はまだしばらく続くことが予想され、引き続き厳しい条件下ではありますが消化器内科の発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご貢献できるよう努力致しますので、引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(川野 記)

## 血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素から多大なご支援をいただき御礼申し上げます。当教室の現況の報告をさせていただきます。

前田嘉信教授は、新型コロナウイルス感染対策におけるBed Control Team (BCT) のチーフとして、Infection Control Team (ICT) の市原講師、谷口助教とともに院内の新型コロナウイルス感染に関連した業務をおこなっております。2021年4月からは、岡山大学病院長として、診療、研究、教育のすべての分野で日本をリードする病院を目指して活動を開始いたします。

木浦勝行教授は、2020年11月12～14日に第61回日本肺癌学会学術集会の会長を務めました。「肺癌撲滅を目指して2020」を大会テーマに掲げ、コロナ禍において感染対策に十分な配慮をした上で、岡山とWebのハイブリッド形式にて開催しました。現地参加とWeb参加を合わせて約4,000名の方々にご参加いただき、無事盛会のうちに終了いたしました。

診療においては、引き続き治験、臨床試験、新規治療に積

極的に取り組んでおります。遺伝子改変がん免疫療法である「CAR-T細胞療法」も、中四国地域で唯一の実施設として着実にノウハウを蓄積し、安全にマネジメントできる体制を構築しております。

教室の実務体制は、医局長 西森久和、外来医長 大橋圭明、病棟医長 谷口暁彦（西8階）・藤原英晃（西3階BCR）、教育医長 浅田騰が担当しております。血液・腫瘍内科の医員は大山矩史、北村亘、高須賀裕樹、村上裕之、そして2021年3月から松村彰文が加わります。呼吸器・アレルギー内科の医員は、太田萌子、尾関太一、中村尚季、西村淳、森田絢子、野海拓です。2021年1月には、池川俊太郎が米国Dana-Farber Cancer Instituteへ留学しました。

最後になりましたが、引き続き「患者さんのために、医学のために、社会のために」教室員一丸となって診療、研究、教育に取り組んで参りますので、何卒ご支援、ご指導の程よろしくお祈り申し上げますと共に、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。（西森 記）

## 腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動をはじめ、広く精力的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っています。今年度から和田教授が研究代表者である「尿レクチンアレイ解析を用いた腎疾患診断キットの開発」（AMED難治性疾患実用化研究事業）が開始されました。昨年度までの革新的医療シーズ実用化研究事業（AMED）「尿中糖鎖プロファイルによるIgA腎症の診断法の開発」を進展させるものです。また8つのAMED研究の分担研究者として研究を推進しています。

COVID-19の影響で多くの学会が中止もしくはオンライン開催となりましたが、教室員は大変活発に学会発表を行っております。和田嵩平先生が日本糖尿病学会中国四国地方会第58回総会で若手研究奨励賞（YIA）を受賞しました。また第117回日本内科学会 医学生・研修医の日本内科学会ことはじめでは当科教員指導のもとと医学部6年生2名が発表され、松田一樹君が優秀演題賞、大高望助教が優秀指導教官賞を受賞しました。

人事面では、令和2年10月に渡辺晴樹助教がThe Feinstein Institutes for Medical Researchに留学されました。また病棟業務は、和田嵩平先生、志田原健太先生、中土井崇人先生、伊藤慶彦先生、杉谷宗一郎先生、縄維翔一先生に加え、令和3年1月から神野文香先生が従事されています。

最後になりましたが、同門の諸先生方の御健康と、益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。（木野村 記）

## 精神神経病態学

新型コロナウイルスの影響で教室主催の研究会などが軒並み中止となる中、令和2年12月12日に行われた教室同門会は、開講以来初のハイブリッド開催となりました。

当教室では同門会を年2回行っており、若手精神科医のお披

露目の場であるとともに、新しい学びを得る相互研鑽そして交流の場となっています。今回、コロナ禍で6月の同門会が中止となったため、12月はなんとしてでも開催したいと考え、同門会長の堀井茂男先生や山田了士教授を中心として、ハイブリッド方式での開催を模索していました。

当日は岡山プラザホテルにて、十分な感染対策を行った上で、まずは少人数による役員会を行いました。その後の臨床集談会では、最初に専攻医の先生方が会場で一般演題を発表しました。参加者は原則としてオンライン参加とし、登壇および役員会に出席された先生方のみ会場参加OKとさせていただきます。続いて、各研究室の活動内容を紹介するセッションを挟み、最後に教育講演として岡山県精神科医療センターの来住由樹先生が「岡山県におけるCOVID-19感染症の対応の現状と今後について－精神科での具体的な対応に着目して－」という演題名でタイムリーなご講演をされ、貴重な情報を同門全体で共有することができました。そして、岡山大学保険管理センターの大西勝先生からは「コロナ禍におけるメンタルヘルスケア」について、現場に即した実践的なお話がありました。全体を通して機器や通信のトラブルもなく、無事に終えることができ、事務局一同ホッと胸をなでおろしているところです。

今回オンライン参加としたことで、遠方にお住まいの先生や子育て中の先生などふだん参加ができない方々が多数アクセスされていたのがとても印象的でした。コロナ後を見据えて、今後もオンラインの強みを活かし、開催方法などを柔軟に検討していく必要があるように思っております。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。（井上 記）

## 小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室と岡山大学病院小児科の現況を報告させていただきます。当教室は中国四国の基幹として、この地域の診療・教育・研究を支える責務を果たしています。

診療では、平成24年9月に設置された「小児医療センター」を基盤として最重症児への高度医療を推進しています。当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科、小児心身医療科が中心になり、院内の多くの診療科・診療部門との横の連携を進展させています。小児医療チームは「周産母子センター」とも連携しています。産科婦人科学の増山教授のご指導のもと、吉本順子、鷺尾洋介が中心になって重症のNICU患者の診療に当たっています。

広島県福山市とその周辺の医療体制が強化されていっています。「小児急性疾患学講座」（広島県と福山市による寄付講座）では、増山教授らと連携して、池田政憲教授、鷺尾洋介、津下充らが尽力しています。このように、中国四国の各大学病院、総合病院、クリニックと綿密に連携しながら、当病院が、子どもとご家族に安心安全の高度医療を提供させていただく体制が進展しています。

当教室関連の教授は塚原、大月、池田、小田の4人体制、准教授も岡田、嶋田、馬場、鷺尾の4人体制です。講師は病院講師も含めて8人、助教は1人です。当教室をあらゆる面で支え

てくれる臨床教授は18人、臨床准教授は11人、臨床講師は16人です。岡山大学小児科とその同門会も、強力な診療～教育～研究チームを形づくっています。

今年（令和3年）4月に医師1年目として「小児科特別コース」を開始するのは2人（定員枠一杯）、医師3年目として「小児科専門医コース」を開始するのは5人です。こちら以外に、2年後に「小児科専門医コース」を希望する医師1年目の若手医師（定員枠以外のもの）、新たに当教室に入局した中堅医師がそれぞれ数名います。例年どおり、多くの方々が小児医科学教室に集ってくれています。

最近5年間の大学院入学者は22人、最近4年間の医学博士取得者は19人です。このように、毎年、当教室より、継続的にPhysician-Scientistsが輩出されています。英語論文による国際誌への報告も継続しています。一般小児科ではPediatr Int, 循環器ではSci Transl Med, Pediatr Cardiol, 感染免疫ではJ Pediatr, Allergol Int, Ann Rheum Dis, 血液腫瘍ではBr J Haematol, Int J Hematol, Pediatr Blood Cancer, Ther Drug Monit, 成育新生児ではJ Pediatr, CNS Spectrumsなどで論文が発表されています。ここ数年間の総IFは年間80～100を維持しています。

また、循環器の平井健太が小児循環器賞（日本循環器学会）、成育新生児の玉井圭が岡山県医師会学術奨励賞をそれぞれ受賞しました。本人はもとより、周囲の方々の絶え間ない努力と協力の賜物です。

最後になりましたが、当教室の診療・教育・研究のすべてにおきまして、引き続き、皆さまのご指導とご支援をいただけますよう、どうぞ、宜しく願い申し上げます。（塚原 記）

## 発達神経病態学

小林勝弘教授以下、秋山倫之准教授（てんかんセンター副センター長、医局長）、秋山麻里助教（教育医長）、柴田敬助教（病棟医長）、花岡義行助教（外来医長）の体制で、教室運営を行っております。

医局人事に関しては、前回以降特に変化はございません。診療については、新型コロナウイルス感染症の再拡大に伴い、外来・入院患者数の減少、電話再診数の増加などといった形での影響が続いております。しかし、診療内容自体には変更はなく、他診療科との連携（小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボード）も継続して行っております。なかなか先の見えない苦しい状況ではありますが、感染対策に気を遣いながら診療を続けていく所存です。

学会活動に関しては、全国学会の延期、中止、web開催への変更が相次ぎました。日本臨床神経生理学会では、秋山倫之と柴田がweb参加での発表を行いました。

研究面では、てんかんや神経生理学、代謝物質分析等に関する臨床研究を続けております。限局性皮質異形成Ⅱ型による難治てんかんに対する医師主導治験は無事終了し、長期継続投与に関する特定臨床研究を継続しております。

今後とも同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしく願い申し上げます。（秋山 記）

## 消化器外科学

令和2年9月～令和3年3月の教室だよりをお届けします。

令和2年10月4日には第86回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会・藤原俊義教授就任10周年記念会を開催致しました。開催にあたっては、新型コロナウイルス感染対策として「3密」にならないよう新しい様式に対応し、岡山を拠点に13サテライト会場をオンラインで繋ぎ、ハイブリット形式での開催と致しました。各サテライト会場からオンラインで学術発表を行っていただいたほか、特別企画として、岡山県美作市出身の作家あさのあつこ先生を岡山会場にお迎えし、藤原教授を含めた医師数名を交えてトークショーを行いました。また、令和3年1月24日には、岡山大学関連の消化器外科医が一同に会する第9回岡山大学消化器外科フォーラムを、こちらも完全WEB形式で開催致しました。例年とは異なる形での開催となりましたが、245名もの多くの先生方にご参加頂きました。皆様から頂きましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

人事面では、荒木宏之が岩国医療センターへ異動しました。病棟勤務を終えた菅野令子は金光病院、櫻井湧哉は渡辺胃腸科病院、西村星多郎は矢掛病院、實金 悠は松田病院、遠藤福力は高梁中央病院へ、研究を終えた岡林弘樹は病棟勤務となり、小川俊博は岩国医療センターへ、小西大輔は香川労災病院へ、公文剣斗は高知医療センターへ赴任しました。米国留学から帰国した佐藤博紀、臨床研修を終えた坂本真樹、井上弘章、宇根悠太、永井康雄、猿渡和也、梅田 響、大島圭一朗は消化管外科・肝胆膵外科にて病棟で日夜奮闘しています。國友知義、谷悠真、濱田侑紀、光井恵麻は病棟勤務を終え、大学院生として研究生活に入りました。

診療では、手術支援ロボット ダ・ヴィンチを用いた食道癌手術・胃癌手術を着実に進めています。令和2年9月からは膀胱腫瘍に対するロボット支援手術を、10月からは直腸癌に対するロボット支援手術をそれぞれ校費の支援をいただいて開始しており、保険診療での施行に向けて着実に症例を重ねています。

研究・学会活動では、令和2年9月30日（水）には第40回日本分子腫瘍マーカー研究会を広島にて開催致しました。ご参加頂く皆様の安全を考慮し、一部の演者、座長の先生方のみ広島会場に来場頂き、完全WEB形式にて執り行いました。WEB開催にも関わらず多くの先生方にご参加頂きました。

多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育になお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます。（黒田 記）

## 呼吸器・乳腺内分泌外科学

2020年9月からの教室だよりをご報告いたします。年度当初より引き続きCOVID-19下で昨年までとは全く異なる環境ではございますが、豊岡伸一教授・副院長のもと一貫して「真摯・利他・向上」の精神を胸に臨床・研究・教育に励んでおります。学術面におきましては、9月13日第21回および2月6日第22回

外科MCセミナーを当科が主体となってWeb開催させていただきました。9月の会では海外留学中の若手からの留学報告、また国内の関連のご施設からはCOVID-19に対する各施設での状況をご報告いただきました。続いて2月の会では外科MC世代の若手医師が主体となり、関連病院でお世話になっております研修医や専攻医が日ごろの臨床修練の成果を発表いたしました。いずれも、Web開催ではございますが活発な議論や意見交換が行われておりました。また本年1月30日に豊岡教授世話人のもと第37回肺および心肺移植研究会をWebにて開催し皆様のご協力により盛会で終えることができました。尚、本会は公益財団法人岡山医学振興会より会の運営にあたりご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

診療面では、COVID-19下で減少傾向でありました手術症例数も少しずつ従来通りまで回復してまいりました。今後ロボット手術や肺移植など大学ならではの診療を充実させながら、医療の進歩に貢献してまいります。

教室では、9月より久保友次郎、坂田龍平、土生智大、前田礼奈が帰局し現在医員として勤務を行っております。10月より三浦章博がアメリカのColumbia University in the City of New Yorkへ、また2月より田中真がスペイン留学より帰局、山本治慎がCOVID-19の流行が落ち着いてまいりましたのでカナダのUniversity of Toronto, Toronto General Hospitalへ研究留学いたしました。かわって、伊達慶一、松田直樹、岩田一馬が病棟医を終え研究生活に入っております。

最後になりましたが、今後とも教室の運営にお力添えのお願いとともに同門の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

(校園 記)

## 整形外科

令和2年9月から令和3年3月までの教室だよりをお届けします。

一向に収束の気配が見えない新型コロナウイルスの影響で多くの行事開催に支障をきたしております。まず例年10月に開催しております市民公開講座「骨と関節の日」ですが、従来ご高齢のオーディエンスが大多数であり、またロコモ体操などの直接指導が困難なため断腸の思いで中止とさせて頂きました。

また、12月12日に岡山大学整形外科桃整会総会、桃整会学術講演会岡山運動器フォーラムを開催いたしました。新潟大学大学院医歯学総合研究科 機能再建医学講座 整形外科学分野教授の川島寛之教授による「骨・軟部腫瘍に対する診断と治療の変遷 in 新潟」の特別講演がありました。こちらも例年とは違い集合型WEB形式での講演でしたが、多数の参加がありました。

人事面では10月に総合リハビリテーション部講師として濱田全紀が吉備高原医療リハビリテーションセンターより帰局しました。運動器スポーツ医学講座助教の長谷井嬢が岡山市立市民病院へ異動し、藤原智洋がアメリカ留学から帰国し、スタッフとして腫瘍グループを支えています。専門研修プログラムで4月より半年間研修しておりました鷹取 亮、大川裕輝、田岡拓也、鳥越健太、鳥山貴裕、山下和貴が10月よりそれぞれの病院に戻り、新たに久保田耕作、赤木俊亮、石丸啓彦、大塚憲昭、

政田恭孝、西田一平が研修に励んでおります。

学術面では令和3年3月に井上円加、望月雄介、辻 寛謙、上甲良二、平中孝明が学位を取得しました。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。  
(島村 記)

## 皮膚科学

2020年9月から学術面、人事面についてご報告いたします。

9月6日第281回日本皮膚科学会岡山地方会では、コロナ感染対策の為、初めての現地とWebのハイブリッド開催となりました。川本、小橋、中井、浦上、磯金が発表しました。

9月12-13日第35回日本乾癬学会学術大会では『乾癬病変部表皮角化細胞から考えるプロダグマブの意義』の題目で森実が講演しました。また、『複数の生物学的製剤を使用した尋常性乾癬とアトピー性皮膚炎の併存例』の題目で中井が発表しました。

9月16日ヘルペス研究会in岡山で『Epstein-Barr virus関連リンパ増殖性疾患：種痘様水疱症の重症度マーカーの検討』の題目で三宅が講演しました。

10月9日乾癬診療連携Teams講演会～One Teamの乾癬バイオ治療を目指して～にて『紹介症例におけるバイオ治療の実際』の題目で森実が講演しました。

10月10-11日第71回日本皮膚科学会中部支部学術大会にて池田、山崎(江)、赤松、小橋が発表しました。

10月17-18日第35回日本皮膚外科学会総会・学術集会にて『CVポート部より漏出したトラバクテジンによる広範囲壊死の2例』の題目で杉原が発表しました。

10月24-25日第72回日本皮膚科学会西部支部学術大会にて『乾癬と表皮角化細胞とサイトカイン～当科の研究も交えて～』の題目で森実が講演しました。また、前、中川、山下、水田が発表しました。

10月30日の中国 Melanoma Seminar 2020にてAdjuvant療法についてのディスカッションで杉原が発表しました。

11月15日第107回日本皮膚科学会大分地方会にて『皮膚細菌感染症の治療戦略』の題目で山崎が講演しました。

11月21-22日第84回日本皮膚科学会東京支部学術大会にて『基礎と臨床の両側面からみた乾癬治療の最前線』の題目で森実が講演しました。また、『皮膚リンパ腫治験における最近の話題～CD30陽性皮膚原発悪性リンパ腫を中心に～』の題目で平井が講演しました。

11月24日SKY-RISE Internet Live Seminarにて『当科の乾癬外来におけるIL-23製剤の使用経験と関連研究』の題目で森実が講演しました。

11月27日Psoriasis Conference in SENDAIにて『当科における乾癬診療・研究2020』の題目で森実が講演しました。

12月3日皮膚科若手セミナーにて『当科における乾癬診療・研究2020』の題目で森実が講演しました。

12月12日The 45th Annual Meeting of the Japanese Society for Investigative Dermatologyにて『Epidermal keratinocytes and cytokines in the pathogenesis of psoriasis』の題目で森実

が講演しました。また、『CD8 T cells multifunctionality and PD-L1 expression as a biomarker of anti-PD-1 antibodies in advanced melanoma』の題目で眞部がoral presentationを行いました。また、三宅、篠倉がposter発表しました。

12月18日Lilly Psoriasis Web Conferenceにて『当科における乾癬診療・研究2020』の題目で森実が講演しました。

2020年1月16日第48回岡山研究皮膚科フォーラムにて『高脂血症・肥満が乾癬モデルマウスに及ぼす影響の検討』の題目で池田が講演しました。

1月16日第282回日本皮膚科学会岡山地方会において、芦田、中川、前、中井、赤松、山崎（江）が発表しました。

人事面では、10月に川本が倉敷中央病院へ異動。また、新年度からは4名の新入局員（白井、砂川、徳田、竹中）が決定しております。引き続きご指導・ご鞭撻の程、何卒宜しくお願ひ申し上げます。（平井 記）

## 泌尿器病態学

令和2年9月から令和3年3月までの教室だよりをお送りいたします。

那須教授は岡山大学理事（研究担当）・副学長、渡邊准教授が泌尿器科診療科長、小林が医局長を務めています。

人事面では、令和3年度は9名の新入局を予定しておりますが、開業、退職者もあり、相変わらず関連病院では人手不足が続いております。引き続き医局員や同門一同、教育や診療を通じて学生さんや研修医と密にコンタクトを取り、ひとりでも多く泌尿器科に興味を持って頂けるよう頑張りたいと思っております。

診療面では、外来医長を佐古助教、病棟医長を枝村助教が務めております。新型コロナウイルスのため、外来、手術を制限せざるをえない状況が続いておりますが、大幅な患者数の減少もなく診療を行っております。手術に関してですが、ロボット支援膀胱全摘は、岡山県内の施設を中心に多数の患者様をご紹介いただき急激に件数が増加しております。尿路変向は回腸導管を体腔内で作成する手技を導入し、ますます低侵襲に治療可能となっております。ロボット支援下前立腺全摘除術は、新型コロナウイルスの影響で、若干の減少を認めましたが、年が明けて令和3年となってからの手術件数のペースは、元に戻りつつあります。令和2年4月より開始しているロボット補助下腎盂形成術、仙骨陰固定術も、多くの患者様をご紹介いただき、順調に症例数を増やしております。このように、従来の手術方法と比べ手術時間が短く、繊細な手術が可能なロボット手術は、今後ますます増加していくものと考えております。

2009年に立ち上げた腎移植は、荒木講師を中心に、10年で100例を超え、1年生着率も100%を保っております。渡邊准教授を中心に開始した過活動膀胱に対するボツリヌス注入療法も順調に症例数を増やしております。基礎研究では渡部新医療研究開発センター教授と定平助教を中心として、がん抑制遺伝子や再生医療、新規医療の研究開発およびその橋渡し研究を進めています。

教育面では学生や大学院生、研修医の教育に力を入れており

ます。

関連病院の先生方におかれましては、今後とも益々のご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひ致します。末筆ながら、同窓の先生方のご健康とご活躍をお祈り致します。（小林 記）

## 眼 科 学

眼科学教室の近況をご報告いたします。2020年11月に森實祐基が教授に就任いたしました。当科准教授時代から網膜硝子体グループの臨床、研究を推進してこられました。新教授の下、教室員一同、臨床、研究に励んでいきたいと思っております。

主な学会等の発表や研究会の開催につきましては、2020年10月の第74回日本臨床眼科学会では森實が、11月の第59回日本網膜硝子体学会総会では森實、土居が、12月の第26回糖尿病眼学会総会では森實が発表を行いました。いずれもオンライン形式での発表となりましたが、臨床や研究に関わる有益な情報や新知見が得られたかと存じます。

新型コロナウイルス感染症に関連した病床配置の変更に伴い、2021年1月から眼科の病棟が東5階から西5階へ移転することとなりました。新病棟への対応は特に混乱なく行えましたので、診療については引き続き網膜硝子体、緑内障、斜視、白内障などの手術を必要とする患者様のご紹介をお受けしております。また急患の受け入れも積極的に行っております。

最後になりましたが、患者様をご紹介くださる先生方、関連病院や診療所の先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。（塩出 記）

## 耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。

12月1日付けで安藤瑞生新教授が就任いたしました。東京大学附属病院より異動し、専門は頭頸部でがんゲノムを研究の主体としております。新教授をはじめ、医局員一丸となって精進してまいりますので今後とも同窓の諸先生がたのご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

また、10月6-7日開催（ハイブリット形式）の日本耳鼻咽喉科学会・学術講演会では多数の参加をいただき、盛況の内に終了することができました。皆様方には深く感謝申し上げます。

その他、学会発表もハイブリット形式で開催され、日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会、日本聴覚医学会、日本鼻科学会、日本耳科学会、日本めまい平衡医学会、小児耳鼻咽喉科学会、耳鼻咽喉科臨床学会などで医局員が現地ならびにWebにて多数の演題発表をいたしました。

人事関係では1月より森田慎也が四国がんセンターへ異動、2月に宮本翔太郎が香川県立中央病院へ異動いたしました。

臨床面ではCOVID-19により手術の中止や外来予約の制限などの影響もありますが、少しずつ通常の状態へ戻っております。

（片岡 記）

## 放射線医学・放射線部

令和2年9月～令和3年3月における当教室の活動と現況についてご報告致します。

17年間にわたって教室を主宰してきた金澤 右教授は、令和3年3月末日をもって定年退官を迎えました。去る2月19日には最終講義が行われ、多数の教職員・学生の皆様にご聴講頂きました。教室としては過渡期にありますが、診療、研究、教育に滞りをきたすことのないよう、医局員一丸となって精進しております。

依然としてコロナ禍の収束が見通せず、様々な場面で平時とは異なる対応が求められる状況が続いておりますが、幸い当教室においてはオンラインでの各種カンファレンスやレクチャーの開催など「新しい日常」における業務形態も定着し、質を落とすことなく各種活動が継続できております。

令和2年8月には日本医学放射線学会認定専門医試験が行われ、当教室の受験者は見事全員合格し、大川、大野、北山、左村、渡邊の5名が放射線科専門医、岡本、馬越の2名が放射線診断専門医、杉山、田邊、久住の3名が放射線治療専門医を取得いたしました。

教室関連のイベントとして、令和2年10月に研修医画像セミナーを開催致しました。初のWeb開催でしたが、初期研修医の先生方を中心として約60名のご参加があり、ご好評を頂きました。

学術面では、いずれもWeb開催となった第56回日本医学放射線学会秋季臨床大会、第33回日本放射線腫瘍学会、第106回北米放射線学会(RSNA)など、主要な関連学会にて教室・関連病院から多数の優れた演題発表がなされました。RSNAでは宇賀助教の発表演題がCertificate of Merit Awardを見事受賞いたしました。

また、昨年開始となったCTガイド下針穿刺ロボットの医師主導治験が順調に進行している他、2件の新たな特定臨床研究も立ち上がり、引き続き活発な研究活動が行われております。

以上、簡単ではございますが教室の近況をご報告させて頂きました。同門・同窓の諸先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(松井 記)

## 産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育に日々励んでおります。昨秋から日本産科婦人科内視鏡学会、日本婦人科腫瘍学会などの学会・研究会に教室から多数の演題を発表(Web)いたしました。引き続き「チーム岡大」として、同門が一丸となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に務めて参ります。

続いて人事の御報告ですが、10月には岡山赤十字病院の佐藤麻夕子が津山中央病院に、福山市民病院の高原悦子が中国中央病院に異動。大学病院で研修をしていた大石恵一が広島市立市民病院に、大前彩乃が姫路聖マリア病院に、川口優里香が中国中央病院に、杉原花子が岡山済生会病院に、中藤光里が福山医

療センターに、谷 佳紀が香川県立中央病院に異動。後期研修2年目の大羽 輝が岩国医療センターに、白河信介が福山医療センターに、岡本遼太が岡山医療センターに、中村一仁が福山市民病院に、兼森雅敏が三豊総合病院に異動。川西貴之が帰局されました。後期研修3年目の姫路聖マリア病院の入江恭平、福山医療センターの有澤理美、香川県立中央病院の三苫智裕、岡山済生会病院の許 春花が帰局し、研修の仕上げに入りました。さらに大学病院勤務の大平安希子、道満佳衣が10月から、三豊総合病院の藤原晴菜、岡山済生会病院の假谷奈生子が11月から産休に入りました。なお2月時点の教室内役職は、医局長中村圭一郎、外来医長 鎌田泰彦、婦人科病棟医長 小川千加子、周産母子センター産科部門長 早田 桂、教育医長 衛藤英里子の体制となっております。

産婦人科医不足は本学の関連病院におきましても喫緊の課題です。同門のベテランの先生方には、定年後も嘱託医や非常勤医師という形で現役を続行いただき、厚く御礼申し上げます。現況において「分娩施設の集約化」が必要であることは自明の理ですが、各病院の思惑もあり簡単には進まないのが現況です。「産婦人科医の働き方改革」の一環として、あるいは「少子化対策」の視点からも、その実現には行政からの強い働きかけが不可欠かと思っております。

今後とも同窓の先生方の御指導ならびに御支援の程よろしくお願い申し上げます。

(中村 記)

## 麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

2020年度は4月に武田吉正先生が東邦大学 麻酔科学講座の第4代教授に、大江克憲先生が昭和大学医学部 麻酔科学講座の第5代教授にご就任されました。教室員ならびに同門会員ともども、両先生の今後のご活躍を願っております。しかしながら昨年度は明るいニュースばかりではなく、年度を通じてやはりコロナウイルス感染症に大きく影響を受けました。院内では例年の手術件数(約10000件)、麻酔科管理症例数(約7000件)、術後のICU入室数(約1800件)をいずれも下回り、院外での活動もまた大きな制約を受けました。

そのような厳しい状況でも、その他の院内で担うべき活動は有り難くも増えております。病院機能評価の結果に伴い新たに鎮静WG、Rapid Response System (RRS) WGが立ち上がりました。今後とも麻酔科がお役に立てるべく取り組んで参りたいと存じます。

教室人事として、12月、1月、2月の小刻みな異動に引き続き、4月からの新年度にはさらに多くの人事異動を控えております。後期研修開始となるレジデント6人、オーストラリア留学から帰国した岡崎信樹、岡原修二、木村聡の3人が新たに加わります。

学生教育では、コロナの影響でエアロゾル発生の高リスクの高い手技は実習できず、清潔操作にも制限を設けざるを得ない状況で残念な状況です。オンラインやビデオ教材で質を落とさず状況に対応したシステムを確立中です。

研究におきましては、川瀬宏和、日笠友起子、礪山智史の3人が学位を取得致しました。4月からは大学院に2人を新たに

迎え入れる予定です。

いまだ社会情勢の先が見えず、コロナ患者数次第という不確定要素を考えながら手術制限、ICU入室制限などの措置を余儀なくされ、各臨床科の皆様にはご不便をおかけしております。ペインクリニック外来は2月19日に移転致しますので引き続きよろしくお願い致します。今後も各診療科の先生方をはじめ、看護師、コメディカルスタッフの皆様のご理解、ご協力を宜しくお願い申し上げます。(清水 記)

## 脳神経外科学

感染性コロナウイルス蔓延という未曾有の社会情勢の中、令和2年10月15日(木)～17日(土)に伊達勲教授主催で日本脳神経外科学会 第79回学術総会を開催致しました。現地開催+Web併催という新しい開催様式を導入することにより計6650名の先生方にご参加頂き成功裏に終えることができました。ご支援下さいました先生方に改めて御礼申し上げます。令和2年8月20日に当教室の初代教授でいらっしゃいます西本詮先生がご逝去されました。西本詮先生は教室の創設だけでなく本邦の脳神経外科の発展に大きな貢献をされました。謹んでご冥福をお祈り致します。

人事関連では、まず新入局者ですが、西条智也先生(岡山市市民病院勤務)、毛利友輔先生(岡山赤十字病院勤務)、小橋藍子先生(岡山大学病院勤務)、神浦真光先生(津山中央病院勤務)、泉原康平先生(津山中央病院勤務)、牟礼英生先生(倉敷平成病院勤務)、知念将志先生(新小文字病院勤務)が入局されました。異動・昇任につきましては令和2年8月から令和3年1月の間について記します。令和2年9月には島津洋介先生が岡山大学病院から岡山旭東病院勤務、石田穰治先生がカナダThe Hospital for sick childrenから帰国後、岡山大学病院勤務、岡崎三保子先生が岡山赤十字病院を退職しました。令和2年10月には大西学先生が川崎医科大学総合医療センターから岡山西大寺病院勤務、竹内勇人先生が福山市市民病院から岡山赤十字病院勤務、永瀬喬之先生が岡山市立市民病院から岡山大学病院勤務、駿河和城先生が岡山大学病院から岡山市立市民病院勤務となりました。令和2年11月には清水俊彦先生が米国テキサス大学から帰国後、松山市市民病院勤務、外間まどか先生が岡山大学病院から津山中央病院勤務となりました。令和2年12月には松本悠司先生が米国アメリカ国立衛生研究所から帰国後、岡山医療センター勤務、大谷理浩先生が米国テキサス大学から帰国後、岡山大学病院勤務となりました。令和3年1月には高橋悠先生が岡山大学病院から香川県立中央病院勤務、馬越通有先生が岡山大学病院から香川労災病院勤務、畝田篤仁先生、村井智先生、富田陽介先生が大学研究室から岡山大学病院勤務となりました。

教室の役職は、医局長は菱川朋人が、外来医長は亀田雅博が、病棟医長は藤井謙太郎が、教育医長・教育企画委員は佐々木達也が務めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(菱川 記)

## 総合内科学

大塚文男教授は、令和3年も引き続き「全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立」に取り組み、総務・運営企画担当の副病院長として、本院全体の改善・改革に尽力しています。

教室の動きです。臨床面では、引き続き長谷川病棟医長・小比賀外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の蔓延に伴い本来の総合内科としての入院患者が減少傾向ではありますが、多領域にまたがる難治例の診療を続けています。令和3年1月からは他科に先駆けてポリファーマシー改善活動を開始し、適切な薬剤調整をすべく入院症例を対象に定期的な多職種カンファレンスを行っています。並行して、今後も院内におけるCOVID-19患者の診療および感染対策の中心的役割を担っていく予定です。外来は、徳増助教を中心とした「不明熱外来」、植田教授を中心とした「漢方臨床教育センター」、片岡教授を中心とした「女性ヘルスケア外来(内科)」に加えて、令和2年9月より萩谷准教授による「渡航ワクチン外来」を開設しました。新型コロナウイルス感染症の流行により海外渡航が制限されている現状ではありますが、グローバルズの再開を視野に安全な海外渡航ができるようなサポートを目指しています。この間、長谷川医師(日本内分泌学会・日本高血圧学会)、安田医師(日本内分泌学会・日本糖尿病学会)が専門医を取得しました。今後も地域医療現場の先生方・患者さまのニーズに応えるべく、大学病院の特徴と強みを活かした外来診療を発信して参ります。

教育面です。教育医長の谷山講師のもと、教育企画委員の徳増助教を中心に指導を行っています。特筆すべきは、2020年7月に医学科4年次生を対象に新規開講した総合診療医学で、これにより社会的ニーズが年々高まる総合診療領域について、臨床実習前に体系的に学ぶ機会を設けることができました。コロナ禍で十分な教育活動を行うのが難しい現状ですが、レクチャー、PBLや症例発表のオンライン化を行い、ウェブ教育を充実化させることで対応しています。萩谷准教授はCMA-Okayama(岡山医療連携推進協議会)後援のもと、毎月の感染症レクチャーを継続的に行っています。専門医制度関連では、当科では内科専攻医9名、総合診療専攻医3名が、大学病院および連携施設で研修を行っており、後期研修向けのオンライン勉強会も開催しています。

研究面です。リサーチ/ケースレポート・カンファレンスは引き続き定期開催し、大学院生の学位論文取得・英語論文執筆を目標に若手を中心に積極的に活動しています。この期間、COVID-19の蔓延による社会活動の自粛により学会活動は軒並み延期・中止となりましたが、第21回日本内分泌中国支部学術集会(9月:中野助教YIA受賞)、第21回日本病院総合診療医学会(9月:長谷川講師・会長賞受賞;岡助教・助成金受賞;萩谷准教授・アブサラハート賞受賞)、第63回日本糖尿病学会年次学術集会(10月)、第58回日本糖尿病学会中国四国地方会(10月)、第7回日本糖尿病医療学会(10月)、第123回内科学会中国地方会(10月)、第73回日本胸部外科学会定期学術集会(10

## 心臓血管外科学

2020年9月から2021年3月の教室の動きをご報告いたします。

2017年に笠原真悟医師が第3代教授に就任し、この8月で3年になりました。連携各科のご協力により、手術数は先代に比べても遜色なく、むしろ年々増加しております。これには、当科の特色である小児心臓手術だけでなく、成人心臓手術部門の強化も寄与していると考えております。人事面では、末澤孝徳医師が2021年1月より福山市民病院心臓血管外科部長として赴任しました。末澤医師は、当院において経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)の立ち上げの中心的役割を果たして頂き、成人心臓部門の診療を牽引してもらいました。福山市民病院でのさらなるご活躍を祈っております。また、藤井泰宏医師が2021年1月からAMEDに出向致しました。藤井医師はこれまでに多くの研究の中心的役割を果たしており、AMEDにおいてもさらにその能力を発揮してくれると考えております。末澤医師の異動により、2021年1月より黒子洋介医師が講師に昇任、また小林純子医師が助教に昇任しました。

臨床面では、小児部門は笠原真悟教授をはじめとして、黒子洋介医師、川畑拓也医師、小林純子医師、小谷恭弘の4名のスタッフで診療を行っています。廣田真規医師が担当する成人心臓手術領域では、昨年度に導入したTAVIは循環器内科のご協力も得て順調に症例数を蓄積しており、今後も大学病院として、低侵襲手術などの先進医療の増加を図りたいと考えています。現在、血管部門は藤井医師の異動に伴い、廣田医師が中心となり医員と共に診療を行っています。引き続き関係各科の皆様にはご協力のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、今年度は新たに5件の科研費を獲得し、6人の大学院生が積極的に活動をしています。他大学からの研究生も受け入れ、大学の垣根をこえた研究協力にも力を注いでいます。心臓移植の研究を行った門脇幸子医師、小林泰幸医師が2021年3月に大学院を卒業見込みであります。

現在、教室からは6人が海外で活躍しております。甲元拓志医師はMedical College of Wisconsin、本浄修己医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoで、また大崎悟医師は、University of Madisonでスタッフとして活躍されています。また、奥山倫弘医師はUniversity of Kentuckyで、佐野俊和医師はUCSFで、門脇幸子医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoでリサーチフェローとして勉強中であります。

教室としての国際貢献としてはJICA草の根パートナー型技術交流のプロジェクトが2020年12月で終了しました。プロジェクトマネージャーの小谷恭弘が中心となり、ベトナムからの研修の受け入れ、現地での指導を定期的に行いながら、ベトナムでの自立的高度医療の確立に向けた支援に取り組んでいました。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響により活動に制限を来したため一旦終了とし、今後の再開にむけてカウンターパートナーと連携を取っています。

今後も教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますよ

月)、第31回間脳下垂体副腎研究会(11月)、第30回臨床内分泌代謝Update(11月)、第16回日本疲労学会総会・学術集会(11月)、第28回日本消化器関連学会週間(11月)、第125回日本消化器内視鏡学会中国支部例会(12月)、第33回日本総合病院精神医学会総会(12月)、第25回日本生殖内分泌学会(12月)、第26回日本ヘリコバクター学会学術総会(1月)、第16回若手医師のための家庭医療学冬期セミナー(2月)、第87回岡山内分泌同好会(2月)、第31回日本間脳下垂体腫瘍学会(2月)、第22回日本病院総合診療学会学術集会(2月)、第28回日本ステロイドホルモン学会学術集会(2月:優秀演題候補2演題:副島pre ART生・山本医員)と多くの学会・研究会で学術発表を継続しています。受賞状況として、片岡教授・三好准教授・小比賀講師が医学部長特別表彰、本多助教が病院長賞「楳の木賞」(岡大病院“Face”活性化ミーティング)を受賞しました。また徳増助教(岡山医学振興会2020年度第20回教育助成、上廣倫理財団2020年度研究者公募助成)、萩谷准教授(寺岡記念育英会研究活動費助成・両備聖園記念財団研究助成)、大塚教授(ファイザー公募型医学教育プロジェクト助成)が各種助成金を獲得しています。灘隆宏医師が学位(医学博士)を取得しました。

人事面では、この期間における大きな異動はありませんでした。10月には植田教授・小川・片岡教授の祝賀会を新しい生活様式の中、ハイブリッド形式で行いました。

引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域・社会に貢献できる内科医・総合診療医育成を目指してまいります。今後とも、御指導・御鞭撻の程よろしく願いいたします。(萩谷 記)

## 循環器内科学

伊藤浩教授は臨床・教育・研究および学会活動を精力的に行っており、相変わらず多忙な毎日を過ごしております。

人事ですが、令和2年9月から岩野貴之が福山市民病院へ赴任致しました。新天地での活躍を期待しております。

学会・研究活動ですが、第31回日本心血管画像動態学会が伊藤教授を会長として開催されました。コロナ禍のため完全Webでの開催になりましたが、多くの先生方にご協力いただき感謝申し上げます。国際学会ではアメリカ心臓病協会や欧州心臓病学会で、関連病院含め多数の演題を発表しました。また日本の学会でも多くの演題発表をしています。第31回日本心血管画像動態学会で市川啓之がYIA最優秀賞を受賞しました。第21回日本成人先天性心疾患学会で中山理絵がYIAを受賞しました。第117回日本循環器学会中国地方会で網岡尚史がYIAを受賞しました。

最後に教室の実務ですが、医局長に吉田賢司、新病棟医長に赤木達、外来医長に三好亨、教育医長に戸田洋伸の体制で執り行っております。今後も、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。(吉田 記)

うお願い申し上げます。

(小谷 記)

## 脳神経内科学

阿部康二教授は、世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野でのさらなる発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。さらに、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動において中心的役割を果たしています。まず特筆すべきこととして2020年8月31日-9月2日に岡山コンベンションセンターで第61回日本神経学会学術大会を開催させて頂きました。岡山での開催は丁度50年ぶりということで中国四国地方全体として国内ならびに世界中の脳神経内科医を岡山に迎えるべく様々な企画を準備しました。しかしながら2020年新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大の影響に直撃され、真夏時期への延期開催となり、また会期も当初4日間の予定だったものを3日間に短縮せざるを得ませんでした。このような厳しい条件下での開催ではありましたが、コロナ感染対策を入念に行い現地+WEB併用のハイブリッド形式を導入することで会期中ならびにその後3週間にわたる期間中1人の感染者を出すことなく行うことが出来ました。今回は合計1,646演題、実参加者数805名、WEB参加者数5,507名と多くの参加者が意見交換や議論を通じてお互いの連携を深めることができ、盛況の内に終えることができました。

人事面に関しては、特筆すべきは太田康之講師が山形大学神経内科教授に栄転となり、2020年4月より山形大学に赴任いたしました。また7月よりカナダのトロント大学から森原隆太が助教として帰局しました。11月より山下徹講師が准教授に就任しました。また中国河南省から胡欣冉、中国黒龍江から孫洪銘が研究チームに加わり研究を開始しました。転出者としては、9月より菱川望が倉敷平成病院へ異動しました。スタッフ業務については、今年1月より医局長と教育医長には森原隆太が、表芳夫助教が病棟医長、武本麻美助教が外来医長をそれぞれ担当しています。

臨床面では、このコロナ禍にも関わらず病棟診療においては年間入院患者数400名を超え、様々な神経内科疾患の診療を担当しています。一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査の開発や治療研究などを基礎研究と並行して推進しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法に加え、Muse細胞静脈投与治療の治験を新たに開始するなど新しい治療法開発に積極的に取り組んでいます。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。今後もALSや脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では脳虚血グループ、変性疾患/認知症グループ共に多くの論文が出版され、国内・海外での学会発表も活発に行わ

れました。特に2020年9月に岡山大学神経内科と東北大学の共同研究で、新しい幹細胞であるMuse細胞静注投与することでALSモデルマウスの治療効果を見出したことを発表し、国内外から大変注目を集めています。基礎研究で得られた知見に基づいて現在ALS患者に向けた治験が現在進行中です。今後とも何卒宜しくお願いいたします。(森原 記)

## 救命救急・災害医学

救命救急・災害医学講座は現在、中尾篤典教授のもと岡山県内だけでなく中四国救急医療の最後の砦として、多発外傷、広範囲熱傷、心肺停止、重症小児、敗血症など最重症救急患者の診療にあたっています。岡山県内のCOVID-19の重症患者に関しては、各科の先生方、看護師をはじめとしたメディカルスタッフ、各病院のご協力を仰ぎながら、日々対応をさせていただいております。また、軽症・無症状者向け宿泊療養施設でのオンライン診療を行っており、地域の病院の負担減と感染者の安全を両立するため邁進しております。

研究では、昨年度に引き続き、学会の開催もweb開催や中止となっていますが、救急医療に貢献すべく活動を行って行く予定です。また多くの英文雑誌に論文を投稿することもできており、診療のみならず学術面にも注力しております。基礎研究でも、水素を中心とした医療ガスの研究を進めており、さらなる成果を上げるべく邁進していきます。

学生教育では、近年は高い評価を頂いております。小児から成人まで救急医療のみならず、終末期医療、ACPなどについて関心を持ってもらえるような内容となっております。また災害の講義や救急車同乗実習、シミュレーター実習、学生への指導など、自ら考え行動できるような形での実習を組み込む工夫をしています。新型コロナウイルスの影響で学生の実習も患者との接触が減っていますが、VRなどを利用することで臨場感を持った経験ができないか検討も行っています。

より良い救急医療は院内のみならず、地域の医療機関との連携が不可欠であり、皆様方の御協力無しでは成り立ちません。急な診療依頼、転科や転院の依頼など御迷惑をお掛けすることも多々あるかと存じますが、引き続き御指導、御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。さらには地域への貢献、また国際的にも評価される研究成果を発信できるよう努力していく所存です。(小崎 記)

## 形成再建外科学

2021年1月までの当科の活動状況を報告させていただきます。他の部門と同様にコロナウイルス感染症の蔓延に伴い、日々の診療や学会活動、国際貢献など様々な活動が制限される時期となりました。このような状況下におきまして、感染に留意しながらの診療やオンラインを通じた学会参加、発表など可能な範囲での医療・情報発信を行ってまいりました。

人事面では、2020年4月より平塚共済病院・整形外科より仲拓磨先生が1年間、マイクロサージャリーのトレーニング及び四肢再建外科を中心に勉強にこられており、非常に熱心に臨床

に取り組まれております。また、来年度は慶応義塾大学病院・形成外科より、渡部紫秀先生がジェンダー診療を学びに来る予定となっております。

臨床面ではリンパ浮腫、ジェンダー、四肢・頭頸部・乳房再建、小児診療を中心に、各分野引き続き力を入れて専門性の高い診療に従事しております。

学生教育における新たな試みとしては、昨今力を入れているデッサン教室に加え、県立美術館における学外実習を取り入れることで、医療における芸術の重要性を伝えることに力を入れております。

研究面においては、臨床解剖に基づいたリンパ浮腫に対する検査・治療法の開発を初めとして、軟骨や脂肪組織に対する再生医療といった形成外科ならではの分野にも徐々にではありますが、力を入れているところです。

来年度は当教室主催で、日本リンパ学会総会、Craniosynostosis研究会の開催を予定しており、感染症が蔓延している状況下でも、参加者により実りのある学会になるように準備を進めております。また、当教室内において多くの人事異動が予定されており、様々な状況変化の対応にも追われる年になるでしょうが、より良い形成外科診療を目指して、引き続き精進してまいります。今後とも変わらぬご指導ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。(駒越 記)

## 老年医学

老年医学分野の令和2年8月以降の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(JAEA)および岡山大学大学院保健学研究科との共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19(2007)年度から継続しています。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証(岡山大学成果)及び解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム(JAEA成果)を双方の成果として得ることを目的としています。令和2(2020)年度、学会・研究会(第45回中国地区放射線影響研究会、日本原子力学会2020年秋の大会、第73回日本酸化ストレス学会学術集會、日本放射線影響学会第63回大会、日本原子力学会中国・四国支部第14回研究発表会、The 20th Biennial Meeting for the Society for Free Radical Research International(SFRRI 2021))でその成果を発表いたしました。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目的として平成29年度より開講した大学院博士課程選択プログラム「臨床老年医学特論」も5年目を迎えました。学部、大学院での講義を通じて老年医学の教育を行っております。

新型コロナウイルスの感染拡大は、研究、教育、診療に影響をきたしていますが、ITツールなどを駆使しながら、少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。(光延 記)

## 臨床遺伝子医療学

腫瘍制御学講座 臨床遺伝子医療学分野の2020年度下半期の活動報告をさせていただきます。

臨床遺伝子診療科外来開設後一貫して、遺伝カウンセリング外来、がんゲノム医療外来とも、院内外から頂く御紹介件数は増加し、多くの診療科、部門の皆様と協働しながら、着実に診療の実績を積んでいます。とりわけ今年度は、遺伝性乳癌卵巣癌症候群(HBOC)診療の一部保険収載化とPARP阻害薬の保険適用拡大もあり、遺伝情報にもとづく臓器横断的癌診療がより一般化してきた特筆すべき年となりました。整備された臨床遺伝子診療科専用診察室とともに複数の診療科や部門の皆様との連携を強化し、常に患者さん・クライアントサイドに立った病院丸での遺伝医療の推進に向けた体制構築と日々の診療を行っています。

研究面では、多施設共同研究の中央西日本遺伝性腫瘍コホート研究を代表施設として進めているほか、一万人がんゲノムデータベースを構築する研究など各種データベースへの登録事業への参画などを行っています。中央西日本遺伝性腫瘍コホート研究では、院内の複数の診療科や部門の皆様の参画を頂き、より地域に根ざした遺伝性腫瘍発症関連因子の新たなエビデンス発信に向けて尽力しています。

人事面では、四国がんセンターから赴任の坂井美佳が2021年1月より同センターに帰還しましたが、引き続き客員研究員として活動を継続しています。

教育面では、医学科学生の必修科目「ゲノム医療」の担当や、「プロフェッショナルリズム・行動科学Ⅱ・Ⅲ」の授業分担を頂き、医学生への貴重な情報発信の機会を今年度より頂きました。

ゲノム医療の臨床実装や研究では、職種・診療科・部門横断的な取り組みが必須であり、多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力を頂いております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。(山本 記)

## 薬剤部

人事関係では、9月30日付で三好弘子薬剤師、12月31日付で人工知能応用メディカルイノベーション創造部門の山路和彦助教、1月31日付で鬼無悠薬師、西川由美事務補佐員、3月31日付で千堂年昭教授が定年退職、小川敦薬師、錦織淳美薬師が退職となった。

業務関係ではCOVID-19感染拡大に伴い、治験業務を含め大きな影響が出ているが、部員一同感染防止に努め、適宜対応している。地域連携の推進のため、がん治療における保険薬局との連携活動も積極的に行い、10月1日より連携充実加算の算定も開始した。また地域保険薬局薬剤師の研修施設としても認可され、来年度より2名の保険薬局薬剤師の研修を受け入れる予定となっている。

学会活動として、第30回日本医療薬学会年会、第20回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2020、第59回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会等にお

いて業務成果および研究成果の発表を行った。第20回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2020では宮本理史薬剤師が最優秀演題賞を受賞した。また第14回次世代を担う若手のための医療薬科学シンポジウムを人工知能応用メディカルイノベーション創造部門の神崎浩孝准教授が主催し、千堂教授が特別講演を行った。

学術論文として、2020年は英文原著論文に11報、和文原著5報の研究成果を発表した。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習が再開され、令和2年度第Ⅲ期(8月24日～11月8日)16名(岡山大学薬学部)、第Ⅳ期(11月24日～2月14日)14名(岡山大学10名、京都薬科大学1名、大阪薬科大学1名、神戸薬科大学2名)を受け入れた。(鍛冶園 記)

## 自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

昨年度末からの新型コロナウイルス感染拡大により、施設の閉室、新規教育訓練や放射線業務従事者向け健康診断の延期等を余儀なくされ、学内外における放射線利用に不便が生じました。第一波の収束により6月より施設を開室し、教育訓練等も実施することができ、放射線利用を再開しております。放射線施設は学内共同利用であり、互いに知らない多数の利用者が同時に利用する場です。皆様におかれましては感染防止対策を宜しくお願いします。また、学外からの来訪者に関しては入館時に問診票の提出をお願いしております。

教育訓練に関しては、本年2月15・16日に第5回新規教育訓練を対面で実施しました(受講生22名)。来年度向けの再教育訓練は昨年度同様、moodleを使ったりリモートで行います。今年度向けの再教育訓練サイトは2月末日で閉鎖し、3月からは来年度向けのものに更新します。来年度の放射線業務従事者更新をされる方は3月からの新しい再教育訓練を受講して下さい。

今期の人事に関しては、施設長の寺東が8月より中性子医療研究センター兼任となり、施設研究室として花房准教授とともに本学のホウ素中性子捕捉療法(Boron Neutron Capture Therapy: BNCT)の研究開発により一層協力することになりました。1月には放射線シミュレーション研究の第一人者である量子科学技術研究開発機構の佐藤達彦先生にレクチャーをして頂きました。また、指導教員の異動により、この1年施設研究室で研究を行っていた医歯薬学総合研究科修士課程の瀧川真帆さんが無事修了されました。当研究室では粒子線照射で生じる変異の解析をやって頂き、中国地区放射線影響研究会と日本環境変異原学会で学会発表も行いました。

最後に、来年度は津島地区のRI施設が全面改修を予定しています。1年間の閉室期間中鹿田施設での利用が増えることと思います。皆様のご協力をお願い致します。(寺東 記)

## 動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、飼育設備として感染実験区域の個別換気ケージシステムを増設した。施設整備としては、4階

マウス飼育区域の排気設備に光触媒脱臭装置を設置し、感染実験区域においては高圧蒸気滅菌器を更新した。

施設の教育活動では、令和2年10月から11月にかけて初心者向けマウス/ラット実技講習会の定期講習会を開催し、計41名の学内研究者の参加があった。12月には同講習会の臨時個別講習会の申し込みがあり2名の受講があった。なお、同講習会のフォローアップとして、過去の受講者より申し込みがあった場合、手技の確認・指導を行っている。1月に、以前開催した臨時個別講習会受講者2名より申し込みがあったため、手技フォローアップを行った。また、国立大学動物実験施設協議会による中型動物(ウサギ・イヌ・ブタ)の実験手技動画資料の制作企画において、令和2年12月に当施設にて撮影を実施した。

令和元年度に空調機器改修工事を実施した津島南施設については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による消耗品の不足のため、施設の部分再稼働にとどまっていたが、3月より全面再稼働となった。(平山 記)

## 卒後臨床研修センター 医科研修部門

医科研修部門長豊岡教授の良医育成のスローガンのもと卒後臨床研修センターでは、各診療科の先生方、協力型病院・施設の先生方のご協力頂き、新型コロナ禍でも研修医に普段と変わらない研修の場を提供出来ております。この場を借りて御礼申し上げます。

2021年度マッチ結果としては、先進・小児科・産婦人科特別プログラム42名の定員で、41名がマッチしました。これも一重に、たすき掛け選択など魅力あるプログラムにご協力頂いております関係方のお陰と感謝しております。

各学会では、例年とは違いWeb開催が多くありましたが、その中でも市川健研修医が第123回日本内科学会中国地方会で若手奨励賞を、久松加寿也研修医が第75回日本消化器外科学会学術総会で優秀演題賞を、受賞しました。その他多くの研修医が学会発表の機会を頂きました。ご指導頂きました先生方には重ねて御礼申し上げます。

また、10月24日～25日には新型コロナウイルス感染対策を講じた上で、佐藤副部門長を中心に卒後臨床研修指導医講習会を開催致しました。23名の指導医の先生方にご参加頂き、医師としての知識・技量の他、高い倫理を備えた人としても成長できる、より良い臨床研修を考える2日間になりました。この講習会はオンラインでは得難い討論や体験型学習がありますので、2021年度も感染対策を講じて行いたいと考えております。

研修医のメンタルヘルスは、植田副部門長が一手に引き受けサポートしています。

人事面では、4月より、大川(旧姓:小河)七子助教が副部門長となりました。

ここ数年フルマッチに近い状態を維持しております。オンラインでのアピールが重要になりますので、当院の魅力をさらに伝える方法として現在プロモーションビデオを作成しております、完成の暁には是非ご覧ください。

若手医師がアカデミックに活躍し、切磋琢磨しながら成長することができるのは、日ごろから熱心にご指導頂き、教育の重

要性を肌で感じ取る環境で育ってきた賜物と思います。各診療科の先生方、協力型病院・施設の先生方、今後とも研修医のご指導をよろしくお願いいたします。(矢野 記)

## 先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に開講し、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行う目的として、開講から11年目となります。スタッフは、森田(教授)、西井(准教授)で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。研究では、重症不整脈、心臓突然死、心臓植込型デバイスやその遠隔モニタリングに関連した研究を行っています。多施設研究として、岡大関連病院に参加していただき、共同研究やデバイス、不整脈の新たな研究も進めています。デバイス植込症例の増加とともに、日々の解析データが膨大となり、時間を要するようになっており、本学の先生とも協力し、AIを用いた自動解析を利用し、異常をより効率よく見いだす方法について検討を始めました。国内外の学会は、今年はCOVID-19の影響で延期、中止が相次ぎましたが、日本循環器学会、植込みデバイス関連冬期大会などのオンライン学会や研究会などで積極的に発表・討論を行っています。心臓植込デバイスの遠隔モニタリングは日常臨床でも活用し、デバイス障害、重症不整脈発生、心不全早期発見に役立っています。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の宮本先生、浅田先生、水野先生、増田先生、西本先生や小児科の栄徳先生など多くの先生方、メディカルスタッフの方々にもご協力頂いており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後も臨床研究を進め、世界に向けエビデンスの発信を続けていく予定です。COVID-19の流行が早期にコントロールされ、臨床・研究などで多くの方々や直接ディスカッションし、協力できる日が来ることを祈念しております。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。(森田 記)

## 地域医療人材育成講座

本講座は平成22年の設立より、地域医療を担う人材を育成するという使命のため、地域医療教育および地域医療連携に継続して取り組んでいます。

本講座では低学年から医学教育と地域医療教育を行っています。新型コロナウイルスの影響を受け延期となっていた2年生1期実習は、8月末～9月に時期を変更し3年生1期実習として、3年2期実習も予定通り9月末に行うことができました。全て岡山県内の実習施設へと変更しての実施となりました。また、1年生早期地域医療体験実習も予定通り9月に実施し、地域枠学生(7名:必修)に加え、多数の一般枠学生から応募があり、合計44名が実習を行いました。令和2年4月入学時から自宅学習のオンライン講義が続き、実践での学習の意欲が高まったためと思われます。また、11月には1年生実習参加者主催による「地域医療シンポジウム」をオンラインにて開催しました。オンライン開催は初めての取り組みでしたが、これまで医学科講義の一環で平日開催のためご参加いただけなかった指

導医・スタッフの皆様もご参りいただくことが可能になり、例年以上に学生の発表を知っていただく機会となりました。また、シンポジウムに引続き、第6回指導医講習会を開催し、地域実習指導医の先生方と意見交換を行いました。このような状況の中でも学生実習を引き受け、御指導くださいました先生方、スタッフの皆様方に厚く御礼申し上げます。皆様方の期待、信頼に応えるべく、しっかりした倫理感を持って実習に臨めるよう指導を行ってまいりますので、引き続きご指導のほど、よろしくお願い致します。

1期生の地域枠卒業医師3名が後期配置として、初期臨床研修終了後5名が前期配置として令和3年4月から新たに地域勤務を開始するため、岡山県地域医療支援センター、岡山県医療推進課と連携し、合同説明会を10月に開催し、地域枠卒業医師の配置候補病院とのマッチングが行われました。

今後も地域医療を担う医師の育成とより良い地域医療の推進に努力を重ねて参りますので、引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。(小川 記)

## CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011(平成23)年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、2016(平成28)年11月から3年間の設置、さらに2019(令和1)年11月からもう3年の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病(CKD)重症化や心血管疾患(CVD)合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁教授(腎臓内科)と吉田賢司講師(循環器内科)より構成されています。

内田は引き続き、NPO法人日本腎臓病協会(JKA)の副幹事長、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。また厚生労働行政推進調査事業の「腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病(CKD)に対する地域における診療連携体制構築の推進に資する研究」研究班の研究分担員として、日本全国における今後のCKD対策に努めています。吉田は循環器内科の医局長3年目として多忙を極めております。

岡山県内各地で様々に活動を行う予定でしたが、COVID19のため引き続き自粛あるいは形式を変更して行っています。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク(OCKD-NET)セミナーを2021年3月にWeb開催となりました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市、美作市、矢掛町、笠岡市、井原市、新見市などとのCKD対策事業を援助しています。

研究活動ですが、これまで実施してきました臨床研究としましてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究(Kakusyo 3C study)が、2021年3月までで観察期間を無事終了となりました。これまで長期間にわたるご協力をありがとうございました。今後データを解析し情報を発信していく予定です。

す。基礎研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。(内田 記)

## 小児急性疾患学講座

前任の池田政憲教授から2019年10月に業務を引き継がせていただきました、小児急性疾患学講座、准教授の鷲尾洋介と申します。現在は津下充講師と二人体制で業務を行なっております。若輩ではありますが、皆様のご指導を承りつつ活動させていただいております。

福山市から依頼を受けて小児救急医療体制の構築と、周産期医療体制の整備を行う目的で2013年から継続して活動を行なっております。周辺病院や岡山大学の皆様方の多大なご協力のもとに小児救急医療体制に関しては2020年10月から福山市民病院で24時間365日、小児の2次救急体制を確立することができました。現在運用を継続しており、急性疾患学講座からは月に4回の市民病院での救急当直サポートを継続しております。今後は広島県から小児救急医療拠点病院の指定をいただく形になると考えております。また、周産期医療体制に関しては福山地区での新生児医療体制を継続可能な形で確立していくことを目的に福山市民病院での将来的な高次NICU開設へ向けて調整を行なっております。来年度は福山市民病院での工事に関するロードマップの提示を含めて、人員の配置や図面の作成等の調整を福山市、市民病院と連携して行なっていく予定です。毎年継続して行なっている、市民への啓蒙活動としての公開講座に関して今年コロナ禍の影響でオンラインでの開催となりました。健診に関して、感染症対策に関しての2題を福山市のホームページ上で公開させていただきました。

来年度も救急医療体制の維持、周産期医療体制の確立のために尽力して参りますので、何卒よろしくようお願い申し上げます。(鷲尾 記)

## 救急外傷治療学講座

平成26年11月に開講した本講座は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院を母体とした寄付講座です。聖マリア病院は西日本有数の救急病院であり、内外因・成人小児問わず多くの患者を受け入れ地域医療に貢献しています。

現在、当講座は山田、山本の教室員2名と少数ではありますが、臨床・教育・研究に勤しんでおります。

臨床では、山田、山本共に高度救命救急センターのスタッフとして、中尾篤典救命救急センター長のもと、コロナ禍に屈する事なく、重症のCOVID-19重症例も含め多くの救急患者受け入れに努めております。山田講師は外傷診療と災害医療の専門性を、また山本助教は小児救急医療と集中治療の専門性を有しており、部署内、院内そして地域の信頼もあつく、最前線で活躍しております。

教育では、学生、研修医教育共に好評価を得られるようになり、加えて、コメディカルや救急救命士の教育にも盛んに取り組んでおります。2020年末には、初のMRIでの学生を受け入れ基礎実験の指導にも取り組みました。

研究面では、国内外の学会で積極的に発表し、論文数も着々と増え成果が出始めています。基礎研究では、医局研究室において、山田は水素・細胞を用いた研究を、山本は水素・ラットの小腸を用いた研究を行っています。

救急医療、外傷診療、災害医療、小児救急医療、集中治療と専門性を有した講座として、臨床・教育・研究へ邁進する所存です。皆様、今後とも、どうぞ御指導御鞭撻宜しく御願い申し上げます。(山田 記)

## 陽子線治療学講座

津山中央病院での陽子線治療は、平成28年4月28日に自由診療として開始、7月1日に先進医療適応となりました。岡山大学は津山中央病院と共同でがん陽子線治療センターを運用しており、大学病院では勝井、丸川、放射線医学講座の吉尾、渡邊、杉山が診療にあたっています。今後も各診療科・センターの専門家の先生方とご協力して最適な放射線治療を提供してまいります。

陽子線治療は令和2年4月時点で脳腫瘍、頭頸部癌、食道癌、原発性肺臓癌(縦隔腫瘍や気管癌を含む)、転移性肺臓癌、原発性・転移性肝臓癌、胆管癌、膵臓癌、前立腺癌、直腸癌術後局所再発、小児腫瘍等に対して行っています。陽子線治療の保険適応は診断時20歳未満の小児腫瘍(限局性の固形腫瘍)に始まり、平成30年4月に、頭頸部癌の一部(口腔・咽喉頭の扁平上皮癌を除く)、前立腺癌(限局性)、骨軟部腫瘍(手術不適応)に対して適応拡大されました。その他の対象疾患は先進医療で運用され、技術料として自費にて288.3万円(津山中央病院の場合)必要で、入院・薬剤・検査等は公的保険が適応されます。

陽子線治療の普及活動として、第8回瀬戸内乳がんチーム研修会(web開催)にて講演の機会をいただきました。コロナ禍の中、貴重な機会を頂きまして同窓の先生方、関係者の皆様にはこの場をお借りして深謝申し上げます。

陽子線治療を皆様には是非ご利用いただき、お役に立てればと考えておりますので、引き続きよろしくようお願い申し上げます。(勝井 記)

## 三朝地域医療支援寄付講座

2020年3月から2021年2月までの報告をさせていただきます。

人事では、1月から6月まで消化器・肝臓内科学教室の山崎泰史医師が、7月から12月まで、血液・腫瘍・呼吸器内科学教室より藤井昌学医師がそれぞれ半年間勤務しました。本年1月より腎・免疫・内分泌代謝内科学より野島一郎医師が赴任・診療にあたっています。

当講座は、三朝医療センターの診療を継続しながら、地域住民の健康意識向上にも取り組んでまいりましたが、本年度は新

型コロナ感染症流行もあり、規模の大きな市民公開講座などは行わず、三朝温泉病院院内での少人数での健康教室の開催のみ行いました。(芦田 記)

## 血液浄化療法人材育成システム開発学講座

本寄付講座は2016年1月に開講し、6年目に入りました。腎不全、特に血液透析を主体とする血液浄化療法に関する教育、研究等に力を入れております。腎臓病対策や腎不全・透析治療の更なる向上と地域連携による人材育成システムの開発を目的としております。

昨年9月に「岡山アクセスWebセミナー 2020：アクセスと心負荷」をオンラインで開催致しました。主として県内の透析関係医師・メディカルスタッフに参加頂き（視聴者115名）、教育講演は櫻間教文先生「動静脈内シャント造設可否判断の実際：BNP、EF、NYHA分類をどのように活用しているか」、特別講演は神應裕先生「VA過剰血流による心負荷と全身スチール」にお願いし、Webでアンケートを回収したところ内容・開催形式ともに大変好評の結果でした。本寄付講座の重要な取組の一つである「透析アクセス作製・管理医の育成」の活動について、SDGsの達成に向けた岡山大学の取組事例へ和文・英文で登録を行いました。

杉山は8月にシンポジウム「腎臓病総合レジストリー(J-RBR/J-KDR) 2019年次報告と経過報告」(第63回日本腎臓学会学術総会)、10月に「腎代替療法：血液透析・腹膜透析・腎移植」(第1回慢性腎臓病(CKD) オンライン研修会)、特別講演「Tissue is Issue! : ファブリー腎症の診断と治療」(Fabry Expert Meeting 2020)、特別講演「CKDに伴う高カリウム血症の治療：新たな展開」(府中地区医師会学術講演会)などWeb講演を行いました。分担執筆した腎臓関係5学会合同の「腎代替療法選択ガイド2020」が出版されました。

「岡山県国保ヘルスアップ支援事業(医療費等分析・CKD重症化予防)」を県からの委託で実施しており、3年目に入りました。岡山県CKD・CVD対策専門会議長を務め、8月からCKD重症化予防モデル事業(美作市・井原市・新見市・笠岡市)担当者とのWeb会議、10月に岡山県CKD・CVD対策専門会議をWeb開催致しました。「岡山県における透析患者数の分布と推移に関する調査(ODN survey)」を、岡山県医師会透析医部会(草野功会長)、CKD・CVD地域連携包括医療学講座、腎・免疫・内分泌代謝内科学と共同で行い、3年目の報告書を県内の自治体・保健所、透析施設に配布致しました。

研究面では、学振科研費・基盤研究(C)の研究代表者、厚労科研費・難治性疾患政策研究事業(難治性腎疾患、難治性血管炎)およびAMED研究費(腎疾患対策、難治性疾患実用化研究事業)の研究分担者を務めております。

今年1月に第2回慢性腎臓病(CKD) オンライン研修会、3月に慢性腎不全管理セミナー 2020を開催する予定です。今後も腎臓病・腎不全、血液浄化療法の研究、教育や診療を通じて人材育成に尽力して参ります。本講座は、岡山県医師会透析医部会を中心に透析関連施設よりご支援を頂いており、厚く御礼申し上げます。(杉山 記)

## 運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に対する治療法の研究・開発を行い、国内の運動器外傷に関する教育を牽引することを目的とした講座で開設5年が経過しました。スタッフは野田知之(教授)、中田英二(講師)の2名で活動中です。

コロナ禍の影響は甚大で、研究や臨床系学会やセミナーの開催形式にも大きな変化をもたらしました。整形外科・整形外傷の領域でも主要な学会はすべてオンラインもしくはハイブリッド形式での学会となりました。延期後にオンライン学会となった日本骨折治療学会、日本リハビリテーション医学会では、シンポジウム発表や国際合同シンポジウム座長など自身の職場の机から発信しました。また外傷、骨折関連の治療成績や合併症について、国内外ともに精力的に論文発表も行いました。臨床面では救急科と連携しての多発外傷・高エネルギー外傷に関連した重度整形外傷に対する専門的・集学的治療、ならびに他院で対応困難な骨盤骨折・寛骨臼骨折など難治性骨折に対する受け入れや手術支援も積極的に行いましたが、コロナ拡大時は重度外傷自体が減るなどコロナ禍ならではの事象も経験しました。基礎研究では「人工知能を用いたインプラントと骨の適合予測システムの開発」、免疫病理・松川教授との共同研究など引き続き行い、野田を研究責任者とする多施設共同臨床研究も本年度に最終成績をまとめ論文化する所存です。

同窓・同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。(野田 記)

## 地域救急・災害医療学講座

2020年10月末に尾迫が退職し、11月より上原健敬単独で活動させていただいております。

臨床においては、岡山でのCOVID-19の感染拡大の影響で、時折重症患者の受け入れを制限せざるをえない状況もございます。大変ご迷惑をおかけしておりますが、そのような中でも重症な患者様のご紹介ならびに後方連携についても多大なるご協力をいただき、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。今後とも患者様のご紹介ならびに逆紹介につきましてご高配賜りますようお願い申し上げます。

研究面では、多くの学会が延期やweb開催となりましたが、9月に日本computer-associated orthopaedic surgery (CAOS)研究会、ならびに12月に日本外傷学会においてシンポジウムでの発表を行いました。また各種整形外科関連学会においても症例報告、研究発表をおこなっております。

教育活動として、骨盤輪・寛骨臼骨折症例検討会の事務局として研究会の開催および運営を行っておりますほか、若手整形外科外傷医向けの手術解剖実習を3月に開催しております。

今後も益々臨床・教育・研究活動に取組み講座運営に取り組んで参りたく考えております。今後とも宜しく申し上げます。(上原 記)

## 岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座

玉野市と岡山大学総合内科学への連携で開講している講座です。開講4年目であり、引き続き玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

玉野市民病院においては、内科診療を担当いたしました。総合内科医として、離島を含めた地域の病院・医院と連携しつつ診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学（漢方医学）領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。循環器科領域においては心臓超音波検査の実施と同時に検査技師への教育も引き続き行い、診療内容の充実を図っております。訪問診療にも参加しており、地域の実情に合った医療の提供を考える大変よい機会となっております。

同院では内科専門医を目指す専攻医や、初期臨床研修医の受け入れが行われ、その指導にも携わりました。さらに、早期地域医療体験実習（1年生）、地域医療体験実習（3年生）を行う学生の受け入れも行われ、当講座の教員が実習の指導にあたりるとともに、その評価を行いました。地域の医療現場を肌で感じることでできる実習であり、貴重な経験になったという学生の言葉が多く聞かれます。新型コロナウイルスの影響がある中、昨年度までと同様に専攻医・研修医・学生の受け入れにご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

岡山大学においては、総合内科・総合診療科での診療を担当いたしました。教育面では総合内科においてこれまで同様に学生の臨床実習を担当いたしました。伝統医学の卒前・卒後教育として定期的に勉強会を開催し、その普及に努力いたしました。また、総合内科・総合診療科を選択した選択実習の学生には、より深く伝統医学に触れられるような実習を実施しております。（植田 記）

## 岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座

いつも同窓会の皆様方には大変お世話になっております。本講座は笠岡市と総合内科学教室の連携のもと2017年度より開講された寄付講座です。当講座の現況につきましてご報告させていただきます。人事に関しましては、変更なく堀口と安部助教にて業務に従事しております。本来であれば前任の小川弘子先生（現地域医療人材育成講座教授）が開催されたように市民公開講座や井笠地区医療機関での院内レクチャーなどを行うべきところではございますが、COVID19の蔓延を受け、現時点では行えておりません。COVID19感染の収束の際には再開してまいりたいと思います。COVID19対策に関しては笠岡市民病院の務めとして院内感染対策を万全にすべく、総合内科から萩谷英大准教授をお招きして感染対策のレクチャーを受け岡山大学病院と同レベルでの高い感染対策を行っております。

診療については堀口、安部両名で専門性を生かして内視鏡診療を充実しております。また、倉敷・福山地区の医療機関との連携を継ぎ目なく行うことで患者様により適切な治療を行っております。周辺医療機関の先生方におかれましては引き続きよろしくご協力いたします。総合内科寄付講座共同研究にも積極

的に参加しており、院内研究体制の構築ならびにデータ収集に努めております。本研究で見出された研究成果が、高齢化社会に直面している我が国のモデルケースの一つになればと考えております。教育に関しては笠岡市民病院では地域医療実習や研修医育成に積極的に協力をしており、医学生には医療現場における多職種連携の実情と課題について実習を通じて学んで頂き、研修医には更に掘り下げた臨床力、考察力、連携力を身に付けて頂くよう寄付講座教官として尽力をしております。

世の中のダイナミックな変化に地域医療が取り残されることのないように、岡山大学病院 総合内科と連携しつつ寄付講座を更に盛り上げてまいりたいと思いますので引き続きよろしくご協力いたします。（堀口 記）

## 高齢者救急医療学講座

本講座は、超高齢化社会の救急における問題点、都市部から離れた地域の救急の問題点、そしてそれらの解決法を研究すべく、井原市の寄付により開講し5年目を迎えております。昨年度は藤崎宣友と青景聡之の2名体制で診療と研究活動に励んでおります。

地域救急の問題点は、人口密度が低いこと、カバー領域は広範囲である点、そして高齢化が急速に進行しており、高齢化に関連した内因性疾患の搬送の割合が多い点が挙げられます。つまり、超重症患者の発生は多くないにもかかわらず、数少ない重症例への対応能力も求められます。そのため、慣れない重症例の対応能力を維持するため、教育はむしろ都市部の総合病院よりも重要となりますが、昨年度は従来開催していた井原市・笠岡市の看護師向け研修会は今般の事情により中止となっております。

地方の高齢者救急特有の問題点を井原地域の消防局と共同し、救急搬送データから解析すると、肺炎、心不全が重症化してから救急搬送されるケースが増えていることが明らかとなりました。市民公開講座で「悪くなる前の早めの受診」を啓蒙するなど地域救急と地域包括ケアネットワークの連携強化に貢献できればと考えております。

また高齢者救急においては、必ずしも最先端の高度医療を行うことが最善ではありません。高齢者が「自分の住み慣れた地域で、最後まで自分らしく生きるための救急」を実践するため、アドバンスケアプランニングの啓蒙にも力をいれていきたいと考えております。

これからも、井原から高齢者救急医療、地域救急医療のあり方を発信していきたいと思っておりますので、何卒お力添えの程宜しくお願い申し上げます。同窓・同門の諸先生方には引き続き御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（藤崎 記）

## 瀬戸内（まるとめ）総合診療医学講座

本講座は、平成31年4月に香川県丸亀市のまるとめ医療センターと総合内科学の連携のもと開講された寄付講座です。開講から2年が過ぎようとしておりますが、外来業務を主とする臨床支援に加えて院内感染対策とポリファーマシー改善活動を継

続的に行っています。研究面では、「瀬戸内マリンエリア」寄附講座群の主力として、主に感染症・老年医学をテーマとした多施設共同研究を精力的に行っているところで、2021年内には複数の研究結果が報告できる見通しです。今後も地域医療が抱える問題を日々の臨床業務から抽出し、地域ニーズに沿った形で解決策の提案をすることを目標としてまいります。教育面では、内科専門医・総合診療専門医の連携病院として、若手医師の研修施設としてさらに連携を強めていきたいと考えております。人事面では、この期間、特に変更はありません。

当講座では、今後もまるがめ医療センターを中心とした中讃地域における地域医療の実践を基盤としながら、臨床教育・地域医療研究を進めていくことで、若手医師が地域医療に従事しながら継続的なキャリアアップ（学位・専門医取得）を実現する体制を構築することを目指して活動してまいります。

（萩谷 記）

## 災害医療マネジメント学講座

皆様方のご協力のもと、鳥取市寄附講座として、5年間のうちの3年間は経とうとしております。寄附講座の年限後半になり、講座としての統括ができるように準備をしているところでございます。

当講座の高田助教が令和2年9月を持ちまして退職いたしました。現在、渡邊助教と2人で講座運営をしております。

災害対応となる災害対策基本法では、「災害」を自然災害と定義しておりますために、新型コロナ禍対応に県医療チーム（DMAT）などとしての活動ができないところが心苦しいところでございます。しかし、岡山県庁新型コロナ対策本部や岡山市新型コロナ対策本部（保健所）での執務を補助することで、ご協力をさせていただいております。災害医療対応は、多人数に対する医療対応をするものでありますので、新型コロナ禍での、特にクラスター対応ではお役に立てるものと考えております。

次に、令和2年7月より、岡山県保健福祉部医療推進課により「地域医療BCP構築事業」を岡山大学病院が受託し、岡山県における災害時対応の構築について研究・開発を進めております。これは、災害時に岡山県全体を一つの医療機関「おかやま病院」と見立てて、役割分担、資源の再配置などの体制を構築することによって、急性期対応と医療体制の早期復元を図るものでございます。

新型コロナ禍の影響によりどちらも想定外のことばかりではございますが、当講座のこれら2本柱を進めてまいり所存でございます。どちらも幅広い見識を必要とする広範囲な領域であり、諸兄先生方のご指導を今後とも賜りますようお願い申し上げます。

（中尾 記）

## くらしき総合診療医学教育講座

本講座は、2020年4月に、総合内科学講座と倉敷成人病センターの連携のもと、倉敷エリアにおける地域医療現場での教育・臨床・研究を基盤とし、円滑で持続的な医師・医療人の育成を

使命とする寄附講座です。三好智子が准教授として、赤穂宗一郎が助教として、着任しております。

倉敷成人病センターでは、研修医教育を担当しており、一般外来の指導、内視鏡の指導に加え、抄読会、初期研修医や専攻医・指導医と共に印象に残った症例の情報交換や臨床研究も行っております。教育活動としては、総合内科・総合診療科での外来指導、医学科や保健学科のシミュレーショントレーニング、全国に先駆けた医学生によるインフルエンザワクチン実習なども担っており、令和3年1月岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教育功労賞「Student Doctorによるワクチン接種推進チーム」も受賞することができました。また、ヒトの行動に焦点を当て、人間を全人的により深く理解しようとする行動科学という医学科学年縦断的プログラムを運営しており、山陽新聞社会面で連載している「医を紡ぐ岡山大医学部150年第3部」では、「未来を担うインタビュー編下 人間形成 患者中心の医療目指す」として、令和2年8月31日医学科1年生の取り組みを紹介する機会も頂きました。更に令和3年3月13日第3回日本Whole Person Care研究会～多様なアイデンティティを共有しよう～を開催しました。学術活動としては、赤穂助教が2020年度科研費（研究活動スタート支援）を獲得し、シカゴで開催されたDigestive Disease Week 2020のシンポジウムで講演するなど、積極的に研究活動を行っております。

本講座は、初期研修医および専攻医の育成、多職種連携教育、臨床研究、医学教育研究などを通し、地域医療に貢献していく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

（三好 記）

## 検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。本年度は技師長（岡田）と副技師長（川下、糸島）2名、越智主任が定年退職、渡辺副技師長が自己都合退職、その他近藤技師と今田技師が退職になります。川下副技師長、越智主任は再雇用で残り、今田技師はパート職員として残ります。業務上では新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴いPCR検査等の拡充に努めました。現在では術前検査の唾液によるPCR検査や夜間休日におけるPCR検査等24時間体制での検査体制を確立しています。教育関係では本学保健学科学学生、倉敷芸術科学大学学生の臨地実習および本学医学科学学生のポリクリを受け入れました。研究・学会活動では、全国学会で10演題Web発表しました。また、邦文論文1編が掲載されました。資格関係では、1月に藤森巧技師が認定臨床微生物検査技師を取得しました。

（岡田 記）

## 手術部

同窓会の皆様におかれましては益々ご活躍のことと存じます。

令和2年11月16日に神戸において開催予定であった第57回全国国立大学病院手術部会議は、昨今の事情からWeb会議の形式で開催され本院からは増山部長、岩崎副部長、水原部長の三

名が参加いたしました。本会議では手術室薬剤業務実施加算の要望、手術室における診療看護師の研修・就業、新型コロナウイルス感染症に対応した手術室医療体制の充実、学生教育体制の維持を目的とした統一マニュアルの制定、院内危機管理体制における手術室の位置付けなどについてWeb会議ではありますが活発な意見交換、情報の共有がなされました。また、本会議において当院の令和元年度の総手術件数は9690例（第8位）、手術部外手術・検査件数は1059例（第1位）であることを報告しました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症への対応から春先には例年と比較して6割程度の手術件数にまで落ち込み、その後2020年末には9割以上にまで回復しました。しかしながら、岡山県でも新型コロナウイルス感染患者数が増加するとともに、新型肺炎患者を受け入れているICUの病床使用数が増えた結果、術後患者を収容するICU病床数が減少したことから当院でも2021年より一時期手術室の利用制限が行われました。幸い現在は利用制限を解除しています。

本院では2020年2月に看護師特定行為研修の指定研修機関として指定を受け、今年度から第一期生に高難度の手術と麻酔が可能である当院の特性を活かし術中麻酔管理領域研修を順調に行っています。

これまで新型コロナウイルス感染症の影響が比較的少なかった岡山でも医療非常事態宣言が出される状況となり、本院も大きく影響を受けております。どのような状況下でも『最後の砦』として必要な手術を安全に実施できるよう各診療科と連携を深め、対応に努めて参ります。今後とも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い致します。（岩崎、水原 記）

## 病理診断科・病理部

柳井広之教授のもと、スタッフ医師4名（都地友紘、谷口恒平、西田賢司、田中健大〔病理学（腫瘍病理）〕）、医員4名（柴田嶺、小野早和子、北野晶子、綾田善行）の合計8名で業務にあたっています。

人事ですが、医員の西村碧（腫瘍病理大学院生兼任）が国立がんセンター中央病院に半年間の国内留学中です。

学術・研究面においては、柳井がミャンマー人医師（主に病理医）を対象としたWEBセミナーを行いました。このWEBセミナーは、ミャンマー国内で医療サービスを提供するLEO Healthcare Diagnostic & Medical Centreが運営するWEBサイト上で提供されるコンテンツであり、これまで当科で研修を受けたミャンマー人医師だけでなく、多くの病理医が受講しました。病理に限らず、国内で実地研修を受けることがことが困難な医師たちにとってこのようなWEBセミナーは大変有用な機会であったものと思います。

教育面においては、当科は直接的に患者に接触しない環境であるため、実習生、研修医とも通常に近い形での実習・研修を維持しております。

引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（都地 記）

## 輸 血 部

ここ数年、小児輸血における院内共通ルールの整備や、新鮮凍結血漿の解凍業務の導入など、病院全体に貢献する輸血部を目指して参りました。2020年度の大きなテーマは、クリオプレシピテートの新規導入と、輸血拒否患者に対するインフォームドコンセントの見直しでした。これらは、輸血部門としていつか実施しなくてはならない「宿題」のようなテーマでしたが、前者では関連各科の先生方に、後者では医療安全管理部に多大なサポートを頂いて、もうすぐ形になろうとしています。この場を借りて感謝申し上げます。

昨年度に開始されたキメラ抗原受容体T細胞（CAR-T細胞）療法は、月一例がコンスタントに実施されており、細胞採取、処理、保管を輸血部が一手に担っています。2021年度は2つの新しいCAR-T製品が臨床現場に登場する予定です。今後、細胞療法は様々な癌への応用が期待されておりますので、輸血部でも引き続き対応していきたいと考えております。

人事面では、池川俊太郎が本年1月に米国ダナファーマー研究所への留学のため渡米致しました。松田真幸、近藤匠、木村真衣子の3名は引き続き輸血部医員として活躍しています。

新しい試みを次々と導入してきた状況から一息つき、2021年はそれらの業務を見直しながら、しっかり足元を見て体制の強化をして参ります。ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。（藤井伸 記）

## 血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田淳部長（腎・免疫・内分泌代謝内科学教授）のもと、スタッフ医師2名（木野村賢、田邊克幸）、医員5名（川北智英子、加納弓月、森岡朋代、高橋謙作、中島有理）で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

今年度も関連病院の先生方より多数の透析患者をご紹介頂き、2020年1月～12月の1年間での血液透析及びアフレスシ療法のための血液浄化療法部への受け入れ件数は、2139件となっております。毎年、受け入れ件数は増加傾向が続いておりましたが、今年度は新型コロナウイルス感染患者の受け入れ体制の整備のため一時受け入れ患者数の制限を行っていたこともあり、やや減少となりました。ご存知のように12月～1月にかけて全国的に新型コロナウイルス感染患者数が急増し、それに合わせて透析患者の感染者も増加しております。当院は中等症から重症の新型コロナウイルス感染患者を診療しており、県からの要請で維持透析中の感染患者の診療にもあたる場合があります。入院病床や血液浄化療法部での感染患者の対応状況によっては、透析患者の受け入れを制限せざるを得ない状況にあり、関連病院の先生方にはご迷惑をおかけ致しますが、ご理解のほどよろしくお願い致します。

今後も病床の使用状況に応じて可能な限り当院で血液浄化療

法を必要とする患者の受け入れに対応し、安全な治療を提供できるように取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続きご支援をお願い申し上げます。(田邊 記)

## 高度救命救急センター

高度救命救急センターのご支援を賜り誠にありがとうございます。我々は高度救命センターの責務をもとに重症患者の救命を第一に診療していますが、専門診療科の協力無しには救命は難しく、現在は整形外科、脳神経外科、歯科口腔外科からの派遣スタッフの先生方が第一線で活躍されています。また、各診療科の先生方においては転科・転棟の際にご協力いただきありがとうございます。皆様のご協力により岡山県内の重症患者対応が可能となり、当センターの運営ができていますこと心より御礼申し上げます。

2021年度は国難であるコロナ禍となり、救命救急科のみならず、岡山大学病院、岡山県全体が医療崩壊の危機に直面しました。岡山大学病院は金澤院長の指揮のもと、病院全体が一同となり、コロナ禍に立ち向かうと同時に、高度救命救急の役割をご理解頂き、平時の救命救急のご協力・支援を賜れたことにより、なんとか救急患者の受け入れを継続できたことを感謝致します。重症のCOVID-19患者受け入れの体制に関しては、麻酔科・総合内科などの関連診療科や看護部と協力体制を築き対応することが出来ました。また、COVID-19宿泊診療所のオンライン診療にも着手し、県内のCOVID-19診療にも貢献してきました。この先もこの国難を乗り越えるべき精進していく所存です。

コロナ禍においても学生教育、またWebによる学会活動、講習会も積極的に進めております。学生教育では、実際の救命現場を体験する機会が大幅に失われました。しかし、コロナ禍からみえる救急医療の本質とは何かを考え学ぶ場になっております。救急はいかなる時においても机上では学べないことを実際に研修する場であり、今後の医師人生において重要なメッセージを伝えることが出来ればと考えております。

2021年度は皆が耐え忍ぶ年となりますが、今後とも当センターへのご支援・ご協力の程何卒よろしくお願い申し上げます。(塚原 記)

## 周産母子センター

コロナ禍で全国的に出生数が減少している中、当センターは地域周産期母子医療センターとして、県内外から多数の症例をご紹介いただき、心より御礼申し上げます。

当センターは、合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療(ART)にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましては、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門(周産期および生殖内分泌)とNICU部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田 泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の早田 桂が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めています。産科部門は、周産期専従医および生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原 宏一小児医科学教授の指導下に、新生児専従医の鷺尾洋介准教授(小児急性疾患学講座)、岡村朋香、渡邊宏和、森本 大作を中心に運営されています。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科(母体)18床、新生児集中治療室(NICU)6床、重症新生児病床12床、4階西病棟に産科(母体)5床がそれぞれ配置されています。なおNICUが満床のため、搬送依頼をお受けできないなど常日頃よりご迷惑をお掛けしております。今後の安定した周産期医療の供給のため、NICUおよびGCUの拡充準備を引き続き進めてまいります。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しく願い申し上げます。

(鎌田 記)

## 内分泌センター

内分泌センターでは内科・外科Cフロアおよび西7階病棟にて内分泌内科・外科・コメディカルが一丸となって全身多臓器に及ぶ多様な内分泌疾患に対して関連各科と緊密に連携しながら日々診療を行っています。中四国を中心に全国の同窓の先生方から患者様をご紹介頂き、内分泌センターカンファレンス等にて各専門の立場から活発な意見交換を行いつつ、1症例毎に多彩な病態を呈する内分泌疾患に対してチームで取り組むとともに、専門医育成や学生・研修医教育にも尽力しております。

2020年度下半期の学会活動として、日本内分泌学会臨床内分泌代謝Update・日本甲状腺学会・日本神経内分泌学会・日本生殖内分泌学会・間脳下垂体副腎系研究会・間脳下垂体腫瘍学会・日本乳癌学会中国地方会・内分泌学会中国地方会・中国四国甲状腺外科研究会・岡山内分泌同好会など、内分泌代謝領域の主要な学会・研究会に参加し、数多くの学会発表を行いました。

最後になりましたが今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。(稲垣 記)

## 臓器移植医療センター

コロナ禍で全国的に脳死下臓器提供数が前年より減少するなか、2020年の診療実績は肝移植14例(生体9例、脳死5例)、腎移植12例(生体10例、献腎2例)、肺移植2例(脳死2例)でした。献腎移植の1例はCOVID-19加療後のレシピエントであり、世界で2例目、アジアでは初の症例でしたが、経過は良好です。コロナ禍の脳死移植では、移植医の移動を最小限にす

るため、脳死下臓器提供施設の近隣にある移植施設の協力を得て脳死下臓器摘出術を行う「互助制度」が、特に肝移植で積極的に活用されています。COVID-19の拡大を受けて制度面の整備も行い、コロナ禍での全臓器の脳死下臓器摘出術マニュアルを新たに作成し、献腎移植マニュアルも改訂いたしました。

学術面では、2021年1月30日～2月14日に、第37回日本肺および心肺移植研究会（会長：豊岡伸一）をウェブ開催致しました。第27回（会長：三好新一郎名誉教授）以来の主催であり、研究会初のウェブ開催でしたが、困難症例の検討や、臓器移植法改正後10年が経過した肺移植の現状について、活発な議論が交わされました。2021年6月24・25日には第39回日本肝移植学会学術集会（会長：八木孝仁）を予定しておりますので、会員の先生方には奮ってご参加いただければ幸いです。

人事面ですが、腎移植では、2020年9月に窪田理沙が腎臓移植外科スタッフとして岡山医療センターへ異動、2019年10月から東京女子医科大学へ国内留学していた和田耕一郎が2020年10月に帰局し、国内屈指のhigh volume centerでの経験を遺憾なく発揮しています。肺移植では、2021年2月に、スペイン・マドリードのマハダオンダ・プエルト・デ・イエロ大学病院で2年間の臨床研修を終えた田中真が帰国し、今後の活躍が期待されています。

コロナ禍の難しい状況ですが、日本屈指の移植施設として移植医療の発展に貢献できるよう活動して参る所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

（杉本 記）

## 超音波診断センター

超音波診断センターは、2011年4月に開設され10年目を迎え、2019年末に中央診療棟2F東から西へ移転をし、新しいセンターにて業務を開始して1年となりました。

大塚文男センター長（総合内科学教授）、大西秀樹副センター長（消化器内科）、高谷陽一助教（循環器内科）のもと、関係各位のご支援・ご協力により、循環器領域・消化器領域の他にも血管領域（頸部、下肢、末梢血管等）や体表領域（乳腺、甲状腺、関節等）など広範囲にわたる超音波検査を行っております。

診療面においては今年はコロナウイルスの影響で感染対策として検査時の患者様へのマスクの着用を徹底していただき日々検査に励んでおります。

研究面においては、学会の演題登録は前年度同様、多数行っておりますが今年度はコロナウイルスの影響で各学会web開催となっております。日本心不全学会学術集会、日本循環器学会学術集会等オンラインで発表、講演を行っています。

教育面では、以前より携わっていた講演会などの開催が難しくなりましたが、オンラインにて多くの講演会、研究会を開催しています。

開設当初に配属された技師も半数になりましたが、現在、超音波専門医2名、超音波検査士6名（消化器領域、循環器領域、血管領域、体表臓器領域）が資格を有し検査技術や知識向上に努めています。また生理検査室と協力し心電図認定技師2名が

超音波検査（循環器領域）の習得に励んでおります。

超音波診断の向上に伴い、臨床現場での検査の需要が大変増加しております。スタッフ一同、患者様のために質の高い検査を行えるよう励んでおります。

（楠 記）

## 低侵襲治療センター

平成23年度岡山県地域医療再生臨時特例交付金によって整備されました低侵襲治療センターは平成24年の設立から8年余りが経過しました。その間センター長の藤原俊義教授のもと、消化管外科、肝・胆・膵外科、泌尿器科の専任、兼任スタッフが当院での鏡視下手術を推進とそれを担う若手外科医の人材育成のために活動しております。今年度の下半期も様々な制限の中で例年より手術件数はやや減少していますが、その状況下でも、より低侵襲な外科治療の提供を心掛け臨床に取り組んでまいりました。近年注目されている手術支援ロボット「ダヴィンチ」による手術は、泌尿器科手術に加え胃、食道、縦郭、肺、子宮の手術も当院で保険診療として定着しましたが、新たに今年9月よりロボットを用いた直腸癌手術、膝頭十二指腸切除術も導入でき、着実に症例を重ねております。肥満症、糖尿病に対する外科治療では多職種からなる肥満症外科治療チームの連携で腹腔鏡下スリーブ状胃切除術を実施していますが、この下半期は手術枠の制限のため新規手術を控えている状況です。センターでは内視鏡外科技術認定医の養成を推進しておりますが、今年度は当センターのスタッフより新たに3名の合格者を輩出することができました。低侵襲外科を担う次世代の後進外科医の育成に一層尽力してまいります。また、2月より低侵襲治療センターのホームページデザインを一新しましたので、今後も情報発信に努めていきたいと思っております。引き続き、安全、安心な低侵襲手術の普及に貢献できるよう、臨床、研究、教育に尽力してまいりますので、なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（香川 記）

## 糖尿病センター

当センターでは、岡山県からの受託事業である「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局に加え、平成26年度からは「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ（日本糖尿病療養指導士）チーム岡山」の事務局業務も担当しています。また、岡山大学病院における糖尿病診療では、多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、リアルタイム持続血糖測定器の導入、肥満外科手術等の先進糖尿病治療の推進に取り組んでいます。2017年2月から開始した肥満外科手術（腹腔鏡下スリーブ状胃切除術）は、2021年1月時点で17症例の手術を安全に行い、望ましい経過を得ています。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内における糖尿病診療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めています。2021年1月現在で岡山県知事及び岡山県医師会から認定されている約315施設の糖尿病総合管理医療機関（かかりつけ医）は、近隣の専門施設と円滑な連携を図っており、さらに、多職種からなる「おかやま糖尿

病サポーター」(約1,850名)も参画した地域密着型の糖尿病診療・連携体制(「おかやまDMネット」)の構築を推進しています。

また、国策として進められている糖尿病性腎症重症化予防対策に関しましては、岡山県においては2018年3月に「岡山県糖尿病性腎症重症化予防プログラム(岡山方式)」を策定しました。現状、各市町村で個別的な取り組みを実施していますが、令和3年度以降は可能な部分については県下統一した形で当該プログラムを推進し、県全体の、また、各市町村における本プログラムのアウトカム評価を可能とするシステム構築を目指し、活動しております。

人事面では、令和3年3月で片山晶博が退任し、同年4月から和田高平医師が採用予定です。

最後になりましたが、同窓の先生方におかれましては、コロナ禍の大変な時期が続いておりますが、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。(片山 記)

## IVRセンター

IVRセンターでは診療科、専門領域、職種の垣根を越えた多職種メディカルスタッフの横断的な協力のもと、高レベルの低侵襲インターベンションを行っております。人事等に関しまして、2020年4月以降の異動はありませんでした。各部門ともに多くの治療件数をこなしておりますが、森田幸子師長のリーダーシップのもと、患者さんの入室・退室もスムーズに、日々安定して治療が行われています。

コロナ禍にあり、IVRセンター内もCOVID-19患者／疑い患者に対するカテーテル検査・治療に対応すべく、2室においてゾーニングや機器のカバーリングを実施しております。またスタッフによるCOVID-19対応シミュレーションも行いました。COVID-19感染が否定できない症例に対する緊急カテーテル検査・治療におきましても、スタッフは冷静かつ適切に対応しております。また幸いなことに、各科共に通常診療を大きく治療制限をすることなく、コロナ禍においても必要な医療を適切に患者様へ提供することが出来ております。

本年より院内規定により鎮静時のプロポフォールが各科単独にて使用不可となったことから、当部門におきましても鎮静法の変更など現場での対応を行っております。この件と関連し、本年2月よりIVRセンター内の改装された一室にて経食道心エコー検査を施行することとなりました。検査後もIVRセンター内のリカバリーブースにて鎮静後のリカバリーおよび覚醒レベルの評価が行われており、経験豊富なIVRセンター看護師が力を発揮しています。

IVRセンターでは2013年4月の開設以降、毎月1回センター運営会議を開催し、安全面など診療科間で情報を共有することに努めております。今後も引き続き高度な医療を安全に行っていくたく思っております。(中川 記)

## ジェンダーセンター

人事面では大きな変化はありません。COVID-19流行の中、日本精神神経学会のガイドラインに準拠して毎月開催している

岡山大学ジェンダークリニック性別適合手術適応判定会議は、引き続きMicrosoft Teams を使ったWEB会議形式で行なっています。WEB会議は慣れてしまえば手軽で遠方からでも参加しやすく、メリットはあるのですが、会議後に個別の情報交換をするなど非公式な交流は行えない等様々なデメリットもあります。診療科をまたぐチーム医療では、対面での人と人との交流は大きな意味があると改めて感じております。

2020年1年間のジェンダーセンターにおける手術件数の総数は、関連手術を含めて66件でした。乳房切除術は47件、尿道延長術2件、陰茎形成術2件、外陰部女性化術(造膈術を含む)6件となっています。

COVID-19の影響で流行地在住の方の手術が中止、延期になる事例がしばしばあり、問題となっています。逆に近隣の方はキャンセルされた枠を埋めるために、望外に早期の手術を受けられることがあり、悲喜こもごもという所です。

医療資源については厳しい状況が続くと思われませんが、できる限り必要な医療を必要な方に届けるべく尽力したいと考えております。(松本 記)

## 炎症性腸疾患センター

炎症性腸疾患(IBD)センターは、この9月で設立5年目(中央診療部所属になって約3年)を迎えました。診療体制に関しましては、センター長である平岡佐規子、副センター長の近藤喜太(消化管外科併任)を中心に、消化器内科、消化管外科、小児科、小児外科をはじめ各科との連携を行い、診療にあたっております。専門外来は、外科(近藤)と小児科(津下充)は月曜に、内科は毎日行っております。(月曜:平岡(PM)／(衣笠秀明)、火曜日:安富絵里子、水曜:井口俊博、木曜:平岡／(原田馨太)、金曜:岡田裕之(前センター長)／岡昌平(AM)／(山崎泰史／川野誠司))。看護師・薬剤師・管理栄養士とも協力し、患者さんの病状・ニーズに応じた適切な治療選択ができるよう努めております。コロナ禍ではありますが、ご紹介いただく患者さんも減ることなく、昨年度もむしろ増加しておりました。ストレスのかかる状態で病気の再燃のリスクも高く、また再燃した際の免疫抑制系の治療に関してもとても気を遣う今の状況です。COVID-19の関係で、トリアージなどの必要性はありますが、緊急の紹介にも対応できるように努めてまいりますので、お困りの患者様がおられる際は、ぜひご相談ください。

病病・病診連携の重要度が更に増しているのを感じております。今後もIBDの専門機関の中心として恥じないよう、皆で切磋琢磨してまいります。ご高配のほどよろしくお願い申し上げます。(平岡 記)

## 運動器疼痛センター

当センターは、R2.10.1に厚生労働省研究班より、定められた要件を満たす「集学的痛みセンター」として認定されました。これも、痛みリエゾン外来を支える医療スタッフ並びに関連の方々のお力添えのおかげと感謝申し上げます。厚生労働行政

推進調査事業費補助金「慢性疼痛診療システムの均てん化と痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究」にも取り組んでおります。また、本年度も山口大学ペインセンターとの共同事業として、同補助金「慢性疼痛診療システム普及・人材養成モデル事業」に採択されました。本事業は「痛みの診療について実践可能な人材の育成を行い、地域の医療提供体制へ慢性疼痛診療をさらに普及し、かつ拡大していくこと」を目的としています。昨年2月から始まった新型コロナウイルス感染拡大により、予定された講演会、市民公開講座は軒並み中止・延期に追い込まれましたが、9月からは鉄永副センター長を中心に川崎医科大および近隣病院の理学療法士の皆さんの参加による合同Webカンファレンスを行っており、Web研修システムによる痛みセンター多職種連携研修会も5回開催致しました。

岡山大学教養教育科目「痛みの発生メカニズムと医療」の講義も例年通り開講しました。令和2年度は私達も作成に関与した本邦初の痛みの教科書である「疼痛医学」のパイロット版を学生全員に無償で配布し、教科書内容に沿ったWeb講義を行い、学生の皆さんに高い評価をいただきました。一方、リウマチ性疾患治療部門では、厚労省免疫アレルギー疾患政策研究事業において、「関節リウマチ診療ガイドライン」作成に参画しました。本年2月には、体制強化ならびに診療業務の円滑化のため松本佳則（リウマチ膠原病内科）、八代将登（小児科）を副センター長に任命いたしました。同窓会の皆様の引き続きのご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。（西田 記）

## 核医学診療室

核医学診療室では5名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査ならびに内照射治療を行っています。令和2年8月から令和3年1月の核医学検査件数はコロナ禍で減少し、約1300件となっています。全ての核医学検査に、放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

核医学診療室では、その他に放射性同位元素を用いた放射線治療も行っております。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、去勢抵抗性前立腺がんの骨転移に対するRa-223療法などを継続して行っています。

令和2年7月に日本の診断参考レベル（2020年版）（Japan DRLs 2020）が公表されました。これを受けて、核医学診療室においても核種投与量の最適化を進めました。今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしくお願い致します。（児島 記）

## 結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石砕石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石砕石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石砕石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせることで治療を行うことが必要となります。体外衝撃波結石砕石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後も積極的に体外衝撃波結石砕石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。（渡辺 記）

## てんかんセンター

岡山県のてんかん診療拠点である岡山大学病院てんかんセンターでは、伊達勲センター長（脳神経外科）のもと、秋山倫之副センター長（小児神経科）、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟が連携し、包括的かつ高度なてんかん診療を行っています。

新型コロナウイルス感染症の再拡大にともない、脳波などの検査件数は減少しております。しかし、てんかんセンターならではの長時間ビデオ脳波同時記録検査は、安全面に配慮しながら積極的に行っております。難治てんかんに対する外科治療に関しても引き続き積極的に取り組んでおります。てんかん症例カンファレンスは、感染対策を行いながら、月に2回の定期開催を続けております。県内の診療連携としては、月1回の症例検討webカンファレンスを継続しており、岡山県てんかん診療ネットワーク（県内の診療連携機関が参加）では、てんかんに関する教育資料の配信も始めました。

教育・啓発活動に関しては、会場開催での講習会は行えない状況が続いておりますが、3月にソーシャルワーカーを対象としたてんかんの講習会をweb会議により行いました。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。（秋山 記）

## 海外への留学者一覧

令和3年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 子 医 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4～未定
消 化 器・ 肝 臓 内 科 学	中 川 裕	平 1	Columbia Univeraity in the City of New York, U.S.A	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
血 液・ 腫 瘍 科 学	梅 村 茂 樹	平 11	Georgetown University, Washington, U.S.A	2018. 9～
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Fred Hutchinson Cancer Research Center, Seattle, U.S.A.	
	藤 井 詩 子	平 18	McGill University, Montreal, Canada	2018. 4～
	清 家 圭 介	平 23	University of Michigan Medical School, Ann Arbor, U.S.A	2020. 1～
	内 山 美 友 紀	平 24	Graduate Institute of International and Developement Studies, Geneva, Switzerland	2020. 9～
	池 川 俊 太 郎	令 2 院	Dana Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A	2021. 1～
腎・免疫・ 内 分 泌 代 謝 内 科 学	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
	渡 辺 晴 樹	平 19	The Feinstein Institutes for Medical Research, U.S.A	2020. 9～2023. 8
	三 瀬 広 記	平 20	MD Anderson Cancer Center, Texas, U.S.A.	2019. 6～
	山 村 裕 理 子	平 23	University of Glasgow, U.K.	2019. 1～未定
	林 啓 悟	平 24	Harvard TH Chan School of Public Health, Boston, U.S.A	2021. 1～未定
小児医科学	畑 山 一 貴	平 27	Women and infants Hospital in Rhode Island, U.S.A.	2019. 10～2021. 10
消 化 器 外 科 学	加 藤 卓 也	平 19	National Cancer Institute, U.S.A.	2019. 6～未定
	賀 島 肇	平 21	University of Washington, U.S.A.	2019. 6～未定
	金 谷 信 彦	平 22	Brigham and Women's Hospital, Boston, U.S.A.	2019. 2～未定
呼 吸 器・ 乳 腺 内 分 泌 外 科 学	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A	
	植 村 忠 廣	平 6	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4～
	橋 本 好 平	平 22	Washington University in St. Louis, U.S.A.	2019. 4～
	難 波 圭	平 22	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A.	2019. 12～
	三 浦 章 博	平 23	Center for Human Development, U.S.A.	2020. 10～
	山 本 治 慎	平 23	University of Tronto, Canada	2021.4～2023.3(予定)
	突 沖 貴 宏	大学院生	Northwestern University, U.S.A.	2020. 5～
整 形 学 外 科 学	中 道 亮	平 19	The Scripps Research Institute, San Diego, U.S.A	2018. 2～未定
	児 玉 有 弥	平30院	University of Pittsburg, U.S.A.	2020. 8～2021. 8
	堀 田 昌 宏	平30院	The University of Edinburgh, Edinburgh, U.K	2019. 6～2021. 9
泌 尿 器 病 態 学	光 井 洋 介	令 1 院	Cleveland Clinic, U.S.A	2021. 6～未定
	片 山 聡	大学院生	Medical University of Vienna, Austria	2020. 9～1年間
麻 酔 学 蘇 生 学	中 平 毅 一	平 9	Brigham and Women's Hospital Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2003. 11～未定
	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, Canada	
	塩 路 直 弘	平31院	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Tronto, Canada	2020. 7～
脳 神 經 学 外 科 学	金 恭 平	平 22	The University of Alabama, Alabama, U.S.A.	2019. 2～
	富 田 祐 介	平 22	Northwestern University, Chicago, U.S.A.	2019. 12～
循 環 器 内 科 学	上 岡 亮	平 20	Indiana Univeraity, Indianapolis, U.S.A.	2019. 9～未定
心 臓 血 管 外 科 学	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定
	奥 山 倫 弘	平29院	Univeraity of Kentuckey, Lexington, U.S.A.	2018. 2～未定
	佐 野 俊 和	平30院	The University of California, San Fransisco, U.S.A.	2018. 5～未定
	門 脇 幸 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 7～



## 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について

会員の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症の困難な状況下、第一線で医療にご尽力されていることに感謝と敬意を表します。

昨年来の新型コロナウイルス感染状況に鑑み、会員の皆様の安全を最優先する観点から、令和3年度岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会は、次のとおり行うこととしましたので、お知らせします。

会員の皆様におかれましては、ご自愛の上、ご活躍されますよう祈念申し上げます。

### ◎岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会

岡山医学会、鶴翔会、岡山大学関連病院長会、一般社団法人鶴翔会の運営に必要な決算報告等は、昨年同様、鶴翔会報号外として関係資料を郵送し書面によるご協議をお願いいたします。

### ◎岡山医学会主催特別講演会（新任教授講演）は、次のとおり開催いたします。

日時 令和3年6月5日（土） 14時から

会場 岡山大学医学部鹿田キャンパス 鹿田会館（旧生化学棟）講堂

※学内及び岡山市内在住の鶴翔会会員に限り会場へ来場を認めます。（マスクの着用と手指消毒を遵守願います。）

各教授の講演はZoomによりライブ配信いたします。

質問等は、会場のみとします。（オンラインでの質問等のご容赦下さい。）

### 講演プログラム

14:00	開会あいさつ	岡山医学会長（医学部長）			
14:00～14:30	データサイエンス時代における疫学の役割		疫学・衛生学	頼藤 貴志	教授
14:30～15:00	インターネットテクノロジーと健康		公衆衛生学	神田 秀幸	教授
15:00～15:30	網膜疾患診療の進歩		眼科学	森實 祐基	教授
15:30～16:00	新設「組織機能修復学分野」の5年間の歩みと今後の展望		組織機能修復学	寶田 剛志	教授
16:00～16:30	HPV関連中咽頭癌のgenomics		耳鼻咽喉・頭頸部外科学	安藤 瑞生	教授
16:30～17:00	ウイルス持続感染から紐とく病態発生素地		病原ウイルス学	本田 知之	教授
17:00	閉会挨拶	岡山医学会長（医学部長）			

### ◎岡山医学会賞各賞授賞式

日時 令和3年6月5日（土） 17時から（新任教授講演会終了後）

場所 岡山大学医学部鹿田キャンパス 鹿田会館（旧生化学棟）講堂

※授賞式の様子はZoomにより新任教授講演終了後、ライブ配信いたします。

なお、岡山医学会賞各賞受賞者については、鶴翔会会報号外及び岡山医学会雑誌の誌上で顕彰させていただきます。

※岡山医学会主催特別講演会（新任教授講演）及び岡山医学会賞各賞授賞式にオンライン参加を希望される会員は、次のURL又はQRコードから、必ず事前登録してください。

URL：https://bit.ly/3vyGpLh  
パスワード：123%456（すべて半角文字です。）



事前登録の締め切りは、令和3年5月20日（木）です。

**友野印刷（株）から、後日招待メールが届きます**ので、メールをご確認ください。

事前登録締め切り後、参加を希望される場合は、鶴翔会事務局までご連絡下さい。

（問い合わせ先）

鶴翔会事務局

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1 岡山大学医学部内

電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp



## 鹿田会館（旧生化学棟）講堂の改修工事竣工

岡山大学医学部は、令和2年（2020）創立150周年を迎えましたが、記念事業の一環として進めていた鹿田会館（旧生化学棟）講堂の改修工事が完了し、去る9月14日に竣工式が行われました。

この度の改修工事により、机、椅子の更新を行い最大約230人の収容が可能となります。また、最新の高精度レクチャーシステムを導入した一方で黒板と黒板枠などの一部は以前のものを残し、最新鋭の講堂にありながら、歴史と伝統との融合を図る講堂にリニューアルされました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、記念式典等多くの事業が延期され、本式典も学部内関係者のみの開催となりましたが、浅沼幹人医学部長は、「隣接するJunko Fukutakeホールとの連携運用を実施し、岡山からの情報発信、地域連携の機能強化に期待している。」と挨拶されました。また、ご寄付いただきました多くの皆様に対する謝辞と感謝が述べられました。

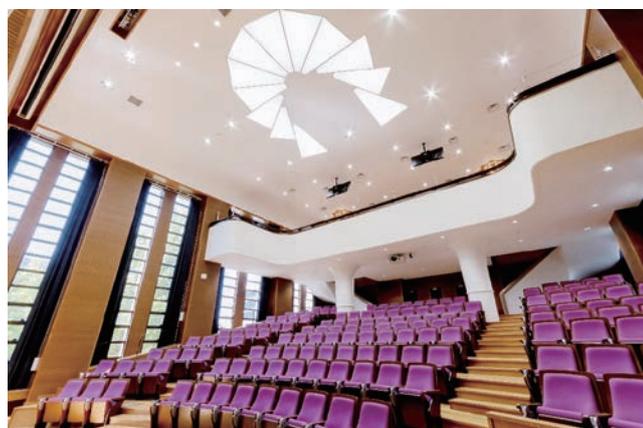
竣工式の後、こけら落としとして医学系会議が同講堂で開催され、新講堂の運用が開始されました。鹿田会館（旧生化学棟）は、第二代学長の清水多榮先生の多大なるご尽力により、1932年に竣工した旧岡山医科大学時代の歴史的建造物で、鹿田キャンパスのランドマークです。



挨拶を行う浅沼医学部長



テープカットの様子



## 生まれ変わる「フェニックス」

岡大医学部を知る人なら誰もが知っている医学部正門に続くフェニックスは、昭和31年卒業生の卒後10周年記念として、昭和41年に植樹されました。昭和45年ころ（創立100周年）の写真と見比べると大きく成長し、手入れが必要な老木も目立つようになってきました。

平成25年竣工のJunko Fukutake Hall（愛称：Jホール）の建設の際には、支障木として一時撤去が検討されましたが、建築家ユニットSANAAからも優れた景観を醸していると評価され、フェニックスを生かした設計になりました。

しかし倒木の危険性もあるフェニックスも見受けられるため検討の結果、松井秀樹先生（昭53卒、前細胞生理学（第一生理学）教授）らの発案により、フェニックス再生プロジェクトを行うこととなりました。

2012年（平成24年）12月14日に、この分野の専門家である岡山大学農学部作物開花制御学・後藤丹十郎教授にお願いして、昭和41年に植えられたフェニックスから直接に種子を採取し、その後農学部において発芽、育苗を試みていただきました。その結果多くの苗が根付き、フェニックスが蘇る事となりました。

ちょうど10年の時を経て、この苗木も大きく成長し植樹できる状態になりましたので、この度、創立150周年記念事業の一環として新しいフェニックスに植え替えることになりました。令和3年2月20日（土）から、工事が始まり、医学部の発展を見守り、多くの鶴翔会会員に愛され親しまれた初代のフェニックスのうち、危険性のあるものの伐採、撤去が行われました。



創立100周年絵葉書より



2021年2月18日撮影



2021年3月17日撮影

## 令和2年度 Student Doctor 認定式

令和3年1月4日（月）午後4時から、岡山大学医学部医学科Student Doctor認定式が臨床第一講義室において執り行われました。新型コロナの影響で簡素化された式となり、学生代表にStudent Doctor認定書が授与され、ビデオメッセージで先輩からのエールとアドバイスがありました。



## 令和2年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

令和3年3月25日（木）、岡山大学学位記授与式が岡山県総合グラウンド体育館（ジップアリーナ）で執り行われました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、出席者は卒業生、修了生及び学内関係者に限定し、また午前、午後の2部制とし医学部は午前の部で行われました。

同日午後、鹿田キャンパスJ-Hallにおいて関係教授の見守る中、医学部医学科の学位記授与式が挙行されました。式では卒業生一人一人の名前が読み上げられた後、卒業生総代に学位記が授与され、新型コロナ禍の下で最終学年を過ごした頼もしい110名の医学生が学舎から新しい第一歩を踏み出しました。

卒業生の皆様におかれましては、これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



## 第115回 医師国家試験の結果

## 全国（国公立）の合格状況

		出願者数	受験者数	合格者数	合格率
全 国 計	新卒	9,359	9,159	8,649	94.4
	全体	10,160	9,910	9,058	91.4
(参考：第114回)	新卒	9,317	9,044	8,583	94.9
	全体	10,462	10,140	9,341	92.1

## 中国・四国地区国立大学における合格状況

大 学 名	合 格 率 (%)	順 位			備 考
		中四国 (9校中)	全国立 (43校中)	全国 (80校中)	
鳥取大学	83.9	9 (2)	43 (12)	78 (32)	
島根大学	89.2	7 (7)	39 (38)	67 (69)	
<b>岡山大学</b>	<b>92.7</b>	<b>4 (8)</b>	<b>20 (39)</b>	<b>42 (70)</b>	
広島大学	86.3	8 (9)	42 (42)	75 (76)	
山口大学	93.7	3 (5)	19 (30)	37 (60)	
徳島大学	93.8	2 (4)	17 (28)	34 (56)	
香川大学	94.3	1 (1)	16 (7)	31 (24)	
愛媛大学	90.1	6 (3)	35 (24)	60 (51)	
高知大学	90.4	5 (6)	32 (33)	57 (63)	

※ ( ) 内は、昨年度の順位を表す。

## 岡山大学の医師国家試験年度別合格状況

試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新卒者率	既卒者率	計	順位		備考
							国立	全国	
16.3	98	5	103	89/98 90.8	5/5 100.0	94/103 91.3	20/43	29/80	
17.2	102	10	112	98/102 96.1	7/10 70.0	105/112 93.8	12/43	20/80	
18.2	98	7	105	93/98 94.9	4/7 57.1	97/105 92.4	15/43	30/80	
19.2	98	8	106	93/98 94.9	4/8 50.0	97/106 91.5	21/43	30/80	
20.2	92	8	100	87/92 94.6	5/8 62.5	92/100 92.0	22/43	36/80	
21.2	104	7	110	98/103 95.1	2/7 28.6	100/110 90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22.2	94	12	103	87/93 93.5	6/10 60.0	93/103 90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23.2	107	10	116	94/106 88.7	5/10 50.0	99/116 85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24.2	98	20	116	95/98 96.9	12/18 66.7	107/116 92.2	15/43	33/80	
25.2	95	10	103	90/95 94.7	6/8 75.0	96/103 93.2	8/43	23/80	
26.2	105	8	113	97/105 92.4	5/8 62.5	102/113 90.3	25/43	46/80	
27.2	105	12	117	101/105 96.2	6/12 50.0	107/117 91.5	26/43	46/80	
28.2	115	10	125	109/115 94.8	6/10 60.0	115/125 92.0	18/43	38/80	
29.2	120	8	128	113/120 94.2	6/8 75.0	119/128 93.0	14/43	21/80	
30.2	112	12	124	110/112 98.2	5/10 50.0	115/122 94.3	6/43	19/80	
31.2	122	7	129	117/122 94.3	2/7 28.6	117/122 90.7	23/43	44/80	
2.2	119	13	132	111/119 93.3	6/12 50.0	117/131 89.3	39/43	70/80	
3.2	110	13	123	108/110 98.2	6/13 46.2	114/123 92.7	20/43	41/80	

令和2年度卒年次別会費納入状況

令和3年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0	0	-	40	57	46	32	70%	10	105	97	39	40%
17	2	0	0	-	41	74	64	43	67%	11	96	90	31	34%
17専	2	0	0	-	42	71	62	34	55%	12	99	92	32	35%
18	4	1	1	100%	43	78	70	42	60%	13	100	97	29	30%
18専	5	1	0	0%	44	75	60	32	53%	14	94	76	24	32%
19	2	0	0	-	45	74	69	41	59%	15	92	78	24	31%
19専	6	2	1	50%	46	85	74	54	73%	16	98	78	26	33%
20	6	1	0	0%	47	80	73	43	59%	17	100	78	25	32%
20専	9	2	2	100%	48	95	91	59	65%	18	98	79	25	32%
21	5	1	1	100%	49	103	90	52	58%	19	97	76	24	32%
22	5	3	1	33%	50	75	70	46	66%	20	91	73	26	36%
23	13	8	3	38%	51	108	99	58	59%	21	104	84	25	30%
23専	11	4	1	25%	52	101	92	45	49%	22	94	84	27	32%
24	12	7	1	14%	53	73	66	41	62%	23	107	90	31	34%
24専	28	17	4	24%	54	120	114	53	46%	24	98	82	26	32%
25	10	5	0	0%	55	114	108	63	58%	25	95	88	34	39%
25専	31	18	5	28%	56	107	99	53	54%	26	105	91	25	27%
26	15	11	6	55%	57	126	116	65	56%	27	105	96	21	22%
26専	16	8	3	38%	58	113	106	56	53%	28	114	108	15	14%
27	18	12	7	58%	59	123	119	65	55%	29	120	114	14	12%
27専	8	5	3	60%	60	112	106	43	41%	30	112	106	19	18%
28	27	16	6	38%	61	112	104	54	52%	31	122	118	6	5%
29	27	18	6	33%	62	118	112	64	57%	令2	119	114	111	97%
30	29	16	11	69%	63	129	123	58	47%	学部卒計	6,415	5,622	2,517	45%
31	36	25	13	52%	平1	107	98	62	63%	長期滞納者(S)請求 2,147件 納入者 97件 5% 備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
32	39	26	19	73%	2	120	112	57	51%					
33	37	31	16	52%	3	111	97	55	57%					
34	49	34	20	59%	4	117	106	54	51%					
35	56	45	21	47%	5	110	104	35	34%					
36	51	42	28	67%	6	120	114	49	43%	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
37	45	36	20	56%	7	108	94	34	36%	大学院卒	1,445	981	297	30%
38	55	45	29	64%	8	101	96	32	33%	その他	1,723	1,544	810	52%
39	52	44	24	55%	9	97	95	32	34%	合計	9,583	8,147	3,624	44%

注：  
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）  
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

## おひとり“3,000円”の年会費が鶴翔会の活動を支えています！

鶴翔会会員の先生方には、益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げますと共に、平素から岡山大学医学部及び鶴翔会に対して、ご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動をおこなっております。こうした活動は会員の皆様からの会費に支えられております。会費納入に皆様のご理解ご協力をお願いします。

鶴翔会では多様な会費納入に対応しています。先生方のライフスタイルに合わせてお選び下さい。毎年お手数料を煩わせております手間を省いていただけるものと存じます。

### ○ 会報に同封の払込用紙

会報に同封の「払込取扱票」をお使いください（手数料は鶴翔会負担です）。

下に示す金融機関の口座にお振り込みいただいても、また、鶴翔会へ直接お持ちいただいても結構です。

### ○ インターネット・モバイルバンキング

先生方がご利用の金融機関のネットバンキング申込をされていまして、デスクのパソコンから、何時でもお振り込みできます。振込口座は下の金融機関の口座です。

### ○ 自動引き落としサービスもご用意しています

毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。手続きをご希望の方は鶴翔会事務局まで、電話・FAX・e-mailなどで、お気軽にお問い合わせください。手続用紙をお送りします。

### ○ お得な会費制度もいっぱい！

一時に25年間分の会費（75,000円）を終身会費としてお納め頂きますと以後の会費は納めて頂くことはありません。振込用紙の金額欄を75,000に訂正してお振り込みください。

満77歳になられたときは、お申し出により会費が免除になりますので、お申し出ください。

### 【振込金融機関名、口座番号等】

中国銀行 清輝橋支店 （チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）

普通預金 1591434 鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

### ゆうちょ銀行

#### ※ ゆうちょ銀行からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 記号、番号 15410、38020041

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

#### ※ ゆうちょ銀行以外からの振込の場合

ゆうちょ銀行（ユウチョギンコウ） 店名 五四八（ゴヨンハチ）

店番 548 番号 3802004

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

### 【お願い】

○ お振込に際しては、同封の払込取扱票により振込金額をご確認いただくと共に、会員番号（払込取扱票の氏名右側の番号）及び氏名を必ず入力してください。

○ 鶴翔会会費についてのお問い合わせは、鶴翔会事務局へお願いします。

電話：086-235-7060

FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## コロナ禍の医学振興

(公財) 岡山医学振興会 代表理事

山田 雅夫

前回、前任の難波正義代表理事の後を受けて、代表理事を拝命し、新任のご挨拶を申し上げて半年が経過いたしました。今後も、週に1回鹿田キャンパスの記念会館3階の財団事務室で執務しお役目を果たしたいと存じます。なお難波前代表理事は、代表退任後も、すこぶるお元気で、引き続き財団事務室にて理事として財団を導いて下さっております。お近くにお越しの際はどうぞお立ち寄りください。

当公益財団では、岡山県内における医学に関する教育研究を振興するとともに、先端技術の向上を目指した大学と医学界及び医療産業界等との連携を図り、もって学術及び医療技術開発の進展に寄与することを目的としています。

その主な事業として、昨年度も、第20回公募助成の公募を行いました。今回は42件の応募があり、選考委員会（委員長西堀薬理学分野教授）にて、教育2件、研究8件、地域交流連携活動5件、計15件を選考しました。昨年11月30日、難波理事、西堀選考委員長にも参加いただき贈呈式を行い、計15名の岡山県内の医学研究者に、総額915万円の助成金を贈りました。この助成は、今回の新型コロナウイルス感染症の拡大にあって、必ずしも医学研究に追い風とばかりは言えないところですが、切れ目なく途切れなく医学研究を推進する若手の方々の活躍を支援するものといえます。

その一方で、とても大切にしている岡山医療フォーラム（例年岡山国際交流センターで開催）は、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、令和2年3月に続いて令和3年3月の開催も中止し、テーマを次回令和4年3月に延期する判断をしました。一般市民の方々に関心の高い「すい臓がん」を当公益財団理事と学内の専門医が解説するものだけに、3年越しの企画となりますがぜひ実現したいと考えております。

当公益財団は、岡山大学医学部創立130周年と岡山大学医学部の大学院化とを慶賀する事業の一環として、平成13年7月に創立され、その後、法人の法律改正により平成23年公益財団法人として認可されました。設立より、鶴翔会の先生方からの温かいご支援のお蔭様で、これらの活動を進めることができております。心からお礼を申し上げますとともに、ご寄付のご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます次第です。

また、当公益財団では、教育研究機関及び地域社会

との連携・交流助成事業も実施しております。今後、研究集会・学術講演会等を岡山県内で主催される学内外の先生は、下記URLをご参照いただき、是非、当公益財団事務室までご相談いただければありがたく存じます。

(公益財団法人岡山医学振興会

URL: <http://omf.umin.ac.jp/>)



## － ご挨拶 － 事務局長の交代 －

前事務局長  
妹尾行恭  
新事務局長  
田口博之

この度、令和3年6月末日をもって鶴翔会事務局長を退職させていただくことになりました。平成23年4月から10年間、鶴翔会、岡山医学会、岡山大学関連病院長会の運営に携わせていただける機会をいただき、各会長先生をはじめ関係役員の先生方のご協力、ご理解を賜り誠にありがとうございました。

振り返りますと昭和59年8月に附属病院医事課へ転任以来、27年間の岡山大学、引き続いての鶴翔会10年間の37年間の長きにわたり岡山大学でお世話になりました。鶴翔会では、医学部創立150周年という記念事業遂行の一端を担わせていただきましたこと、また支部総会で鶴翔会の多くの会員の方々から懇意にいただいたことは、私の一生の思い出であり、また宝物であり、この上ない喜びであります。

鶴翔会の活動をとおして、先生方が常に最新の医療技術や医療の課題について関心を寄せられ学ばれている姿を見て、日本の医療制度が世界に誇ることできる一番の要因は先生方が前向きの姿勢をもっておられること、そしてその意識を育んだ医学部教育の成果であると確信しました。

昨年来の新型コロナウイルス感染症の影響で、医療に限らず社会の価値観が大きく変化しつつあると感じています。医師、研究者として活躍されている本会会員の皆様は、ますます重要な役割を果たされるものと確信しています。そのためには、岡山大学医学部の伝統の力を生かし会員の皆様が岡大医学部で培われた「絆」を大事にされ、各支部の更なる発展のためにも若手会員の方々の積極的な参画にご尽力いただき、活気ある運営がなされることを願ってやみません。

後任には、学内事情に精通し、人格、識見に卓抜した田口博之氏（平成28年3月医歯薬学総合研究科等事務部長を定年退職し、現積善会常務理事）が就任いたしますので、変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

新型コロナ禍のため誌面でのご挨拶になりますが、鶴翔会の更なるご発展と会員各位のご健勝をご祈念申し上げます。退職のご挨拶とさせていただきます。長い間お世話になり本当にありがとうございました。（妹尾 記）



このたび、永年、本会発展のため多大のご尽力をされました妹尾行恭事務局長の後任として、不肖の私が務めさせていただきますことになりました。

長い歴史と伝統を誇る岡山医学同窓会鶴翔会のさらなる発展を考えますとき、その責任の重さを改めて痛感し、身の引き締まる思いです。

私は、昭和50年岡山大学に採用され、平成28年3月、医歯薬学総合研究科等事務部長を最後に定年退職いたしました。その間、医療系キャンパスに約15年勤務させていただきました。

退職後も、同キャンパス内の一般財団法人積善会で、岡大病院への支援助成をはじめ、医学の教育研究助成などの事業を手掛けてまいりました。

こうした中、ご縁あって引き続きこのキャンパス内で仕事をさせていただける喜びを胸に、もとより微力ではございますが、鶴翔会の目的に則り、その運営をしっかりと進めてまいりたいと思っております。

ついでには、妹尾事務局長にも増して、ご厚誼とご指導を賜りますようお願いを申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。

（令和3年7月就任予定）

（田口 記）

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長（兼研究（医科）担当） 前田 嘉信  
 副病院長〔総務運営担当〕 森実 真  
 同〔企画・SDGs担当〕 大塚 文男  
 同〔診療（医科）・防災担当〕 増山 寿  
 同〔教育（医科）担当〕 伊野 英男  
 同〔医療安全管理担当〕 塚原 宏一

令和3年4月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文男	花山 宜久	萩谷 英大	小比賀 美賀子	長谷川 功	谷山 真規子
	消化器内科	岡田 裕之	高木 章乃夫	川野 誠司	岩室 雅也	松本 和幸	原田 馨太
	血液・腫瘍内科	前田 嘉信	松岡 賢市	西森 久和	大橋 圭明	藤原 英晃	浅田 騰
	呼吸器・アレルギー内科	木浦 勝行	松岡 賢市	西森 久和	大橋 圭明	谷口 暁彦	浅田 騰
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和田 淳	江口 潤	木野村 賢	竹内 英実	松本 佳則	江口 潤
	リウマチ・膠原病内科	和田 淳	松本 佳則	木野村 賢	竹内 英実	松本 佳則	江口 潤
	循環器内科	伊藤 浩		吉田 賢司	三好 亨	赤木 達	戸田 洋伸
	脳神経内科			森原 隆太	武本 麻美	柚木 太淳	森原 隆太
外 科	感染症内科	草野 展周					
	消化管外科	藤原 俊義	西崎 正彦	黒田 新士	重安 邦俊	田邊 俊介	前田 直見
	肝胆膵外科	八木 孝仁	榎田 祐三	黒田 新士	高木 弘誠	吉田 一博	藤 智和
	呼吸器外科	豊岡 伸一	山根 正修	枝園 忠彦	岡崎 幹生	山本 寛斉	三好 健太郎
	乳腺・内分泌外科	土井原 博義	平 成人	枝園 忠彦	平 成人	枝園 忠彦	高橋 侑子
	泌尿器科	渡邊 豊彦	荒木 元朗	和田 耕一郎	佐古 智子	枝村 康平	荒木 元朗
	心臓血管外科	笠原 真悟		小谷 恭弘	廣田 真規	川畑 拓也	衛藤 弘城
	小児外科	野田 卓男			納 所 洋	谷本 光隆	納 所 洋
感覚・皮膚・運動機能科	小児心臓血管外科	笠原 真悟					
	整形外科	尾崎 敏文	西田 圭一郎	島村 安則	雑賀 建多	中田 英二	藤原 智洋
	形成外科	木股 敬裕	難波 祐三郎	渡邊 敏之	妹尾 貴矢	松本 洋	妹尾 貴矢
	皮膚科	森実 真	山崎 修	平井 陽至	横山 恵美	三宅 智子	梶田 藍
	眼科	森実 祐基		塩出 雄亮	藤原 美幸	細川 海音	濱崎 一郎
脳・神経・精神科	耳鼻咽喉科	安藤 瑞生	假谷 伸	片岡 祐子	菅谷 明子	牧野 琢丸	前田 幸英
	精神科神経科	山田 了士	寺田 整司	井上 真一郎	岡久 祐子	竹之下 慎太郎	藤原 雅樹
	脳神経外科	伊達 勲	安原 隆雄	菱川 朋人	藤井 謙太郎	平松 匡文	春間 純
小児・産科・女性科	麻酔科蘇生科	森松 博史		清水 一好	松岡 義和	松崎 孝	谷 真規子
	小児科	塚原 宏一	岡田 あゆみ	馬場 健児	藤井 智香子	榮 徳隆裕	吉本 順子
	小児循環器科	大月 審一					
	小児神経科	小林 勝弘	秋山 倫之	秋山 倫之	柴田 敬	土屋 弘樹	秋山 麻里
	小児血液・腫瘍科	塚原 宏一					
	小児麻酔科	岩崎 達雄					
	小児放射線科	松井 裕輔					
放射線科	小児心身医療科	岡田 あゆみ					
	産科婦人科	増山 寿	中村 圭一郎	中村 圭一郎	早田 桂	小川 千加子	久保 光太郎
	放射線科		平木 隆夫	松井 裕輔	富田 晃司	宇賀 麻由	児島 克英
	救命救急科	中尾 篤典	内藤 宏道	内藤 宏道	塚原 紘平	藤崎 宣友	小崎 吉訓
	病理診断科	柳井 広之		都地 友紘			西田 賢司
	緩和支援医療科	田端 雅弘	片山 英樹				
	臨床遺伝子診療科	平沢 晃	河内 麻里子	山本 英喜	河内 麻里子		山本 英喜

## 鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数(程度)	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部(病院)の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
  2. 4月号のメ切は1月末、10月号のメ切は7月末です。
  3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないと  
思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
  4. 原稿、挿絵はデータ(一太郎、word、JPEG等)にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、  
紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。
- ※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7052

E-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## 編 集 後 記

会報130号をお届けします。

今冬は例年になく厳寒の期間がありましたが、諸先生方にはお変わりありませんか。また、新型コロナウイルス感染症対応でご苦労されていることに敬意と感謝を申し上げます。

今春、110名の卒業生を送り出しました。今回の卒業生は新型コロナウイルス感染症の中、従前とは異なる環境下で医学部医学科の最終学年を過ごしたタフな卒業生です。各自の目指す医療人、研究者となるべく何事にも果敢に挑戦し幾多の壁を乗り越えて前進してくれると確信しています。新たに迎えたフレッシュな新入生は、新型コロナウイルス感染症下、新しい入試制度を突破した頼もしい若者です。岡山大学での成長に大いに期待すると共に、諸先生方のご指導よろしくお願い申し上げます。

人体構成学 大塚愛二教授、薬理学 西堀正洋教授、医療政策・医療経済学 浜田淳教授、病院長（放射線医学）金澤右教授、薬剤部 千堂年昭教授の5名の先生が定年退職されました。永年にわたり医学部の教育

研究、企画・運営にご尽力いただき、ありがとうございました。ご退職後も、引き続き、ご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。

創立150周年を無事迎えることが出来ました。地元岡山の経済界、関連病院をはじめ多くの個人、団体から絶大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。念願の旧生化学棟大講堂の改修工事も完成しました。鶴翔会の多くの会員が新型コロナウイルス感染症対応に日々奮闘中であり、2020年は記念式典を延期せざるを得ませんでした。内容を少し変更して11月3日（水・祝日）に記念式典を予定しています。会員の先生方と一緒に150周年を祝い、次代へ続く第一歩を踏み出したいと思っています。

新型コロナウイルス感染症は予測不能な状況ですが、英知を集めて対応し乗り越えていくことが出来るかと確信しています。

春がやってきました。たまには花を楽しみ春風に吹かれてみましょう。

（伊達 勲）

発行 鶴翔会（岡山医学同窓会）  
会報幹事 伊達 勲  
鶴翔会会報編集委員 阿部康二、  
大塚愛二、大橋俊孝、金澤 右、  
木浦勝行、伊達 勲、頼藤貴志、  
豊岡伸一、山田了士、森実 真、  
柳井広之、久保俊英（岡山医療セ  
ンター）、関 美月（医学科6年）  
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1  
電 話 (086) 235-7060・7061  
F A X (086) 235-7052  
E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp  
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mdosokai/>  
印 刷 友野印刷株式会社  
電 話 (086) 255-1101  
F A X (086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。

## 鶴翔会会員向けサービスのご案内

### ○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。パンフレットを鶴翔会ホームページに掲載していますが、ご連絡をいただければお送りいたします。

#### 特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、断然保険料がお得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入又はパンフレットを希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局まで TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052  
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

### ○ クレジットカードサービス



2021年2月現在

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して、「VISAゴールドカード」と「Visa・Mastercard 加盟店契約」をご案内しています。

▶特別年会費のVISAゴールドカード(会員の先生が開業されている場合、従業員の方もお申込みできます)

- VISAゴールドカード年会費が2,750円(税込)(⇔通常11,000円(税込))
- ロードサービスVISAゴールドカード年会費が3,300円(税込)(⇔通常12,100円(税込))  
\*割引はどちらも2年目以降も続きます。また、ご家族会員年会費は1,100円(税込)です。
- キャンペーン実施中!!(2021年8月31日まで)  
→1,000円キャッシュバック(本会員・家族会員)



▶Visa・Mastercard 加盟店契約

- ご利用見込額等に応じた優遇手数料となります。
- キャンペーン実施中!!(2021年8月31日まで)  
→クレジット端末1台が本体・工事費とも無料です。

[端末の一例]



＜ご留意事項＞

- カード申込・加盟店契約申込ともにカード会社所定の審査がございます。
- 加盟店契約申込において、すでにVJAグループのカード会社と加盟店契約のある会員様は対象外となります。

※詳しい資料、お申込書の請求は、三井住友トラスト・カード(株)まで  
FAX:03-6737-0834 メール: Moushikomi@smtcard.jp  
電話:0120-370-070(通話無料) <受付9時~17時(土・日・祝日・12/30~1/3休)>

- ◎必ず、「鶴翔会会員であること」、「お名前」、「ご住所」、「電話番号」、  
「希望サービス(カード・加盟店)」をお伝えください。



個人情報の取扱いに関する同意文言:私は申込書請求のために提供する個人情報を貴社が次の目的達成のために利用することに同意します。  
(弊社が個人情報の保護に関する法律に基づき適正な保護を講じた上で、管理・利用させていただきます。なお、個人情報の利用目的およびその範囲については、お申込書送付先にVISAカード入会申込書・加盟店の資料等を送付することに限定します。)

## 裏表紙の写真

### 基礎研究棟

第一期工事(2000年3月)、第二期工事(2009年3月)を経て一つの建物として竣工。

主に基礎系分野が入居しており、次代を担う医学生、大学院生の教育研究及び育成に注力している。また、臨床系と連携した研究活動も行われており、医学系による社会還元の前動力として期待されている。



# 鶴翔会

岡山医学同窓会報